
バカと天才？たちと召喚獣

SHIN.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと天才？たちと召喚獣

【Nコード】

N1068Z

【作者名】

SHIN .

【あらすじ】

科学とオカルトと偶然によって開発された「試験召喚システム」を試験的に採用し、学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こした文月学園。

そこに二年の振り分け試験直前に転校してきた7人の天才？とFクラスのバカたちとAクラスの優等生たちが繰り広げる学園物語です。この作品が処女作ですので駄文+亀更新になるかもしれませんがそれでもよければ読んでください。

プロローグ（前書き）

はじめまして、SHIN・と申します。

文才もなく、駄文になるかもしれませんが、よろしくお願ひします。

プロローグ

振り分け試験日

明久side

時刻8時55分

「おはよーございます鉄・・・西村先生！」

鉄人「吉井、遅刻・・・なぜそんなにボロボロなんだ？」

「いやーくる途中にチンピラに絡まれてる女の子を助けてたら遅れちゃって〜」

鉄人「くだらん冗談はいいから早く服を着替えて試験会場に行け（まったくこのバカは・・・）」

「はい！」

僕は校門前で鉄人に挨拶してから、更衣室で体操服に着替えてから試験会場へ向かった。

「おはよー雄二」

雄二「ん？遅かったなバカ久」

明久「来て早々人を罵倒しないでよ！僕はバカじゃないし！雄二も大差ないじゃないか！」

康太「・・・振り分け試験の日に遅刻する奴なんてバカしかいない」

島田「仕方ないないわよ、吉井はバカなんだし」

「みんな酷い！これにはひじょ〜に深い訳が・・・」

秀吉「まさか振り分け試験のときに遅刻とはもう・・・」

「だからちがうつてば！」

雄二「なら何故遅刻したんだ？」

「それには深〜い事情があつて・・・」

雄二・秀吉・康太・島田「・・・」
（・・・）寝坊（だな！）（じゃ

な！）（ね！）「「「」

「待つて！まだ何もいつてないよね！？」

大島先生「次の教科の試験始めるから全員席に着けよー」

振り分け試験終了後

「これならCクラスくらいいいけたんじゃないかな？」

雄二「安心しろ明久、お前はFクラスで確定だ」

「なんだと！10問に1問は書けたはずだからDにはいつてるはずさ！」

4人（（（（やっぱり吉井はバカだな））））

明久「みんなどうして僕をあわれむような目でみるの？」

明久side out

優璃side

優璃家にて

時刻20時30分

「ハア……（今日の朝、変な人たちに絡まれていた私を助けてくれた人……たしか文月学園の制服着てたよね？ならまた会えるかな？）」

葵「どうかしたの？優璃」

「ううん、なんでもないよ！」

葵「それならいいけど」

「それより葵、振り分け試験受けなくてよかったの？」

葵「いいのいいの、私は演劇ができればどのクラスだっていいし、

麗奈も心配だしね」

葵は笑顔でそう答えた。

麗奈「……ごめんなさい」

葵「麗奈が謝ることはないでしょ」

「そうだよ」

麗奈「・・・でも」

葵「気にしないの、それに和くんもFクラスだから」

「え？和くんはAクラスのボーダー越えてたはずだけど・・・」

麗奈「・・・和くん寝坊したんだって」

「なにやってるの和くん・・・」

葵「まさか振り分け試験の日に寝坊するとは・・・」

ピンポン

「誰かな？」

葵「ちよつといつてくるね」

和哉「お邪魔しま〜す」

葵「噂をすれば・・・だね」

和哉「???」

「寝坊くん、どうしたの？」

和哉「うっ!?!?どうしてそれを」

「葵から聞いた〜」

和哉「葵さん!どうしてしってるんですか、今日試験受けてないでしょ!?!」

葵「学園にいる知り合いに聞いたんだよ、小学生が振り分け試験に遅れてきたって」

和哉「小学生じゃない!」

「試験の前の日に夜更かしして寝坊するくらいだから説得力ないけどね〜」

和哉「・・・(シクシク)」

麗奈「・・・ところで優璃は大丈夫なの？」

「私は多分問題ないとおもっけど」

麗奈「・・・優璃とも一緒のクラスがよかった」

「来年は同じクラスになれると思うよ、麗奈も頑張ってるし」

麗奈「・・・来年はみんなでAクラス」

葵「そういえば、宗くと薫ちゃんと蓮くんは？」

麗奈「・・・薫は問題ないって言った」

「宗くと蓮くんは特例で別の日に振り分け試験受けたらしいよ」

麗奈「・・・あの3人はAクラス確定のはず」

葵「そうだね」

「そういえば次の登校日っていつだっけ？」

葵「たしか始業式の日だよ」

「そうだったね、はやく学園に行きたいんだけどね（あの人に早く会いたいし）」

葵「そうだね。さてと、それじゃあ麗奈の日本語の勉強でも手伝うよ」

麗奈「・・・ありがとう」

「和くん・・・いつまで泣いてるの・・・」

和哉「・・・僕は小学生じゃない・・・（シクシク）」

優璃 side out

第1話 & 1 t ・ 転校生たちと自己紹介 & g t ;

明久 s i d e

鉄人「遅いぞ！吉井！」

「おはようございます西村先生！」

鉄人「吉井・・・おはようございますじゃないだろう」

「え？ えーつと・・・今日も肌が黒いうえに暑苦しいですね？」

鉄人「お前は遅刻の謝罪より、俺を罵倒する事と肌の色の方が大事なのか？・・・まあ良い、受け取れ」

「掲示板とかに張り出したほうが楽じゃないですか？」

鉄人「まあそれもそうなんだがな、ウチは試験校として有名だから色々問題があるんだ」

「へえ、さて何クラスかなつと（きつとDくらいは・・・）」

もらった封筒の端を破き、中に入っていた紙をみると。

『吉井 明久・・・Fクラス』

二年Fクラスの前。吉井明久は躊躇していた。

「遅刻なんてして、みんなの印象悪くなってないかな・・・？」

「なんて考えすぎだよな！」

軽快に扉を開けて入った。

「すみません。ちょっと遅れちゃいました」

雄二「早く座れこのウジ虫野郎！」

(・・・へ?)

雄二「聞こえなかったのか？ああ？」

(それにしてもなんて物言いだろう。いくら教師でも失礼すぎる。)
僕はにらみつけるように教壇に立っている教師を見た。

「・・・雄二、何やってんの？」

教壇にいたのは明久の悪友、坂本雄二だった。

雄二「先生が遅れてるらしいから代わりに教壇に上がって見た、なんか転校生がこのクラスに来るらしいぞ」

明久「そうなんだ」

F「「「「なにー！？」転校生だとおおお！？」」」」

F「男か！？女か！？」

雄二「男子1人、女子2人らしいぞ」

F「「「女子がくるぞー！！」」」

F「「「「うおおおお！！」」」」

「で、何で雄二が先生の代わりを？」

雄二「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

雄二「ああ、そうだ」

(雄二さえ説得すればこのクラスは僕の思いどおりに・・・)

雄二「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

(考えることは、同じなんだな)

「それにしてもさすがはFクラス。ひどい設備だね」

Fクラスの面々はみんな床に座っている。椅子なんてものはないらしい。

福原先生「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

そこには寝癖のついた髪によれよれのシャツを貧相に着た、いかにもさえない風体のオジサンが居た。

このクラスの担任だ。

福原先生「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

僕と雄二がそれぞれ返事をして席に着く。

先生は明久たちを待ってから壇上でゆっくりと口を開いた。

福原先生「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。

よろしく願います。」

福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。

チヨークすらまともに見えないみたいな。

福原先生「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください」

F「せんせー、座布団に綿が入ってないです」

福原先生「我慢してください」

F「せんせー、卓袱台の足が折れました」

福原先生「ボンドで直してください」

F「せんせー、窓が割れてて隙間風が寒いです」

福原先生「ビニール袋とセロハンをあげますから直してください」

(・・・ひどすぎる)

福原先生「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、転校生からやってもらいましよう。一ノ瀬君、川崎さん、水無月さん、入ってきてください」

福原先生がそう言うのと、転校生の3人(小学生の男の娘と長い黒髪を後ろで束ねている女の子とセミロングの金髪の女の子)がFクラスに入ってきた。

福原先生「まず、一ノ瀬君。軽く自己紹介してください。」

和哉「えっと、一ノ瀬 和哉といいます。趣味は絵を描くことです。一年間よろしくお願いします」

F「どこからどうみても小がk・・・ひっ!？」

(な・・・なんだこの殺気は!?)

和哉「僕は小学生じゃないですので間違えない様をお願いします(ゴゴゴゴ・・・)」

一ノ瀬君は黒いオーラを出しながらF生徒にそう言い放った。

福原先生「つつ次は、川崎さん。自己紹介を。」

葵「川崎 葵です。部活は演劇部に所属する予定です。一年間よろしくお願いします。」

長い黒髪を後ろで束ねている子がそう言った。

秀吉「葵殿ではないか!？どうしてここにいるのじゃ?」

「秀吉の知り合い?」

秀吉「まあ、そんなところじゃ」

葵「あ、秀吉君もFクラスなんだ？」

秀吉「うむ。しかし葵殿はAクラス確実の成績だったはずじゃが？」

葵「麗奈が心配だったから。振り分け試験受けなかったんだよ。」

福原先生「え、雑談は後にしてください。」

葵「あ、すみません」

福原先生「水無月さん、自己紹介を」

麗奈「・・・はい。・・・水無月 麗奈です。・・・よろし

くお願いします。」

と、綺麗な金髪の女の子が言った。

F「質問いーですかー？」

麗奈「・・・はい」

F「親が外国人なんですか？」

麗奈「・・・母がイギリス人」

葵「ちなみに最近までイギリスにいたから、少し日本語が苦手だか

ら話すときはゆっくり話してあげてね」

(帰国子女か・・・島田さんと同じで大変なんだろうなあ・・・)

福原先生「次は、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

秀吉「木下 秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

(秀吉、今日もかわいいなあ)

秀吉「よく間違われるが僕は女子ではなく男子じゃ・・・」

和哉(木下君も苦労してるんだね・・・)

康太「・・・土屋 康太・・・特技は盗りじゃなくて盗s・・・特

にない」

和哉(・・・聞かなかったことにしよう)

島田「島田 美波です。海外育ちで日本語は会話出来るけど読み

書きが苦手です。趣味は吉井 明久を殴ることです」

明久「誰だ！そんなピンポイントで危険な趣味を持つてる子は！？」

和哉・葵(あの子とはあまり関わらないほうが良さそう)

あとは名前をいうだけというのが続き、明久の順番までまわってきた。

「コホン。え〜っと、吉井 明久です。気軽に『ダーリン』と読んでくださいね」

F「『『『『『ダーリンイイーリン!!!!!!』』』』』」

(凄い威力だ・・・吐き気が止まらない)

「・・・失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」
僕が自己紹介を終えると・・・

姫路「あの、遅れて、すみま、せん・・・」

F×4「え？」

福原先生「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願ひします」

姫路「は、はい！ あの、姫路 瑞希と言います。よろしく願ひします！」

F「はいっ！ 質問です！」

姫路「あ、はいっ。なんですか？」

F「どうしてここにいますか？」

姫路「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまっています・・・」

F「そういえば、俺も熱(の問題)が出たせいでFクラスに」

F「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

F「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

F「黙れ1人っ子」

F「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

F「今年一番の大嘘をありがとう」

(僕以外もみんなバカばっかじゃないか・・・)

姫路「で、ではっ、今年1年よろしく願ひします！」

姫路は逃げるように、僕と雄二の間の空いてる席に着いた。

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしま

う。
「姫路さん、体調はもう大丈夫なの？」

姫路「あ、吉井君。だいぶ良くなりましたよ。」

「そっか、よかった」

福原先生「はいはい。静かに・・・」

バンバン！！・・・バキッ！

教卓が木っ端微塵になった。

（さすがに酷すぎるよ）

福原先生「え〜。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしていてくださいね」

「・・・ねえ雄二、ちよつと良い？」

雄二「ん？なんだ？」

和哉（おもしろそうだから、盗み聞きしようかな）

雄二を伴い廊下に出た。

姫路「吉井君、どうしたんでしょうか？」

葵「姫路さん、吉井君が気になるの？」

姫路「え？、えつと」

葵「川崎 葵です。姫路さん、よろしくね。」

麗奈「・・・水無月 麗奈」

姫路「こ、こちらこそよろしくお願いします」

廊下にて。

「ねえ雄二、試召戦争を仕掛けてみない？」

雄二「この前学校の設備なんざどうでもいって行ってなかったか？・・・姫路のためか？」

「ち、違うよ!？」

雄二「素直じゃねえな。まあどうせ、試召戦争はやるつもりだった。世の中学力こそがすべてじゃないって事、その証明がしてみたくてな」

和哉（新学期初日から仕掛けるのか・・・ま、とりあえずはFクラ
ス代表の手腕をみせてもらいますか）

雄二「先生が戻ってきたみたいだし、戻るぞ」

再び教室にて。

福原先生「えーと、坂本君キミが最後ですよ。クラス代表でしたよね？前に出てきてください」

雄二「了解、Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

雄二「コホン。さて、皆に一つ聞きたい。・・・Aクラスは超豪華待遇らしいが・・・不満はないか？」

F×41「大アリじゃあッ！」

雄二「だろう？俺だつてこの現状は大いに不満だ！」

F「いくら学費が安いからつてこの設備はあんまりだ！」

F「Aクラスだつて同じ学費だろ！？」

F「改善を要求する！！」

雄二「そこで代表としての提案だがFクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

第2話 & 1 t ; D クラスに宣戦布告へ & g t ;

雄二「そこで代表としての提案だがFクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

F「そんなの勝てるわけがないだろ？」

F「これ以上設備が落ちたらどうなるんだ」

F「姫路さんがいたら何もいらぬ！」

F「麗奈さんがいるだけで僕は満足です！」

雄二「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

F「無理に決まってやるじゃん」

F「そう言われても何の根拠もないしなあ・・・」

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二は自信ありげにそう宣言した。

雄二「おい康太、いつまで姫路と川崎、水無月のスカートを覗いてるんだ」

3人「・・・えっ!?!?」

3人は素早くスカートを押さえた。

雄二「土屋 康太 こいつがああ有名な寡黙なる性職者だ」
そういつと康太は首を横に振った。

F「馬鹿な・・・奴がそうだといいのか？」

F「見る！まだ証拠を隠そうとしているぞ・・・」

F「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

雄二「それに姫路の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

姫路「え？私ですか？」

(姫路さんは学年トップ5に入っているほどの学力だからね)

雄二「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

F「そうだ！俺達には姫路さんがいる！」

F「彼女ならAクラスにも引けをとらない！」

雄二「それに木下 秀吉だっている」

秀吉「ワシもか？」

F「演劇部のホープ！」

F「確かAクラスに木下 優子っていう姉がいただろ」

雄二「そのほかに島田もいる」

島田「えっウチ？」

雄二「島田は数学だけならAクラスにも匹敵する。当然俺も全力を尽くす」

F「坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ」

F「確かになんかやれそうな気がしてきたぞ」

F「これはいけるんじゃないか!？」

F「よし! やってやるうじゃねーか!！」

教室の士気が高まっていったが・・・

雄二「それに吉井 明久だっている」

シーン・・・

F「誰だよその吉井 明久って」

「雄二。何でそこで僕の名前をだすのさ!？せつかく上がった士気が台無しじゃないか!」

雄二「そうか、知らないのなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ!！」

F「確か観察処分者って『馬鹿の代名詞』じゃなかったっけ？」

「ちつ違つよ!！ちよつとお茶目な16歳の愛称で・・・」

雄二「そうだ『馬鹿の代名詞』だ」

「肯定するなバカ雄二!！」

姫路「あのそれってどういうものなんですか？」

雄二「観察処分者っていうのは具体的には教師の雑用係だな。

力仕事とかの雑用を特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすんだ」

姫路「それって凄いですね! 試験召喚獣って見た目と違って力持ち

らしいですし」

姫路さんが僕に期待の眼差しを向けている。

「あはは。そんな大したものじゃないよ。確かに僕なんかの点数でも召喚獣の力はかなり強いけど、その時受ける召喚獣の負担の何割かは僕にフィードバックされるんだ。皆と同じで教師の監視下でしか呼び出せないし、僕にメリットもないしね」

F「おいおい・・・じゃあ召喚獣がやられたら本人も苦しいって事だろ？」

F「だよな・・・それならおいそれと召喚できないヤツがいるって事じゃん」

雄二「気にするな！明久はいてもいなくても大して変わらん雑魚だ」
「・・・雄二そこは僕をフォローするところだよな」

葵「坂本君、さすがに酷すぎない？」

「川崎さん・・・」

葵「葵でいいですよ」

「葵さん・・・ありがとう」

雄二「まずは俺達の力の証明としてまずDクラスを制圧しようと思う。皆この境遇に大いに不満だろう？」

F「・・・当然だ！！」

雄二「なら全員筆を執れ！！出陣の準備だ！」

F「・・・」
「おおーーーーーッ！！」
「・・・」

姫路「おッおー／／／」

姫路さんも恥ずかしげに手をあげていた。

雄二「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう」

「ねえ雄二今字が間違ってた？それに下位勢力の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

雄二「大丈夫だ。騙されたと思って行って来い」

和哉「一緒に行こうか？」

麗奈「・・・私も」

「えっ？一ノ瀬君に水無月さん、いいの？」

和哉「和哉でいいですよ」

麗奈「・・・麗奈でいい」

「ならこっちも明久でいいよ。それじゃあ行こうか、和哉君に麗奈ちゃん」

和哉・麗奈「（・・・）はい」

こうして3人でDクラスに向かった。

オリキャラ紹介(1) (前書き)

タイトルの通りオリキャラ紹介です。

オリキャラ紹介(1)

名前：神谷 優璃

読み：かみや ゆり

性別：女

誕生日：7月10日

身長：153cm(B)

所属クラス：2-A(代表)

得意教科：英語

苦手教科：数学

趣味：読書・ゲーム

特技：料理

外見：髪色・髪型は霧島にそっくりだが、体格は霧島よりややスレンダーで、顔は綺麗というよりは可愛い系。

性格：恥ずかしがり屋だが、意外と頑固者。人を見下す奴が大嫌い。

・振り分け試験直前に転校してきた天才?の一人。

・明久と同じマンションに(川崎 葵)(水無月 麗奈)と共に住んでいて隣同士。

・実は大財閥のご令嬢。

召喚獣の武器：サーベル(二刀流)

召喚獣の服装：西洋風の鎧

腕輪の能力：現時点では不明。

*

名前：川崎 葵

読み：かわさき あおい

性別：女

誕生日：4月17日

身長：156cm(C)

所属クラス：2-F

得意教科：古典・現国・英語

苦手教科：数学・物理・化学

趣味：演技の練習、演劇鑑賞

特技：演技、声帯模写

外見：黒髪長髪を後ろでくくっている。美人ではあるが、男の子より演劇命なので、モテてはいるものの、すべて断っている。

性格：温厚な性格だが、友達や演劇をバカにされると人が変わったかのように怒りを表す。

・振り分け試験直前に転校してきた天才？の一人。
・明久と同じマンションに（神谷 優璃）（水無月 麗奈）と共に住んでいて隣同士。

・秀吉とは少しだけ面識がある。
・振り分け試験は（水無月 麗奈）があまりにも心配だったため、わざと受験しなかった（実は総合科目で霧島 翔子2倍以上の点数差をつけるほどの学力をもっている）。

召喚獣の武器：輪刀

召喚獣の服装：巫女服

腕輪の能力：現時点では不明。

*

名前：水無月 麗奈

読み：みなづき れな

性別：女

誕生日：2月21日

身長：155cm (B)

所属クラス：2-F

得意教科：英語・数学・化学・物理

苦手教科：それ以外（半分近くは一桁）

趣味：料理・お菓子作り

特技：料理・お菓子作り・裁縫

外見：髪は肩にかかるくらい金の髪で、顔は目鼻立ちもよく、前いた学校ではファンクラブができるほどの美女。

性格：重度の人見知りで、Fクラスでは基本的に、葵・和哉・明久・秀吉以外とは基本は話さない。

- ・振り分け試験直前に転校してきた天才？の一人。
- ・生まれてから人生のほとんどを外国ですごしているため、日本語がほぼわからない。（普段の会話程度ならなんとかなる。）
- ・明久と同じマンションに（神谷 優璃）（川崎 葵）と共に住んでいて隣同士。
- ・振り分け試験は問題がほとんど読めないため、Fクラス入り。

召喚獣の武器：弓矢

召喚獣の服装：法服

腕輪の能力：現時点では不明。

*

名前：一ノ瀬 和哉

読み：いちのせ かずや

性別：男

誕生日：3月26日

身長：141cm

体重：30kg

所属クラス：2-F

得意教科：物理・化学・数学

苦手教科：日本史・世界史・古典

趣味：読書・絵を描くこと

特技：絵を描くこと

外見：髪色・髪型は明久によく似ている。顔は小学生の男子から告
白されるほど。その体格のおかげで、制服を着ても小学生にみら
れるほど。

性格：見かけによらずしっかり者でちょっと腹黒い一面も。

・振り分け試験直前に転校してきた天才?の一人。

・文月学園の3-Aクラスに異母兄弟の姉と兄がいるが、とある出
来事以来、離縁状態。

・振り分け試験は遅刻し得意教科の理系3教科を受験できず、Fク
ラス入り。

召喚獣の武器：両手にトンファー

召喚獣の服装：黒の改造学ラン

腕輪の能力：爆破（自分の点数を消費してトンファーを爆弾にかえ
る。その爆弾の威力は点数消費に比例する）

第3話 & l t ・ 作戦会議 & g t ; (前書き)

最近急に寒くなってきたとちょっと風邪気味です・・・

第3話 & 1 t ・ 作戦会議 & g t ;

「ただいま雄二、Dクラスに宣戦布告してきたよ」

雄二「おい、明久ちよつといいか？」

「ん？どうしたの雄二？」

雄二「いや、ぶっちゃけお前が酷い目に遭うと思っていたんだが・・・」

「ああ、うん。和哉君が嘘泣きでもしてDクラスの人たちの気をそらしてくれなければ絶対酷い目に遭ったね。」

雄二「まあいい(無事だったか)、今からミーティングを行う！明久、宣戦布告してきたんだな」

「一応、今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

葵「じゃあ、先にお昼ご飯だね」

雄二「そうするか。明久、今日ぐらいはまともな物食べるよ？」

「そう思うならパンでもおごつてよ」

麗奈「・・・明久君お昼ご飯食べない人？」

「いや・・・一応食べてるよ」

秀吉「・・・あれは食べてると言えるのかの？」

康太「・・・明久の主食は水と塩」

「失礼な！！僕をバカにするのも程がある！きちんと砂糖も食べてるよ！」

和哉「それは食べてるとは言わないよ」

葵「正確には舐めるが正解だね」

(何だろう？皆が同情の眼差しを向けてくる)

雄二「まっ飯代を遊びに使い込むお前が悪いな」

「しっ仕送りが少ないんだよ！」

姫路「あの・・・吉井君、もしよかったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？いいの姫路さん!？」

姫路「はっはい明日のお昼でよければですが・・・」

「うん！塩と砂糖以外のものなんて久しぶりだよ！」

島田「・・・ふうん。瑞希って優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

姫路「えっあツいえ！／＼その皆さんにも・・・」

和哉「僕たちにも？いいの？」

姫路「はい。嫌じゃなければ」

秀吉「おお、明日の昼は豪華になりそうじゃのう」

康太「・・・楽しみ」

雄二「じゃあ明日の昼は姫路に任せるとして。さて話を戻すぞ。試召戦争についてだ」

島田「ねえ坂本。1つ気になったんだけど、どうしてAでもEでもなくDクラスなの？」

雄二「色々理由はあるんだがEクラスは相手じゃないからだ」

和哉「姫路さんがいるから、正面からやりあってもEクラスには勝てるだろうからかな？」

雄二「その通りだ」

島田「それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

雄二「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「なら初めから目標のAクラスを狙おうよ」

雄二「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？」

それに、打倒Aクラスの作戦における必要なプロセスだしな」

「でも、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ」

雄二「負ける訳ないさ、お前らが俺に協力してくれるなら勝てる・・・いいか、お前ら。ウチのクラスは・・・最強だ！」

島田「良いわね。面白そうじゃない！」

秀吉「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの！」

康太「・・・(グッ)」

姫路「がっ頑張ります！」

麗奈「・・・頑張る(優璃たちとは戦いたくないんだけど・・・)」

葵「あ、私、振り分け試験受けなかったから0点なんだけど」

和哉「僕も受けてない教科があるんだけど」

雄二「問題ない、開戦と同時に姫路と川崎と一ノ瀬には回復試験に向かってもらうからな。それじゃあ作戦を話すぞ」

そして、僕達は勝利のため雄二の作戦に耳を傾けた。

第3話 & l t ; 作戦会議 & g t ; ; (後書き)

次回はAクラスの転校生の話。

その次にFクラス対Dクラスの予定です。

第4話&1t:Aクラスの転校生たち>(前書き)

今回はAクラスsideの話です。

第4話&1t；Aクラスの転校生たち>；

Fクラスで自己紹介が行われているころ。

優璃 side

職員室にて。

高橋先生「君たちが転校生の3人ですね？」

宗一郎・薫・私「はい」

高橋先生「あとの1人はどこにいますか？」

薫「神楽坂君は親に呼び出されて今、帰省中らしいです」

高橋先生「わかりました。ひとまず、Aクラスに向かいますか？」

「

Aクラス前。

高橋先生「それではここで呼ぶまで待っていてください。」

宗一郎・薫・私「わかりました」

Aクラスにて。

高橋先生「皆さん、席について下さい。」

生徒たちが全員席に着いたところで、

高橋先生「皆さん、進級おめでとうございます、2・Aクラスの担任の高橋 洋子です。今年一年間よろしく願います」

高橋先生「皆さん全員にリクライニングシート、個人エアコン、冷蔵庫、パソコンは支給されていますか？不備があれば申し出て下さい」

・・・シーン・・・

高橋先生「特にないようですね、では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、転校生からやってもらいましょう。神谷さん、桐

谷くん、武内さん入ってきてください。」

3人「はい」

高橋先生「それではまず、武内さん、自己紹介をお願いします」

薫「武内 薫です 一年間よろしくお願いします」

A「うちの学園って女子のレベル高いよな」

A「だよな」

高橋先生「次は桐谷君、学年次席として自己紹介をお願いします」

宗一郎「桐谷 宗一郎だ。一応、学年次席だ。一年間よろしく・・・

あと、薫に手を出したらコロ（ゴホン！）なんでもありません」

A男子全員（武内さんには手をだしてはいけない！）

高橋先生「次は神谷さんですね。では、2・Aクラス代表として、

自己紹介をお願いします」

A×45「え？」

「えつと、（うう、緊張する・・・）クラス代表になりました神谷

優璃です。・・・至らぬ所もあるかもしれませんが、一年間よろ

しくお願いします」

A「てつきり霧島さんが代表だと思ってたよ」

A「つてことは神谷さんと桐谷くんは霧島さんより成績いいんだね・

・・・」

高橋先生「私語は謹んでください」

A×2「すみません」

高橋先生「それでは、自己紹介の続きを廊下側の人から自己紹介を

お願いします」

自己紹介終了後。

「はあ〜緊張した〜・・・」

薫「優璃は本当に恥ずかしがり屋だね〜」

宗一郎「だな」

翔子「・・・神谷、高橋先生が呼んでる」

「あ、はい、わかりました。あと優璃でいいですよ」

翔子「・・・ならそう呼ばせてもらおう」

「とりあえず職員室に行って来ますね」

宗一郎「いってらう」

職員室にて。

「なにか用ですか？」

高橋先生「ええ、午後の授業はFクラス対Dクラスの試召戦争があるので自習になりますので、この日本史の課題プリントをAクラスの生徒に渡しておいてください」

「わかりました」

Aクラスにて。

薫「まさか新学期初日から試召戦争仕掛けてくるとは思わなかったなあ」

愛子「だよな」

「えっと、工藤さんでしたよね？」

愛子「うん、そだよ、よろしくね優璃ちゃん、薫ちゃん、桐谷君」

「う、うん（薫みたいな人ですね・・・）」

宗一郎「よろしく」

薫「よろしく」で、そつちの2人は木下さんと久保君だった？」

優子「ええ、そうよ。ところで、代表は高橋先生と何を話してたの？」

薫「なんでもFクラスとDクラスが試召戦争をするから午後は自習でそのプリントを渡しておいてだってさ」

利光「どういうことだい？振り分け試験直後なんだから、クラスの差は点数の差になるんじゃないのかい。Fクラスに勝ち目なんてないだろうに」

優子「久保君の言う通りだし、初日から仕掛けるなんていい迷惑だわ」

薫「おもしろそうだしいいんじゃない？私はパソコンで試召戦争の様子でも観てようかな」

愛子「ボクもそうしようかな」

「・・・薫、工藤さん、自習プリント終わってからにしてね」

薫・愛子「え」

優子「『え』じゃないわよ愛子、武内さんも」

薫「名前呼び捨てで構わないよ」

宗一郎「喋る前に課題を終わらしたらどうなんだ？」

薫「ぶっ宗ちゃん冷たいなあ」

「で、宗くんはどっちが勝つとみてるの？」

宗一郎「Fクラスが勝つだろうな」

翔子「・・・私もFクラスが勝つと思う」

愛子・優子・利光「・・・え？なんで？」

宗くと翔子の発言に3人は疑問に思ったらしい。

宗一郎「根拠ならあるぞ、去年の学年末試験の結果を高橋先生に見

せてもらったんだが、その時の学年主席が霧島で、学年次席・・・」

利光「姫路さんだね」

宗一郎「そうだ、これほどの成績の持ち主ならAクラス確実のはず

だろう？」

優子「たしかにそうね」

愛子「でも、Aクラスにいないよね？あと1人は転校生らしいし」

美穂「あ、あの」

利光「ん？どうかしたのかい？佐藤さん」

美穂「今の話なんですけど、たしか姫路さん、振り分け試験の最中に高熱で倒れたらしいですよ」

「たしか途中退室は0点だから、多分その人はFクラスにいるね」

愛子「姫路さんがいるならDクラスには勝てるかもね」

宗一郎「まあ、それだけじゃないんだけどな」

薫「とりあえず、観戦しようよ」

優子「そうね」

愛子「そだね」

利光「そうだね」

「薫は課題終わらしてからね」

薫「そんな殺生な〜・・・って、いつの間にか皆、課題終わらしてるし・・・」

宗一郎「薫〜さっさと終わらせろよ〜」

薫「保健体育ならすぐ終わるのに〜・・・」

優璃 side out

オリキャラ紹介(2)・試召戦争のルール(前書き)

今回はAクラスのオリキャラ(転校生)の紹介です。

ところで前書きって何を書けばいいんでしょうか？

オリキャラ紹介(2)・試召戦争のルール

名前：桐谷 宗一郎

読み：きりや そういちろう

性別：男

誕生日：5月3日

身長：184cm

体重：66kg

所属クラス：2-A

得意教科：現代社会

苦手教科：保健体育

趣味：モデルガン収集・ゲーム

特技：射撃・ハッキング

外見：黒髪の短髪で顔は地味だがなかなかのイケメン。常に改造エアガンを携帯している。

性格：ひねくれ者だが、親友たち（優璃、葵、麗奈、和哉、蓮、特に薫）には心を許している。

親友を傷つける奴にはどんな手段を使っても制裁を加える。

- ・振り分け試験直前に転校してきた天才?の一人。
- ・（武内 薫）と2人で同棲している。
- ・明久と同じマンションで部屋は隣同士。
- ・FFF団全員を10分ほどで片付けられるほど強い。

召喚獣の武器：スナイパーライフル

召喚獣の服装：迷彩服

腕輪の能力：現時点では不明

*

名前：武内 薫

読み：たけうち かおる

性別：女

誕生日：9月23日

身長：159cm(D)

所属クラス：2-A

得意教科：保健体育・物理・現代社会

苦手教科：古典・数学・化学

趣味：スポーツ観戦

特技：運動系なら何でも

外見：髪はこげ茶色で髪型はショートボブで美人。

性格：自由奔放で友達思い。

性格的に割と愛子と気が合う。

・振り分け試験直前に転校してきた天才?の一人。

・(桐谷 宗一郎)と2人で同棲している。(親公認)

・親が建設業の社長をしており、かなりのお金持ち。

召喚獣の武器：ショットガン+手榴弾

召喚獣の服装：迷彩服

腕輪の能力：現時点では不明

*

文月学園におけるクラス設備の奪取・奪還および召喚戦争のルール

1. 原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師(もしくは学園統治者)の立ち会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可

能となる。なお、総合科目勝負は学年主任（もしくは学園統治者）の立会いのもとでのみ可能。

2・召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は、該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の点数の和がこれにあたる。

3・召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

4・召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受け直して点数を補充することで何度でも回復可能である。

5・相手が召喚獣を呼び出したにも関わらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄と見なし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

6・召喚可能範囲は、担当教師の周囲半径10メートル程度（個人差あり）。

7・戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象となる。

8・戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもってのみ決定される。この勝敗に対し、教師が認められた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。

オリキャラ紹介(2)・試召戦争のルール(後書き)

明日にはDクラス対Fクラスの話を投稿する予定です。

第5話&1t・Dクラス戦・開戦!>t;(前書き)

Dクラス戦です。

第5話 & 1 t ; Dクラス戦・開戦! & g t ;

明久 s i d e

開戦時間になり、Fクラス対Dクラスの試召戦争の火蓋は切つて落とされた。

渡り廊下にて。

(雄二の作戦じゃあまず姫路さんたちが回復試験を受けている間、極力戦死しないように、前線を維持すればいいって言ってたけど、押してはいるもののかかなり厳しいんだけど)

Fクラスは島田さんの数学を中心にDクラスと均衡していた。

D「くそっ! なんでFクラスの癖にこんな奴がいるんだよ!!」
Dクラスの生徒が叫ぶ。無理もない。圧倒出来ると思っていた相手と均衡しているんだから。

その結果、Dクラスは勝利を焦り隊列が乱れ、Fクラスが徐々に押し始めていたが・・・

塚本「皆落ち着け! 島田には数学以外で闘えばなんとかなる! 元々地力で優っているのはこっちなんだ! 一対一にもちこんで確実に仕留めるんだ!」

D中堅部隊「おおー!!」

Dクラスの中堅部隊長・塚本の指示で徐々に隊列が整い始め、Dクラスに押し返され始めた。

「くっ・・・まずい(このままじゃ突破されてしまう・・・)」

島田「あつ! 数学のフィールドが!？」

島田さんが数学のフィールドからでてしまった。

D x 5「今だ! Fクラス島田に英語勝負で申しこむ!」

「島田さん! (まずい! 島田さんが戦死したらとてもじゃないけど

前線を維持できない)」

和哉「Fクラス一ノ瀬 和哉が加勢します！サモン！」

「Fクラス吉井 明久も加勢します！サモン！」

・英語

D 1 (1 2 1点) ・ D 2 (1 0 4点) ・ D 3 (1 1 8点)

D 4 (1 3 8点) ・ D 5 (1 2 3点)

V S

一ノ瀬 和哉 (4 2 3点) ・ 吉井 明久 (4 7点)

島田 美波 (5 3点)

「和哉くん！」

和哉「なんとか間に合いましたね」

D 5「何！？400点越えだど！？」

D 4「構うな！数で押し切るぞ！」

島田「吉井、足で纏いよ！」

「島田さんも、同じく足で纏いじゃないか！」

島田「うるさいわね！！」(プスツ)

「目が目があああ！！(助けに来たのに目突きはひどくない！)」

和哉「なにやってるんですか・・・」

D 3「先にあのバカ2人を片付けるぞ！」

和哉「させません！”爆破”！」

そういつて、和哉の召喚獣の武器のトンファーを敵に向かって投げつけると・・・ドカーン！！

・英語

D 1 (0点) ・ D 2 (0点) ・ D 3 (0点)

D 4 (0点) ・ D 5 (0点)

V S

一ノ瀬 和哉 (1 2 3点) ・ 吉井 明久 (4 7点)

島田 美波（53点）

トンファーが敵の近くで爆発しDクラスの5人の召喚獣は戦死した。
鉄人「戦死者は補修ー！！」

D×5「鬼の補修はいやだー！」

鉄人「安心しろ。“趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎”と言う、立派な模範生に仕立て上げてやる！」

D×5「助けてくれー！」

島田「ところで、一ノ瀬その点数は一体・・・？」

和哉「ん？英語は得意なんですよ、それに回復試験は英語しか受けてませんので」

「これで相手の中堅部隊はあと1人だね」

塚本「くそっ！そのFクラス3人に古典勝負を申し込む！サモン！」

・古典

塚本（138点）

VS

一ノ瀬 和哉（7点）・吉井 明久（9点）

島田 美波（6点）

「あれ・・・？」

島田「古典は無理ー！！」

和哉「あはは？どうしましょ？」

塚本「・・・いくらなんでも酷すぎないか？・・・まあいい、覚悟！」

「2人とも撤退するよ！」

島田「敵前逃亡は戦死扱いになるんじゃないの？」

「問題ないよ、須川バリアー！」

・古典

塚本（138点） VS 須川 亮（76点）

須川「味方を盾扱いするんじゃないやねえ!？」

「須川君にここは任せて教室に戻ろう」

秀吉「須川よ、助太刀するのじゃ!」

・古典

塚本（138点）

VS

須川 亮（76点）・木下 秀吉（119点）

塚本「くっ?また加勢か!」

須川「おらっ!」

塚本「そんな攻撃あたり」

須川の召喚獣が塚本の召喚獣に攻撃を仕掛けるが、あっさりかわされ、

秀吉「隙ありじゃ!」

塚本の召喚獣が回避して体勢を立て直す前に秀吉の召喚獣が塚本の召喚獣の首をはねた。

Dクラス中堅部隊長・塚本、戦死。

源二「塚本!どうしてうちの中堅部隊が全滅してるんだ!？」

Dクラス代表・平賀 源二が本隊を引き連れてやってきた。

「あの人がDクラスの代表だね。（そろそろ・・・）中堅部隊員撤退!！（4人しかのこってないけど）」

須川「了解!！」

秀吉「了解じゃ!」

島田「わかったわ!」

和哉「わかりました!」

源二「逃がすか!?!本隊の半分は奴らを追うんだ!所詮はFクラス

だ、一対一なら勝てる！」

雄二「待たせたな、明久！」

雄二率いるFクラス本隊が引き連れてやってきた。

雄二「本隊全員突撃だ！！Dクラスの奴らを殲滅するぞ！」

F本隊全員「おおー！！！」

第5話&1t・Dクラス戦・開戦!> ; (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

今日、PVが3000を突破しました。

少しでもこの駄文を覗いてくれた方々に感謝します。

第6話&1t・Dクラス戦・終戦!>t;(前書き)

Dクラス戦です。

第6話&17；Dクラス戦・終戦！>；

雄二「待たせたな、明久！」

雄二率いるFクラス本隊が引き連れてやってきた。

雄二「本隊全員突撃だ！！Dクラスの奴らを殲滅するぞ！」

F本隊全員「おおー！！！」

源二「くっ？ 罨か！ 教室前まで引くぞ！（予想通りだ！！、これで坂本の警護が薄くなる！そこに伏兵を仕掛けさせて終わりだ！）とにかく全員戦死を避けるんだ！」

雄二「明久、あとは任せたぞ」

「了解！」

雄二「近衛部隊は俺とFクラス前まで下がるぞ！つて、近衛部隊の奴らどこいった!？」

麗奈「・・・皆Dクラスを追いかけていった」

明久side out

雄二side

Fクラス前にて。

D6「来たぞ！坂本だ！！」

D7「護衛もないぞ！！」

D8「さっさと討ち取るぞ！」

「伏兵だと!？」

Dx3「Fクラス代表に物理勝負を申」

麗奈「・・・Fクラス水無月が受けます・・・サモン！」

・物理

D 6 (136点) ・ D 7 (124点) ・ D 8 (118点)

V S

水無月 麗奈 (268点) ・ 坂本 雄二 (92点)

D 8 「いつの間に!?!」

D 6 「まだ、高得点者がいるのか!? 聞いてないぞ!?!」

麗奈 「・・・ここは通さない」

「ほう? Aクラス並じゃないか」

麗奈 「・・・問題文が読めなくても解ける問題が多かったから」

「なるほどな。(水無月も教科によっては戦力になりそうだな) だが、護衛は不要だ」

麗奈 「・・・どういうこと?」

明久 side

その頃、Dクラス前にて。

秀吉 「Dクラス代表に古典勝負を申し」

D 9 「近衛部隊が受けます!」

島田 「Dクラス代表に」

清水 「お姉様」

島田 「ひっ!?!? み、美春!?!」

清水 「お姉様に古典勝負を申し込みます! サモン!」

島田 「ええ!?!? 鬼の補修はいやー!?!」

須川 「島田! 助太刀するぜ!」

清水 「豚野郎は邪魔しないでください!?!」

島田 「吉井! アンタも助けなさいよ!」

「そんな、ヒーロー気取り、現実では通用しない! (僕だって命は

惜しい！）皆、ここで決めるよ！！一気に攻め切るんだー！！」
F×11「うおおー！！」

島田「あとで、殺してやるー！」

僕の指示でFクラスがDクラスの生徒に多対1で勝負を仕掛けていく。

「（！D代表の護衛が甘い！）Fクラス吉井 明久が」

玉野「Dクラス玉野 美紀が受けます！」

「くっ？まだ護衛がいたのか!？」

源二「残念だったね、まあ、吉井君だけなら護衛をだす必要もなかったね」

「たしかに、僕じゃあ倒せないかもね・・・だから姫路さん、よろしくね」

姫路「あ、あの〜」

源二「え？ あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスの教室は向こうだよ？」

姫路「えっと・・・Fクラスの姫路 瑞希です。よ、よろしくお願
いします」

源二「あ、こちらこそ」

姫路「その・・・Dクラス平賀くんに現国勝負を申し込みます」

源二「は、はあ。どうも」

姫路「え、えっと・・・サモンです」

源二「あ、ああ。サモン・・・」

・現代国語

姫路 瑞希 (351点) vs 平賀 源二 (149点)

源二「え？ あ、あれ？」

姫路「ご、ごめんなさいっ！」

謝罪の言葉と共に、姫路の召喚獣は大きな剣を振るい平賀の召喚獣

を斬り伏せる。

鉄人「戦争終結！！勝者・・Fクラス！！」

この瞬間戦争は終了し、Fクラスの勝利で幕を下ろした。

第6話&17・Dクラス戦・終戦！>>（後書き）

あー寒い・・・

後書きって何書けばいいんだろう？

第7話&1t・Fクラス対Dクラス戦後> ; (前書き)

Dクラス戦の戦後対談です。

第7話 & 1 t ; Fクラス対Dクラス戦後 & g t ;

『戦争終結！！勝者・Fクラス！！』

Aクラスside

宗一郎「予想通りだな」

翔子「・・・雄二はそう簡単には負けない」

薫「ん？雄二って誰のこと？」

宗一郎「たしかFクラス代表だ」

翔子「・・・私の許嫁・・・じゃなくて幼馴染／＼」

そう言つて翔子は頬を赤く染めた。

優子「もしかして霧島さん・・・」

愛子「うん、多分そうなんじゃないのかな？」

利光「意外だね」

3人は心底意外だと顔にでていた。

宗一郎「ま、人の好みをとやかく言う気はないがな」

薫「頑張つて翔子ちゃん！！応援するよ！」

翔子「・・・最近あまり話せてないけど・・・頑張る！」

翔子はそう言つて、右手を握りこんだ。

宗一郎「しつかし今回の試召戦争の意図がよくわからん」

優子「どうゆうこと？」

宗一郎「いや、設備向上を狙うのなら最初は勝てる確率の高いEクラスを狙うのが普通だろ」

優璃「そうだね、負けちゃったらあの設備より酷くなるんだからね」

薫「ちゃぶ台と座布団より酷い設備って・・・」

愛子「想像したくないね・・・」

優璃「そう考えるとDクラスに仕掛けるのは明らかに不自然だよな」

宗一郎「これは俺の予想だが、Fクラス代表はDクラスとFクラス有利の同盟を結んでCクラスかBクラス、もしくはウチを狙ってるのかもしれない」

利光「だが、そんな同盟誰が好きこのんで結ぶんだい？」

薫「設備交換の免除と引き換えとかなら不利な同盟でも飲むんじゃない？」

利光「たしかにDクラスにとってはメリットしかないし、僕がD代表だったら間違いなくその同盟を結ぶね」

優子「なるほどね、もしDクラスがA・B・Cクラスに仕掛けて負けてもEクラスの設備ですむものね」

宗一郎「まああくまで予想だがな」

優璃「友達もいるからあんまり無理しないで欲しいんだけどね」

優璃は心配そうにそう言った。

利光「そういえば、Fクラスにも3人転校生が来たって聞いたね」

優璃「うん、その子たちだよ、本当ならみんなAクラスの学力があるのに・・・」

優子「Fクラスなら弟がいるはずだから話でもきいてみようかしら」

優璃「私も葵たちに優子さんの弟のこと聞いてみようかな？」

薫「さてと、宗くんそろそろ帰ろっ」

宗一郎「ちょっと用事があるから10分ほど待っててくれ」

薫「はい」

優子「しっかし2人ともえらく仲が良いねー（ニヤニヤ）」

優璃「2人で同棲してるからね」

優子「え？同棲!？」

薫「そうだよ、宗くんは私の許嫁だから／＼／＼」

翔子「・・・羨ましい・・・私も雄二と・・・／＼／＼」

Aクラスside out

和哉 side

Dクラスにて。

葵「勝つたみたいだね」

「そうだね」

F「卓袱台に腐った畳とはおさらばじゃー！ー！！！」

F「坂本雄二さままだな！」

F生徒たちが騒いでいるのを尻目に坂本がDクラスの代表と交渉らしいことを始めた。

「代表、何の話をしているんですか？」

雄二「一ノ瀬か。いや、この後の話をな」

「設備交換のことですか？」

雄二「・・・いや、設備は交換しない」

源二「どういうことだい？」

雄二「そつちがある条件を飲んでくれれば、和平交渉で済んだことにしてもいい」

源二「話を聞かせてくれ」

雄二「タイミングを見計らって、アレを壊して欲しい」

坂本が言うアレとは、Bクラスの外に付いてる室外機。

「いくら次のBクラス戦のためとはいえ、それはどうなんですか？」

（世の中学力だけじゃないといつても・・・）」

源二「わかった。まあ注意や罰則はあるかもしれないが、この教室を守るならやろう。だが本当に設備を交換しなくていいのか？」

雄二「なんだ？あのボロい卓袱台と腐った畳が欲しいのか？」

源二「と、とんでもない！」

雄二「俺たちの目標はあくまでAクラスのシステムデスクだ。Dクラスの設備で満足されちゃ困るんでな」

源二「モチベーション維持のためってことか」

雄二「じゃあ俺たちはもう用はないんでな。野郎ども引き上げるぞ

！

源「ああ。Aクラスに勝てるように祈ってるよ」

雄「本当は勝てる訳ないって思ってた」

源「はは・・・ばれてたか。まあ、頑張ってくれ。期待はしとくよ」

雄「俺たちは勝つさ、今年のFクラスは最強だからな！」

和哉 side out

第7話&1t・Fクラス対Dクラス戦後> ; (後書き)

次回は明日か明後日には投稿する予定です。

第8話&1t・Fクラス対Dクラス戦後の放課後> ; (前書き)

総合PV5000、ユニーク1000を突破!

これからも『バカと天才?』と召喚獣』をよろしくお願いします。

それと、今回からバカテストをやってみようと思います。

第8話&1t・Fクラス対Dクラス戦後の放課後>

問題1

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあったうえに、更に悪いことが起きる例え

姫路瑞希・川崎葵の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きっ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら”河童の川流れ”や”猿も木から落ちる”、(2)なら”踏んだり蹴ったり”などがありますね。

一ノ瀬和哉の答え

- (2) 踏んだり蹴ったり殴ったり叩きつけたり

教師のコメント

あなたは鬼ですか。

吉井明久の答え

- (2) 泣きっ面に蜂

教師のコメント

君の名前をみただけで×をつけた先生を許してください。

土屋康太の答え

(1) 弘法も木から落ちる

教師のコメント

シユールな光景ですね。

源二 side

Fクラスが去つてすぐのDクラスにて。

宗一郎「2-Aの桐谷だ、代表はいるか？」

D「代表は桐谷って人が呼んでるよ」

「わかった、いまいく(桐谷？たしか転校生だよな?)」

宗一郎「アンタが2-D代表か？」

「ああ、D代表の平賀 源二だ」

宗一郎「2-Aの桐谷だ、少し聞きたいことがある」

「なんだい？」

宗一郎「何を交換条件に和平に持ち込んだんだ？」

「・・・どこでそれを？(さっき決まったことなのになぜしっているんだ!?)」

宗一郎「さあな？で、さっきの質問の答えを聞かせてくれ」

「・・・悪いが、口止めされているんだ(されてはいないが話さないほうがいいだろ)」

宗一郎「そうか、ならもう一つお前を倒した奴・・・姫路 瑞希で間違いないな？」

「なぜFクラスに姫路さんがいることをしってるんだ!？」

宗一郎「Aクラス確実の成績なんだからAクラスにいなければ必然的になんらかの理由でテストを受けられなかったと考えてるのが妥当だろ」

源二「そうゆうことか」

宗一郎「ああ、今のFクラスはマークしとくにこしたことはないからな」

「AクラスがFクラスをマークする必要があるのか？」

宗一郎「さあな？時間とらして悪いな。礼はまた今度でいいか？」

「礼なんて別に・・・」

薫「宗くん、帰ろっ！」

俺が礼を断ろうとしたとき、後ろから元気そうな女の子が桐谷に飛びついて来た。

宗一郎「わかった！わかったから引つ張るな！それじゃあな、平賀」

「あ、ああ・・・」

源二side out

和哉side

Fクラスにて。

「(Dクラスとの交渉内容、話したら2人とも怒るだろうなあ) 葵さん、麗奈さん、ちよつといいですか？」

葵「どしたの？」

麗奈「・・・どうかした？」

坂本とD代表との交渉内容を2人に説明した。

葵「いくら次のBクラス戦のためとはいえ、Dクラスの人たちにそんなこと押し付けたんだ・・・」

麗奈「・・・代表と話してくる」

「代表はもう帰ったよ」

麗奈「・・・明日、話してみる」

葵「・・・私は次の試召戦争に参加しないからね、そんなことまでして勝ちたくないし」

「僕もそのつもりだよ」

葵「この話は明日にしよう！私は部活いってくるね」

麗奈「・・・和哉くん、帰る？」

「そだね〜帰ろうか」

下足にて。

「あれ？秀吉くん？女子の制服きてなにしてるの？」

優子「何言ってるのよアン・・・キミ！アタシは木下優子よ！」

「え？あ、すみません（え？双子かな？）」

麗奈「・・・秀吉くんの・・・お姉さん？」

優子「そうよ。ところで、あなた達は？」

麗奈「・・・水無月 麗奈、2-F」

「あ、転校生の一ノ瀬 和哉です。2-F所属です。」

優子「え？同じ年なの？てつきり、水無月さんの弟かなにかかと・・・」

「・・・はあ（そんなに年下にみえるのかな・・・）（シクシク）」

優子「え？えつと・・・（触れちゃいけないものに触れたみたいね）」

麗奈「・・・気にしなくていい、いつものことだから」

「いつものことだからは酷くないですか？（シクシク）」

優子「たしかに見た目は小がk」

「・・・もつやだ」

麗奈「・・・和哉くんが拗ねた」

優子「あ、ごめんね、一ノ瀬くん。」

（どうせ僕は小学生みたいですよ・・・）

麗奈「……いつものこと、和哉くん、帰ろ……木下さん、さよ
うなら」
優子「え、ええ、さようなら」

和哉 side out

第8話&1t・Fクラス対Dクラス戦後の放課後> ; (後書き)

ご意見、ご感想があればよろしくお願いします。

第9話&17：必殺料理人・転校生たちの考え&get；（前書き）

茜さん、ミヤサカさん、感想ありがとうございます。

第9話&11t・必殺料理人・転校生たちの考え>

問題2

問：調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい

姫路瑞希・川崎葵・一ノ瀬和哉の答え

問題点：マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険だから

合金の例：ジユラルミン

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、引っかけりませんでしたね。

水無月麗奈の答え

問題点：A question can't be read .

合金の例：Same as the above .

教師のコメント

水無月さんは帰国子女でしたね。早く日本語をマスターできるようにがんばってください。

土屋康太の答え

問題点：ガス代を払ってなかった事

合金の例：
教師のコメント
そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

問題点：

合金の例：未来合金（ すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても・・・

Dクラス戦の次の日。

Fクラスにて。

「昨日消耗した奴は今日の午前中に回復試験を受けてくれ！次はBクラスを制圧するぞ！」

F×41「おおー！！！」

明久「さてと、一時間目はすうがくグハツ！？」

島田「吉井！昨日はよくも見捨ててくれたわね！骨の2、30本は覚悟しなさい！」

明久「腕にとんでもない激痛がー！！！」

昼休み。

葵「代表、ちょっといいかな？」

雄二「ん？なんだ？」

葵「私と麗奈と和くんはBクラス戦には参戦しないからね」

雄二「は？ちよつと待て！どういうことだ！？」

麗奈「・・・代表は間違ってる」

和哉「それに世の中学力がすべてじゃないって事を証明したいといつてたのに、結局は姫路さん頼みだからね」

雄二「・・・なぜそれを知っている？」

和哉「明久との立ち話を盗み聞きしてましたから」

雄二「そうか・・・どうしても参戦する気がないか？」

雄二は少し困り気味にそう言った。

葵「ないですね」

和哉「まあ、負けたところで設備ダウン以外特に困ることもないですし」

雄二「そうか・・・なら賭けをしないか？」

麗奈「・・・??」

葵「賭け・・・ですか。内容は？」

雄二「Bクラス戦をお前ら抜きで勝ったら、その次のAクラス戦に参戦してもらう」

和哉「負けた場合は？」

葵「霧島さんと結婚で、どうかな？」

雄二「は？待て！なぜ翔子のことをしってるんだ！？」

雄二は驚きながら葵に問い返した。

葵「ん？Aクラスの子に聞いたただだよ」

和哉「霧島さんって誰？」

葵「Aクラスの子だよ、代表の幼馴染じ（ゴホン！）許嫁だったさ」

雄二「ちがうわ！・・・まあいいだろう、その条件でいいのか？」

和哉「まあ、勝てないだろうからいいですよ」

雄二「後悔すんぞ？」

和哉「代表がね」

ガララッ！

明久「うう、酷い目にあつた・・・」

葵「あれ？吉井君？昼ご飯食べに行つたんじゃないの？」

和哉「あと秀吉と康太はなんで震えてるの？」

島田「さあ？購買でもいこうかな」

麗奈「・・・昼ご飯食べてなかつたの？」

島田「ウチが行く前に吉井達が全部食べちゃつたのよ、それじゃ購買いってくるわ」

そういつて島田は購買に向かつてつた。

康太「・・・地獄をみた（ガタガタ）」

秀吉「まさか、姫路の料理があそこまで酷いとはのう・・・（ガタガタ）」

雄二「・・・意外だな、姫路にそんな苦手教科があるとは」

午後。

雄二「次のBクラス戦なんとかなるか・・・？」

島田「え？次の相手はBクラスなの？」

雄二「ああ、そうだ」

島田「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

雄二「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てない」

秀吉「それじゃあワシらの最終目標はBクラスに変更なのかの？」

雄二「いや、Aクラスをやる」

明久「意味がわからないよ？」

雄二「クラスだと差がありすぎるから、一騎討ちに持ち込む。それにBクラス戦が必要だということだ」

和哉「BクラスにAクラスを攻めさせる素振りを見せさせて、Aクラスに脅しをかけ一騎討ちに持ち込むってことですか？まあ、僕は参戦しないから関係ないですが」

明久「え？どうしてさ！？」

明久が和哉を問い詰めるように聞いた。

和哉「代表のやり方が気に食わないからかな」

雄二「まあ、そうゆうことだ。だか、お前ら抜きでBクラス戦に勝つたらAクラス戦にはでてもらうからな！」

和哉「約束は守りますよ」

雄二「で、明久。さっさと宣戦布告してこい」

明久「絶対にいやだ」

葵「戦争でないんだし私がいつてくるよ」

雄二「なら川崎に任せるか」

葵「はい、いつてきますね」

第9話&17：必殺料理人・転校生たちの考え&get;（後書き）

次回から、Bクラス戦の予定です。

ご意見、ご感想があればよろしくお願いします。

第10話&11話：Bクラス戦・開戦！>（前書き）

Bクラス戦です。

第10話&It;Bクラス戦・開戦!>

問題3

以下の英文を訳しなさい。

This is the bike that my sons
had used regularly.

姫路瑞希・川崎葵・一ノ瀬和哉・神谷優璃・桐谷宗一郎・武内薫の
答え

A・これは私の息子たちが愛用していた自転車です。

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

水無月麗奈の答え

A・これはわたしのむすこたちがよくつかっていたじてんしゃです。

教師のコメント

正解ですが、漢字はまだ難しいみたいですな。

土屋康太の答え

A・これは自転車です。

教師のコメント

訳せたのはThisとbikeだけですか

吉井明久の答え

A . @ & a m p ; |

教師のコメント

出来れば地球上の言語でお願いします。

Aクラスside

優璃「今日の午後からFクラスがBクラスに仕掛けるんだってさ」

愛子「え？昨日Dクラスを倒した所なの？」

宗一郎「回復試験は午前中に全部済ませたみたいだな」

優子「でも、Dクラスに仕掛けさせてからFクラスがしかけるんじゃないかったの？」

薫「だよね、Fの代表さんは何考えてるんだらうね？」

宗一郎「ここで負けたら単なる底抜けのバカだとわかるんだがな」

利光「Bクラスにも勝つと言うのかい？」

宗一郎「今回ばかりはわからん」

宗一郎は頭を掻きながらそう言った。

優璃「そういえば明日には蓮くん学校に来るそうだよ」

優子「蓮くん？神楽坂くんのこと？」

愛子「そういえば神楽坂君ってどんな子なの？」

薫「天然さんだね」

優璃「早く来ないかな、色々とききたいこともあるし」

翔子「・・・優璃はその人の事が好き？」

優璃「へ？違うよ、なんで振り分け試験で手を抜いたのかをききたいんだよね」

利光「どうゆうことだい？」

宗一郎「本来なら蓮のほうが優璃より点数いいからな、ちなみにあいつ振り分け試験は3教科しか受けてなかったはずだぞ」

優子・愛子「はい？」

利光「そ、そんなんでよくAクラスには入れたね？」

宗一郎の蓮の話に、優子・愛子・利光は啞然とした。

宗一郎「あいつは天才様だからな。さて、自習だし俺は寝るかな」

薫「膝枕でもしようか？」

宗一郎「結構だ」

薫「宗くん冷たいなあ」

Aクラスside out

和哉side

開戦時間になり、Fクラス対Bクラスの試召戦争の火蓋は切つて落とされた。

雄二「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

F「「「「「サー！イエッサー！！」「」「」」

「この人たちでBクラス前線部隊を抑えられるの？」

葵「問題ないんじゃないかな？隊長の姫路さんは数学で腕輪持ちだったし」

ガラッ！

B「Bクラスからの使者だ。Fクラスにクラス間交渉に来た」

雄二「・・・内容はなんだ？」

B「四時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を

禁止する、だ」

雄二「いいだろう、協定を結ぶ」

B「そうか、じゃあ調印をするから新校舎の空き教室に来てくれ」

雄二「わかった、近衛部隊ついて来い！」

雄二は新校舎の空き教室に向かっていった。

葵「絶対罠だよな」

「多分ね」

麗奈「・・・知らせなくてもいいの？」

和哉「代表にも策があるんだと思うよ」

ガラツ！

B1「え？何故人がいるんだ！？」

B2「話と違うじゃないか！」

突然、Bクラスの二人が教室に入ってきた。

葵「え？・・・Bクラスのお二方、何が用でもありましたでしょうか？」

B2「仕方ない！向こうはFクラスなんだ！サツサと片付けて、やることすますぞ！」

B1「了解！！斎藤先生！あのFクラスの3人に現代社会勝負を申し込みます！サモン！」

B2「サモン！」

葵・和哉・麗奈「」「サモン！」「」

・現代社会

B1（196点）・B2（184点）

VS

川崎葵（796点）・一ノ瀬和哉（18点）

水無月麗奈（2点）

麗奈「・・・歴史系は問題文が漢字ばかりだから無理」

葵「麗奈は仕方ないとして、和くん・・・」

「ごめんなさい・・・」

B1「ちょ？なんだよその点数！！」

B2「勝ち目ないじゃないか！」

葵「で、ここになにしにきたの？」

B2「言う訳ないだろ！？」

葵「そう、ならさようなら（ニコ）」

スパン！スパン！

Bクラス2人の召喚獣は一瞬にして葵の召還獣に一闪され、戦死した。

鉄人「戦死者は補修ー！」

B1「鬼の補修はいやだー！」

B2「助けてくれー！！」

葵「ねえ、あの人たちなにしにきたんだろっね？」

「宗くんや優璃さんに聞いてみる？」

麗奈「・・・宗くんならなにかわかるかも」

ガラッ！

雄二「今戻ったぞ、ところでさっきBクラスの二人を抱えている鉄人とすれ違ったが・・・お前らか？」

そこにちょうど代表が戻ってきた。

葵「補修はいやだからね」

雄二「そうか」

ガラッ！

明久「ただいま」

秀吉「ただいまなのじゃ」

姫路「只今戻りました」

島田「戻ったわよ。ねえ坂本、アンタBクラスと協定結んだの？」

雄二「ああ、四時以降は試召戦争を禁止して翌日の9時から再開するというものだ」

明久「どうしてそんな協定結ぶのさ！？こっちのモチベーションが下がりかねないよ！！」

雄二「……たまには的を得たことを言うんだな、明久」
代表は明久の発言に心底驚いたようだ。

明久「たまには余計だよ!!!」

雄二「まあ待て、理由は姫路の体力が持たないからだ」

明久「姫路さんの?」

雄二「今の主戦力は姫路なんだ、姫路がまともに戦えなければ下校時間まで続けても不利になるだけだ」

島田「なるほどね、そういうことなら」

康太「……雄二」

いつのまにか近くにあった康太が雄二を呼んだ。

雄二「どうした?ムツツリーニ」

康太「……Cクラスの様子が怪しい」

雄二「なんだと!……漁夫の利狙いか」

秀吉「流石にBのあとCと連戦なんてことになると思わなかったぞ
い」

島田「どうするのよ!?!」

雄二「そうだな……Cクラスと不可侵条約を結ぶか」

「それは協定違反じゃないかな?たしか協定内容には『試召戦争に
関わる一切の行為を禁止する。』って言ってたし」

葵「最悪の場合、Cクラスに潜んでいて、不可侵条約を結んだ瞬間
仕掛けてくる可能性だってある。それに、C代表って茶道部の小山
さんでしょ?」

康太「……(コク)」

葵「この前、B代表と2人でお話してたよ?」

康太「……俺の知らない情報……だと!?!」

島田「で、でも、流石にそこまで考えてないんじゃない?」

雄二「……いや、B代表はあの根本だからな、充分考えられる」

麗奈「……根本?」

秀吉「カンニングの常習犯で窃盗など当たり前、喧嘩にはナイフを
携帯しているという”卑怯者”の根本かの?」

和哉「そのCクラス代表の小山さんってかなり趣味悪いね」

康太「・・・顔はいいのにもつたいない」

雄二「だが、このままって訳にもいかねえ・・・いや、いい策を思いついた」

明久「ほんと!？」

雄二「ああ、作戦は明日話すから今日は解散だ!」

Cクラスにて。

根本「くそ!何故奴らがこないんだ!」

小山「恭二、クラスの皆を帰らしていいかしら?」

根本「あ、ああ」

小山「皆、もう帰ってくれて構わないわ!」

根本「仕方ない、この前盗んでおいた”コイツ”で姫路を脅すか
その手には姫路が書いたラブレターをもっていた。

第10話&11話；Bクラス戦・開戦！>；（後書き）

次回、転校生がもう1人來ます。

ご意見、ご感想がありましたらよろしくお願いします。

第11話&1t;遅れてきた転校生とFクラスの作戦>t; (前書き)

フラグってたてるの難しいですね・・・

第11話 <math>1t</math>:遅れてきた転校生とFクラスの作戦 <math>gt</math>;

問題4

以下の値を答えなさい。

- (1) $\sin 30^\circ$
- (2) $\cos 180^\circ$

姫路瑞希・川崎葵・一ノ瀬和哉・神谷優璃・桐谷宗一郎の答え

- (1) $1/2$
- (2) -1

教師のコメント

正解です。簡単でしたね。

土屋康太(武内薫)の答え

- (1) たぶん3(1/2)
- (2) きつと-1/2(-1)

教師のコメント

ごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

あと、武内さんは正解ですが真面目にやってください。

吉井明久の答え

- (1)
- (2)

教師のコメント
せめて何か書いて下さい。

次の日。

優子 side

朝の通学路にて。

(寝坊したー！急がないと遅刻して・・・(ドン！))
向こうから歩いてきた柄の悪そうな3人のうちの一人にぶつかって
しまった。

「あ、すみません」

男a「いつてーな！どこみてやがんだ！」

男b「これ骨おれちゃったかもな〜どうしてくれんだ！慰謝料払え
や！」

男c「まあ金なんて持ってないだろうから代わりに少し遊ぼうぜ」

「はい？ふざけないで！」

男a「まあ、いいじゃねえか。一緒に楽しいことしようぜ？」

「嫌だつて言ってるでしょ！！」

男b「ちっ、しょうがねえ、力づくでいくか・・・。」

「え？ちよ、ちよっと・・・(誰か助けて・・・！)」

柄の悪そうな男たちの一人がアタシの腕をつかもうとしたとき、

男a「ぐあっ!？」

男b「おい!？どうsぐほっ!？」

不意に鈍い音が響き、その男は倒れた。更に次の瞬間には、もう1

人、気絶していた。

その横に、文月学園の制服を着た男子がたっていた。

男C「な、なんだお前は?!」

蓮「さあ?誰でしょう?」

男C「てめえ、なめやがつ(バキッ!)腕がああー!?!」

蓮「さてと・・・(バキボキ)」

男C「待つてくれ!?助けてくれ!」

蓮「んー・・・いいですよ、その代わりそこに転がってる2人を連れてつてくださいね」

男C「わ、わかった(ガタガタ)」

そう言つてその男は2人を連れて逃げていった。

蓮「大丈夫?怪我、してない?」

「え、ええ。大丈夫、ありがとう。(か、かつこいい／／／)」

蓮「君も文月学園の生徒なんだね?」

「え、ええ、そうよ」

蓮「なら学園まで一緒にいきますか?」

「え?／／／」

蓮「さつきみたいな連中に絡まれると厄介ですし、今からだと走つた所で遅刻確定ですから・・・大丈夫ですか?さつきからずっと顔真つ赤ですけど・・・」

「ふえ!?!／／／だただ大丈夫よ!?!・・・えつと・・・」

蓮「あ、神楽坂 蓮といます」

「え!?!じゃあ転校生の・・・／／／」

蓮「ん?知つてるつてことは2・Aクラスですか?」

「ええ、木下 優子よ、よろしくね神楽坂君／／／」

蓮「蓮でいいですよ、そろそろ学園に行きましょう、木下さん。遅刻とはいえ早く行つたほうがいいでしょうから」

「え、ええ／／／そうね／／／」

優子 side out

その頃学園では。

Fクラスにて。

雄二「昨日いつていた作戦を実行する!!」

明久「作戦?でも開戦はまだだよ?」

雄二「明久Bクラスにじゃないぞ?」

明久「へ?」

雄二「Cクラスだ」

明久「なるほど。何をするの?」

雄二「秀吉にコイツを来てもらおう」

雄二はそういつて女子の制服を取り出した。

和哉「代表・・・そうゆう趣味が・・・?」

雄二「ちがうわ!」

秀吉「別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ?」

葵「少しは嫌がろうよ・・・」

雄二「ああ、秀吉にはAクラスの木下優子を装ってもらおう。秀吉、

これに着替える」

秀吉「うむ。」

そういつて秀吉は着替え始めた。

康太「・・・・・・・・!!(パシャパシャパシャパシャ!)」

葵「秀吉君・・・そんなことしてるから女の子にみられるんじゃ・・・?」

秀吉「よし、着替え終わったぞい。ん?皆どうした?」

気がつくとFクラスのほとんどの男子が鼻血を噴いて倒れ、姫路と

島田は膝について落ち込んでいる。

和哉「さあね?」

秀吉「?おかしな連中じゃの」

雄二「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

秀吉「うむ」

明久「あ、僕も行く！」

Cクラス前。

雄二「ここからは一人で頼むぞ秀吉」

明久「Aクラスの使者だから、Fクラスの僕らは一緒に行けないからね」

秀吉「気が進まんのか・・・」

そういいながら、秀吉はCクラスに向かっていった。

明久「雄二、秀吉は大丈夫なの？」

雄二「多分大丈夫だ」

明久「秀吉が教室に入るよ？」

雄二「明久静かにしろ」

秀吉がCクラスに入って行って・・・

秀吉（優子）「静かにしなさい！この薄汚い豚ども！」

明久「うわぁ。これ以上はない挑発だね・・・」

雄二「流石秀吉だな」

小山「な、何よあんだ！」

秀吉（優子）「話し掛けなしで！豚臭いわ！」

小山「Aクラスの木下ね？なんの用よ！」

秀吉（優子）「私はね、こんな醜い教室があるのが我慢ならないの

！貴方達なんて豚小屋で充分だわ！」

小山「何ですって！Fクラスがお似合いですって！？」

秀吉（優子）「手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が薄汚いブタの貴女達を始末してあげるから！」

そう言い残し、靴音を立ててCクラスから秀吉がでてきた。

秀吉「これで良かったかのう？」

雄二「上出来だ」

小山「Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！」

Cクラスの矛先は完全にAクラスに向いたようだ。

明久「作戦もうまくいったし、僕達も今日の戦争の準備をしよう。

あと10分で始まるよ」

雄二「そうだな」

第11話&1t;遅れてきた転校生とFクラスの作戦>t; ; (後書き)

次回はBクラス戦の続きを投稿する予定です。

ご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

オリキャラ紹介(3) (前書き)

オリキャラ紹介です。

オリキャラ紹介(3)

名前：神楽坂 蓮

読み：かぐらざか れん

性別：男

誕生日：6月8日

身長：173cm

体重：55kg

所属クラス：2-A

得意教科：数学・物理・化学

苦手教科：英語・古典

趣味：読書・ゲーム・写真を撮ること

特技：料理・スポーツならなんでも

外見：髪色は暗めの茶色で肩の近くまで髪が伸びている。

顔はカッコイイタイプではなく綺麗なタイプ。

性格：人当たりもよく、面倒見がいいが、やや天然で明久並の鈍感。

(それ故、かなりモテるのだがモテているという自覚ナシ)

喧嘩は嫌いだか、親友を傷つける奴や人の夢をバカにする奴には武

力行使もいとわない。(その時の戦闘力は鉄人並)

・振り分け試験直前に転校してきた天才?の一人。

・明久と同じマンションに(一ノ瀬 和哉)と共に住んでいる。

・大財閥の跡取り息子で、親からも優秀な跡取りとして期待されているが、本人はまったく継ぐ気はないらしい。

・振り分け試験の時は3教科(4087点)しか受けなかった。(神谷 優璃)に代表の座を譲ったが本人は楽しければそれでいいとのこと。

・過去のある出来事のせいで理不尽なことを極端に嫌う。

召喚獣の武器：右手にサーベル、左手にトンファー
召喚獣の服装：軍服
腕輪の能力：現時点では不明。

第12話&17：バカと転校生たちの怒り>t；（前書き）

今回はBクラス戦の2日目です。

第12話&1t;バカと転校生たちの怒り>

問題5

以下の問いの()に正しい値を入れなさい。

・真空中における光速の速度は () (m / s

姫路瑞希・川崎葵・一ノ瀬和哉・神谷優璃・桐谷宗一郎・武内薫・
神楽坂蓮の答え

A . 2 9 9 , 7 9 2 , 4 5 8

教師のコメント

正解です。特に言うことはありません。

土屋康太の答え

A . 秒間に地球を7回半回る速さ

教師のコメント

数値で答えて下さい。

吉井明久の答え

A . 1 0 0

教師のコメント

何か書けとはいいましたが、適当すぎませんか？

明久side

そして午前9時よりBクラス戦が開始した。

僕たちは昨日中断されたBクラス前という位置から進軍を始めた。
秀吉「ドアと壁をうまく使うんじゃない！戦線を拡大させるでないぞ」
今回の雄二の作戦では『敵を教室内に閉じ込める』のが僕たち中堅部隊の役割らしい。

なので今は雄二の指示通り今はBクラス前が主戦場となっている。

「みんな！絶対1人で戦わないで！多対1に持ち込んで周りと協力して敵を倒すんだ！」

秀吉「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行うんじゃない！」

(どうしたんだろ姫路さん・・・なにかあったのかな?)

このBクラス教室前での乱戦の中、姫路さんは戦いもせず、指示を出すわけでもなく、様子がおかしいので、今は秀吉が姫路さんの部隊を率いているが、

島田「左側入口がウチ以外ほとんど戦死して押し切られそうよ！援軍をお願い！」

F「右側入口も押し切られそうです！」

そう言われ、左側入口を見てみると、少しずつ押し戻されていて島田さん以外はかなり点数を消費していた。

「姫路さん！僕は右側の化学のほうで援護をするから、左側入口の数学のほうの島田さんたちの援護をたのんだよ！」

姫路「あ、あの・・・！」

(さっきから姫路さんの様子がおかしい・・・どうかしたのかな?)
須川「吉井！俺と横溝の部隊が左側入口の島田の部隊を援護してく

る」

「わ、わかったよ。なんとか持ちこたえて！（でも、姫路さんどうしたんだろ？さっきからずっとこの調子だし・・・）」
ふと姫路さんの視線の先を追ってみると、窓際で右手になにか紙らしきものもってこちらを見下ろしている根本くんの姿があった。

「！！（あれは・・・ラブレター？・・・もしかして姫路さんの・・・！）」

「秀吉！島田さん！ちよつとここを任せるよ！」

島田「何言ってるのよ！そんな余裕こつちにあるわけないじゃない！」

秀吉「どうしたんじゃ明久！？」

「ちよつとね。姫路さん、調子が悪いんだつたら近衛部隊のところまで下がっていいよ」

姫路「・・・はい」

秀吉「！大体の事情は掴めたのじゃ、こつちはなんとかするから早く援軍を呼んできてほしいのじゃ！」

秀吉もどうやら気づいたみたいだ。

島田「どうしたのよ！？吉井に木下！瑞希まで下がっちゃったら10分も持たないわよ！？」

秀吉「島田よ、今は戦線を維持することに集中するのじゃ！」

島田「わかつてるわよ！」

「すぐ戻るから！なんとかそれまで持ちこたえて！」
そう言つて、僕はFクラスへ走つた。

Fクラスにて。

「雄二！」

雄二「脱走なら殺すぞ」

「話があるんだ」

雄二「なんだ？」

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

麗奈「・・・そういう趣味があるの？」

葵「趣味は人それぞれだからね」

「違うからね!？」

雄二「そうだな、勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやろう・・・
話はそれだけか？」

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

雄二「理由は？」

「理由は言えない」

雄二「どうしても外さなければならないか？」

「うん。どうしても」

雄二「・・・」

「頼む、雄二!」

和哉「・・・ねえ、もしかしてだけどさ、姫路さん、卑怯者に脅さ
れたりしてるの？」

「何故それを!? あっ!? (しまった・・・)」

葵「へえ〜そんなことする人がいるんだー(ゴゴゴゴ・・・!)」

麗奈「・・・詳しく聞かせて(ゴゴゴゴ・・・!)」

葵と麗奈は黒いオーラを出しながら明久に説明を求めた。

「・・・根本君が姫路さんが書いたラブレターらしきものをもって
た」

雄二「なるほどな、内容をばら撒かれなくなったら、戦線に加わ
るなどでも脅されてるんだらうな」

和哉「・・・代表」

雄二「なんだ」

和哉「今回の賭けは反則負けでいいですか？」

雄二「いいだろう、だがお前ら4人で姫路がやる予定だったクソヤ
ローに攻撃を仕掛ける役をお前からやれ・・・できるな?」

「もちろんさ!」

葵「わかりました!」

麗奈「・・・やってみせる！」

和哉「卑怯者に地獄をみせてやる！」

雄二「いい返事だ、俺はDクラスに指示をだしてくる、あとは任せ
たぞー！」

和哉「今回はとやかくいつてられないから見逃すよ・・・」

「3人とも、行くよ！」

そうして3人とともにもう一度Bクラスへと向かった。

Bクラス前。

根本「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が
集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

雄二「どうした？軟弱なBクラスの代表サマはそろそろギブアップ
か？」

根本「ギブアップするのはそっちだろ？」

雄二「無用な心配だな」

根本「そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

雄二「お前ら相手じゃ役不足だからな。負け組代表さんよお」

根本「負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組
代表だな」

葵「どうやら間違いないみたいだね・・・！（ゴゴゴゴ・・・！）」
和哉「ただで済むと思うなよ！」

麗奈「・・・許さない・・・！（ゴゴゴゴ・・・！）」

葵「私たちが道をつくるから、吉井君は卑怯者を殺して！」
明久「任せて！」

和哉「葵、麗奈、秀吉のほうをお願い！」

葵・和哉・麗奈「」「サモン！！」「」

・左側入口（数学）

B1（189点）・B2（181点）・B3（148点）・B4（

201点)

B5(176点)・B6(169点)・B7(171点)

VS

島田 美波(213点)・須川 亮(43点)

一ノ瀬 和哉(631点)

B3「600overだど!?!」

B2「なんでFクラスにこんなヤツがいるんだよ!」

和哉「・・・”自爆”!」

そついうと和哉の召喚獣が光ながらBクラスの召喚獣に突撃して・・・

・爆発した。

・左側入口(数学)

B1(0点)・B2(0点)・B3(0点)・B4(0点)

B5(0点)・B6(0点)・B7(0点)

VS

島田 美波(213点)・須川 亮(43点)

一ノ瀬 和哉(1点)

和哉「明久!左側入口から行けるよ!」

根本「チッ!右側入口の半分は左側に移動し・・・」

根本が右側入口の部隊に指示するが・・・

・右側入口(化学)

B8(0点)・B9(17点)・B10(32点)

B11(31点)・B12(0点)

VS

木下 秀吉(47点)

川崎 葵(413点)・水無月麗奈(327点)

葵「和くん、右側のほうももうすぐ終わるよ！」

右側入口の防衛をしていたB生徒も葵と麗奈の圧倒的点数の前にすでに壊滅状態だった。

根本「な、なんでFクラスに何人も高得点者がいるんだよ!？」

明久「鉄人! B代表に日本史勝負を申し込みます!」

鉄人「鉄人いうな!・・承認!」

B13「近衛部隊が受ける!」

根本「ふっ、ははっ!だが残念だったな!もうすぐ、前線部隊が戻ってくるからなあ!お前らの奇襲は失敗だ!」

「くっ!（だけど、僕の役目は達成したよ!）」

和哉「ムツツリー二ー!!!」

和哉がそう叫ぶと保健体育教師・大島先生を連れてムツツリー二が窓から飛びこんできた。

根本「なっ!?!窓からだど!?!」

康太「・・・Fクラス土屋 康太、Bクラス代表根本 恭二に保健体育勝負を挑む・・!サモン!」

根本「うわあああー!!!!!!」

・保健体育

土屋 康太（542点） VS 根本 恭二（203点）

ムツツリー二の召喚獣が根本の召喚獣を小太刀で一閃。

Bクラス代表、根本戦死。

鉄人「戦争終結!!!勝者・・Fクラス!!!」

第12話&1t：バカと転校生たちの怒り>；（後書き）

今回はFクラスとBクラスの戦後対談の前にFクラスの策によってとばっちりを受けたAクラスの話です（笑）。

ご意見、ご感想等ありましたらよろしく願います。

第13話&14：Fクラス対Bクラスの裏で・・・>（前書き）

今回はFクラス対Bクラスの試召戦争の間のAクラスの話です。

第13話&1t;Fクラス対Bクラスの裏で・・・&g t ;

問題6

問・ベンゼンの化学式を答えなさい。

姫路瑞希・川崎葵・一ノ瀬和哉・神谷優璃・桐谷宗一郎・神楽坂蓮
の答え

A・C6H6

教師のコメント

正解です。君たちには簡単すぎましたね

土屋康太の答え

A・ベン+ゼン=ベンゼン

教師のコメント

君は化学を舐めていませんか。

吉井明久の答え

A・B-E-N-Z-E-N

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

B対Fの試召戦争中。

Aクラスにて。

優子「愛子、おはよう」

愛子「優子遅かったね」

優子「ええ、少し寝坊しちゃって」

高橋先生「皆さん席について下さい、転校生が来たので紹介します」

宗一郎「まったく、やっと来るかと思っただら初日に遅刻とはな」

薫「蓮くんらしいけどね」

高橋先生「神楽坂君、入って来て自己紹介をお願いします」

蓮「神楽坂 蓮です。一年間よろしくお願いします！」

A女「か、かつこいい・・・！」

A女「彼女とかいるのかな・・・？」

高橋先生「では、私は試召戦争の立ち会いにいつてきますので、各自自習しててください」

そう言つて、高橋先生は教室から去つていった。

宗一郎「やっときたか、蓮」

蓮「もうすこし早く来る予定だったんだけどね」

愛子「君が神楽坂君か」

蓮「えつと、君は？」

愛子「工藤 愛子だよ、ヨロシクね」

蓮「うん、よろしくね」

優子「あ、あの、さっきはありがとうございました！／＼／＼」

蓮「ん？木下さんか、どういたしまして」

優璃「あれ？優子さん、蓮ちゃんと面識あるの？」

優子「ええ、朝に変な人たちに絡まれているところを助けてもらったのよ」

蓮「そういうこと、ちょっと職員室に用事あるからいつてくるね」

優璃「わかったー」

そう言つて、蓮は教室から出て行つた。

薫「蓮くんは困つてる人は放つておけない子だからね〜」

愛子「なんかかつこいいよね、そういうの。優子も惚れちゃつたんじゃないの？」

と、優子をからかうように愛子は言った。

優子「な、何言つてんのよ!?!?!/そんな訳ないでしょ!?!?!/」

愛子の言葉に優子は頬を赤く染めながらそう反論したが、

宗一郎「ほう、木下が蓮をねえ・・・」

愛子「冗談のつもりだったんだけどね〜」

薫「蓮くんは鈍感だから、がんばらないとね〜、優子ちゃん」と、三人そろつてニヤニヤしながら優子に向かってそう言った。

優子「ちよ?/!/ちが!?!?!」

翔子「・・・優子顔真つ赤」

優子「/!/」

バタンツ!

小山「木下 優子はいるっ!?!」

急に扉を開け飛ばし、Cクラス代表が教室に入ってきた。

利光「なんだい?騒々しいね」

優子「アタシに何か用かしら?」

小山「木下 優子・・・私達を豚呼ばわりして・・・許せないわ!?!」

優子「はい?」

小山「まだと惚ける気!いいわ、我々CクラスがAクラスに宣戦布告するわ!」

宗一郎「は?話がまったく見えないんだが・・・」

優璃「わたしも全然意味がわからない・・・しかも宣戦布告されちゃつたし・・・」

利光「君はCクラス代表の小山さんかい?木下さんは遅刻してきてさつききたところだよ」

小山「そんな嘘には騙されないわよ！」

蓮「戻ったよー・・・ってどうかしたの？」

そこに蓮がもどってきた。

薫「えつとね、Cクラスの代表さんが木下さんに今日の朝罵倒され
たんだつて、で腹いせに試召戦争を申し込まれたんだよ」

小山「そうよ！私たちには豚小屋がお似合いですつて！？訂正しな
さいよ！」

優子「いや、訂正もなにもアタシいま登校してきたところなんだけ
ど」

蓮「うん、木下さんと一緒にさつき来たところですよ？」

小山「じゃ、じゃあ誰なのよ！？たしかに、アンタだったわよ！？
と小山は優子を指差しながら言った。

優璃「・・・ねえ、優子さん、たしか双子の弟がいるんじゃないよ？
と、優璃は思案顔のまま優子にそう尋ねた。

優子「え、ええ、いるわよ。」
宗一郎「！なるほどな、Fクラス代表・・・なかなか姑息な手を使
つてくれるじゃないか」

薫「どゆこと？」

蓮「んゝ優璃たちはCクラスの人たちを罵倒したのは、木下さんじ
やなくてFクラスに所属している弟だと考えてるわけだね？まあ木
下さんにはそんな時間なかったから違うのはわかってるんだけどね」
優璃「うん、麗奈や和くんに聞いた話なら、見分けがつかないほど
らしいから」

優子「・・・秀吉に話聞いて来るわ・・・！（返答次第じゃ身体中の
関節外してやる！！）」

優璃「今は試召戦争中だから、Fクラスには立ち寄れないですよ？」

蓮「そうだよ、一旦落ち着いて（ナデナデ）」

蓮は優子に声を掛け、頭を撫でて優子を宥めた。

優子「え？／／／あ、あの／／／（なんか物凄く落ち着くわ
．／／／）」

愛子「優子気持ち良さそうだね」（ニヤニヤ）」

優子「はっ！？／／愛子何言ってるのよ！／／／」

宗一郎「話戻すぞ・・・」

蓮「そうだね」

優璃「蓮くんが言わないでよ・・・」

蓮「??」

宗一郎「続きだ、FクラスがCクラスを何故ウチに仕向けたかだが・

・CクラスとBクラスが同盟関係にあるからだな」

小山「何故それを知ってるのよ!？」

宗一郎「企業秘密だ。FクラスがCクラスを焚きつけた理由なんて

それくらいしかないだろ・・・で、優璃、どうする?」

優璃「もう申し込まれたちゃったし、Cクラスの皆さんには悪いけ

ど、負けるわけにはいかないからね」

宗一郎「まあ、冷静に考えれば、勝てる訳ないのにな、無能代表の

せいでCクラスの連中はDクラスの設備行きだな」

と、宗一郎は皮肉たつぷりにそう言った。

小山「誰が無能よ!」

無論、小山は怒鳴りながら、宗一郎に詰め寄っていった。

薫「優璃、なんとかしてよ」

優璃「う、うん。小山さん、今降伏するなら、設備は見逃します。

その代わり、色々条件を飲んでもらいますけど」

と、優璃が小山に対して、降伏勧告をするも・・・

小山「うるさいわよ!誰が降伏なんてするもんですか、開戦は午後

からよ!首洗って待ってなさい!」

完全に頭に血が上ってる小山が聞く耳持つはずなかった。

第13話&14：Fクラス対Bクラスの裏で・・・&g t；（後書き）

次回は明日か明後日にAクラス対Cクラスの話を投稿する予定です。

ご意見、ご感想等ありましたらよろしく願います。

あとできればいいので、小説の評価もよろしく願います。

第14話&15：Aクラス対Cクラス>（前書き）

総合PV10000、ユニーク2000を突破しました！

これからも『バカと天才？たちと召喚獣』をよろしくお願いします。

今回はAクラス対Cクラスの話です。

第14話&17;Aクラス対Cクラス>

問題7

問・女性は（ ）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める。

姫路瑞希・川崎葵・神谷優璃・神楽坂蓮の答え

A・初潮

教師のコメント

正解です。

土屋康太・武内薫の答え

A・初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が41.5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される。――裏面に続く。

教師のコメント

詳しすぎます。

保健体育教師「先生のプライドを打ち砕かないでください・・・」

吉井明久・一ノ瀬和哉の答え

A・明日

教師のコメント

ずいぶんと急な話ですね。吉井くんがこの答えなのはわかりませんが、一ノ瀬くんは意外ですね。

桐谷宗一郎の答え

A・初恋

教師のコメント

たしかに恋は人を変えるといいますが間違いです。しかし桐谷くんがこんな問題を間違えるとは思いませんでした。

優璃 side

「というわけで、Cクラスに宣戦布告されましたので、今から作戦の説明を・・・宗くん、頼むね」

宗一郎「わかった。今回は相手もこちらも召喚獣を使い慣れてないだろうから、単純に力押しで行く。なるべく1対1で戦ってくれ。」

あと、点数が100点以下になったら、すぐ回復試験を受けること。加えて召喚獣の操作のコツを掴んでもらおうと思っっている。だから今回は前衛部隊に30人、中堅部隊に15人ずつ配置する。」

利光「まっしてくれ！それじゃあ、代表の護衛がないじゃないか！？」

久保くんは作戦に関して反論を述べたが、

宗一郎「いや、俺と薫と蓮と霧島で近衛部隊を引き受ける」

と宗くんが付け加えた。

利光「まあ・・・それなら大丈夫だね」

久保くんも納得したみたいです。

薫「まあ、護衛なんかいなくても、優璃ならCクラスがよってたか
ったところで勝てないだろうけど」

宗一郎「作戦は以上だ、質問ある奴いるか？」

・・・シーン・・・

宗一郎「ないな、なら開戦まで自由にしていてくれ」

優璃 side out

そして午後になり、Aクラス対Cクラスの試召戦争が開戦した。

廊下にて。

・総合教科

久保 利光（3947点）・A前線部隊29人（平均2500点）

VS

C前線部隊・中堅部隊25人（平均1650点）

C「な、なんでこんなに前衛にいるんだよ!？」

C「早く援軍呼んでこい!突破されちまうぞ!」

利光「極力1対1で戦うんだ。点数を消費した者は無理する必要はないから、回復試験へ行くんだ!」

戦況は開戦直後からAクラスの前線部隊の人数の多さ、加えて元々の地力の差でCクラスを圧倒していて、Cクラスの前線部隊と中堅部隊はどんどん戦死し数を減らしていった。

優子「アタシたちの出番はなさそうね」

愛子「そうだね」

蓮「二人とも暇そーだね」

愛子「あれ？神楽坂君、近衛部隊じゃなかったっけ？」

蓮「Cクラスの生徒なんて誰一人来ないからね、優璃に許可もらって前線の様子を見にきたんだ」

愛子「まあ、中堅部隊のボクたちでも暇してるくらいだからね」

小山「なにやってんのよ!？」

戦況差が圧倒的すぎ手が余り3人で雑談していると、C代表の怒声が飛んできた。

C「無茶いなよ!？相手はAクラスだぞ!」

C「なんとかしろよ代表!？」

A「あいつがC代表だ!皆かかれー!」

小山「近衛部隊!早く守りなさい!」

C「なら、なんでそんなに前線にでてくんだよ!？」

小山「とにかく教室までひいて籠城するわよ!」

Aクラスにて。

宗一郎「話にならん」

優璃「ちよつと可哀想だけどね」

薫「戦況はどうなってるの?」

翔子「向こうの戦力は5割戦死、3割は戦死寸前……こっちは戦死が2人、2割ほどが回復試験をつけてる」

宗一郎「あと30分もかからんだろ」

A「回復試験終わりました!」

優璃「うん、前線にいつて皆と戦ってきて!」

A「了解しました!」

Cクラスにて。

小山「何なのよ一体!？」

C「どうすんだよ・・・勝てるわけねえよ」

早くもCクラスは敗戦ムードで意気消沈していた。

加藤「案の定無策で上位クラスに突っ込んでボロ負けって、無能にもほどがあるで」

小山「文句があるならアンタがなんとかしなさいよ！」

加藤「無茶いうなや、もうこつちの戦力は8割方瀕死状態なんや、こんなんでどないしろと？そもそもワイ以外にAクラスの奴を戦死させたやつおんのか？」

シーン・・・

加藤「・・・ホンマに誰もおらんのか」

A「そのCクラスのヤツに世界史勝負を申し込む！サモン！」

籠城策もあっさりやぶられ、Aクラス生徒がCクラスになだれ込んできた。

加藤「ほいほーいっと、サモン！」

・世界史

加藤 寿也（483点）

vs

A1（296点）

加藤「その程度でワイに勝とうなど10年早いわー！」

A「なっ！？お前Cクラスだろ！？」

加藤「んなもん関係あるかい！」

そう言うと同時に加藤の召喚獣が相手の召喚獣を真っ二つにしていた。

加藤「代表、ワイは大人しく降伏すべきやと思うがの」

小山「いやよ！」

加藤「ならお前の首もってAクラスと交渉するまでや！」

小山「え？」

そう言うと同時に加藤の召喚獣が小山の召喚獣を切り飛ばした。
加藤「あほらしい、これ以上付き追うてられるかい・・・！」

鉄人「・・・戦争終結！！勝者・・・Aクラス！！！」

宗一郎 side

Aクラスにて。

A「最終的には何故か仲間割れを起こしてC代表はこの生徒に戦死させられました」

「そうか、・・・そこまで信用ないってある意味すごいな、あの無能代表」

バンツ！

加藤「失礼すんで、Aクラス代表いなはるか？」

教室に大柄な生徒がそういいながら入ってきた。

優璃「はい、私ですが・・・」

加藤「Cクラスに加藤や。さっきはウチの代表が失礼したな・・・少し提案があるんやけど聞いてもらってええか？」

優璃「なんででしょうか？」

「一応、聞こうか」

加藤「条件付きで設備ダウンを見逃してくれへんか？」

利光「最初にそれを蹴ったのはそっちなんだから、それは無理だね」

「まあ待て、その条件は？」

加藤「Aクラスへの1学期の間は戦争禁止、加えて3ヶ月はAクラスの指示がない限り、全クラスへの戦争禁止でどないや？」

「（ほう、条件としては悪くないな・・・）後一つ、Cクラス代表のAクラスへの立ち入り禁止をくわえるならいいだろう」

加藤「それくらいなら構わへんで」

利光「立ち入り禁止？そんなことする必要あるのかい？」

「いや、個人的にヒステリック小山の金切り声が鬱陶しくてな（逆恨みされて文句言われるのは勘弁だからな）」

薫「あはは・・・本音と建前が逆になってるよ・・・？」

「代表の自覚もなく、罵倒されたくらいで、冷静な判断もできないヤツなのにか？」

愛子「あはは・・・否定できないね・・・」

優璃「わかりました、なら和平交渉にて終戦つてことでいいですよ
加藤「おおきに！それじゃあ、用済んだから、帰らしてもらおうわ。
ほな、さいなら。」

そういつて加藤はAクラスから立ち去った。

A「なあ、たしか加藤つてAクラス候補だったよな？」

A「だよな、なんでCクラスにいるんだ？」
バンバン！

「全員注目！今から点数を消費した者は回復試験を受けてもらう、
点数を消費した者は俺か優璃に申告してくれ！（加藤か・・・調べて
おく必要があるな）」

俺は教卓を叩いて、Aクラスの生徒にそう言い放った。

薫「私は教室で寝ただけだからね」

「点数を消費してない者は下校時刻になったら帰ってきてくれて構わな
い、以上だ」

優璃「でもさ、Fクラス代表・・・坂本君だっけ？・・・いくらなんで
もやり過ぎだよ」

優子「・・・（秀吉・・・命の保証はないわよ・・・！）」

翔子「・・・雄二にはお仕置きが必要」

「Fクラス代表には一回キツイお灸を据えてやるか」

第14話&17；Aクラス対Cクラス>；（後書き）

次回は近日中にオリキャラ紹介をした後、BクラスとFクラスの戦後対談の話を投稿する予定です。

ご意見、ご感想や誤字脱字等ありましたらよろしく願います。ついでに小説の評価もよろしく願います。

オリキャラ紹介(4) (前書き)

Aクラス対Cクラス戦ででてきたオリキャラの紹介です。

オリキャラ紹介(4)

名前：加藤 寿也

性別：男

読み：かとう としや

誕生日：4月7日

身長：196cm 体重：87kg

所属クラス：2-C

得意教科：日本史(503点)、世界史(499点)、保健体育(407点)

苦手教科：古典(123点)

趣味：筋トレ・マラソン

特技：持久走(鉄人並)

外見：髪色は黒で、髪型は短髪でボサボサ。体格は鉄人とかわらないくらいで、制服を着てないと教師と間違えられる。

性格：基本めんどくさがり。だが、人に頼み込まれたら断れない性格。

・関西弁が特徴？

・振り分け試験では、振り分け試験で得意教科3教科を名前無記名で提出してしまい、Cクラス次席(1707点)でCクラス入りした。(ちなみにCクラス代表・小山は1711点)

・本来ならAクラスの佐藤 美穂と大差ないくらいの学力(総合で3316点)をもっており、Cクラスの生徒からの信頼も厚い。(クラスの大半の生徒が小山よりも代表に相應しいと思っている。)

・試召戦争には興味がなく、ある程度のクラス設備ならどこでもいいとのこと。

召喚獣の武器：大剣

召喚獣の服装：柔道着

腕輪の能力：現時点では不明。

オリキャラ紹介(4) (後書き)

次回は明後日までにFクラスとBクラスの戦後対談の話を投稿する予定です。

第15話&1t:戦後対談>t;(前書き)

今回はBクラスとFクラスの戦後対談の話です。

第15話&1t:戦後対談>

問題8

問・人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい

姫路瑞希・川崎葵・一ノ瀬和哉・神谷優璃・神楽坂蓮の答え

A・脂質、炭水化物、タンパク質、ビタミン、ミネラル

教師のコメント

正解です。流石といったところでしょうか。

桐谷宗一郎(武内薫)の答え

A・薫(宗くん)がいればなんにももらない!

教師のコメント

まさか君たちからそんな回答がでてくるとは思いませんでした。

吉井明久の答え

A・砂糖、塩、水道水、雨水、湧水

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

終戦後、Bクラスにて。

雄二「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け組代表？」

根本「……………」

雄二との視線の先には、先ほどまでの強気がウソの様に大人しくなった根本が床に座り込んでいる。

雄二「本来なら設備を明け渡して貰い、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

B「なんだって!？」

F「何故だ!坂本!」

雄二の発言に対して、周囲が騒ぎ始める。

雄二「落ち着け皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

葵「やっぱりAクラスに仕掛けるんだね」

雄二「ああ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうと思っっている」

Bクラスの生徒も3ヶ月間ボロボロの教室に縛られる可能性からの脱却ともあり、雄二に視線が集まる。

根本「……………条件はなんだ？」

雄二「条件? それはお前だよ、負け組代表さん」

根本「俺、だと?」

雄二「ああ。お前には散々好き勝手やって貰ったし、正直去年から目ざわりだったんだよな」

根本「……………」

雄二「そこで、取引だ。Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつても良い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争が避けられな

いから、あくまで戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

根本「・・・それだけでいいのか？」

和哉「そんな訳ないじゃん」

葵「君はやってはいけないことをしたんだからね」

麗奈「・・・相応の罰が必要」

3人が根本の希望をあつさり打ち砕くようにそう言い放った。

雄二「そういう事だから、Bクラスがコレを着て先程言った通りの行動をしてくれたら、見逃そう」

そう言つて雄二が取り出したのは、秀吉の変装の為に用意しておいた女子制服だった。

根本「ば、バカな事を言うな！この俺が、そんなふざけた事を！」

B「Bクラス生徒全員で、必ず実行させよう！」

B「任せて！必ずやらせるから！」

B「それだけで教室を守るなら、やらない手はないな！」

和哉「やっぱり評判悪いんだね、卑怯者君」

雄二「んじゃ、決定だな」

根本「くっ！ よ、よるな変態ぐふうっ！！」

逃げようとした根本だが、Bクラスの面々が取り押さえ腹部に一撃。

B「とりあえず、黙らせました！」

雄二「お、おう。ありがとう」

和哉「手間が省けましたね。早速着付けに入りましょう」

そういつて、和哉は根本の制服を脱がし始めた。

和哉「・・・男の服を脱がすつて、思った以上に苦痛ですね・・・」

「うん、でも、目的のため・・・（吐き気が・・・）」

根本「う、うう・・・」

和哉「ん？明久、少し離れてて」

「うん（何する気だろ?）」

和哉「おやすみ」

ポコッ！

根本「がふうっ！！」

うめき声を上げる根本から僕を離し、和哉は根本の腹部に一撃。そして、根本の服を脱がし切った後、女子の制服をあてがった。

「うーん・・・これどうやって着せるんだろ？」

和哉「その前に順序はあってるんですか？」

B女「私がついてあげるよ」

「そう？　じゃあ折角だし、可愛くしてあげて」

僕はBクラスの女子生徒にそうお願いしたが、

B女「それは無理。土台が腐ってるから」

和哉「酷い言い様ですね・・・ぼくはこの制服を捨ててから、手を消毒してきますね」

秀吉「お主のほうがよっぽど酷いがのう・・・」

僕は根本の制服を探り、姫路さんのラブレターを取り出した。

「あつたあつた」

そして、僕は姫路さんのラブレターを返すためFクラスへ向かった。

明久side out

秀吉side

明久が教室に向かった後、姫路が教室に入っていく姿を見つけた葵殿とワシはニヤリと笑った。

葵「明日の姫路さんの報告が楽しみですな」

「まあ明久じゃから、あまり期待は出来んじやろうかな？」

葵「いくら鈍感でもさすがに気づかないかな？」

「そこは明久じゃからの・・・」

根本「こつ、この服、やけにスカートが短いぞ!？」

ふと、聞こえて来た叫び声。

見てみると、そこには女子制服を纏い髪にリボンを付けた根本と吐きそうになっている和哉の姿が。

和哉「自分で提案しといてなんだけど、おぞましいですね・・・」

「は、吐きそうじゃ・・・（なんてものをみせてくれるのじゃ!）」
根本「Fクラスの奴ら!よくも俺にこんなことを!」

B「すまないFクラスの方々、これから撮影会があるから急がないといけないんだ」

根本「き、聞いてないぞ!?!」

B「無駄口をたたくな!! ほら、キリキリ歩け!」

葵「さて、秀吉くん、Cクラスの人たちと秀吉くんのお姉さんに謝りにいこっか」

「へ?何故じゃ!?!」

葵「何故ってそりゃあ、Cクラスの人を焚きつけるためにお姉さんのふりしてCクラスの人を散々罵倒したんでしょ?」

「そ、そうじゃが・・・あれは、作戦だったから仕方ないのじゃ!」
バチンッ!

葵殿がワシの頬をひっぱいた。

「え?・・・なにをするのじゃ!?!」

葵「ふざけないで!じゃあ何?作戦だったら何してもいい訳!?!」

葵殿は明らかにいつもと違う・・・怒りのオーラをまとって、ワシにそう言い放った。

「あ、あれは演劇の一環で・・・」

葵「今の秀吉くんに人の前で演劇をする資格なんてない!」

「な!?!何故そんなこというのじゃ!?!ワシだって必死に演劇の練習をしてるのじゃ!?!」

葵「人の気持ちも考えない様な人に人に魅せる演劇なんてできる訳ないし、そんな人に演技なんてしてほしくない!?!」

「うっ!?!じゃが・・・」

葵「もういい・・・私はAクラスにいつて来るから・・・!」

葵殿は怒りながらワシにそう言い放ち、Aクラスへ向かっていった。

第15話&16:戦後対談>t;(後書き)

はぁ・・・なんかgdgdだし・・・文才がほしい・・・

ご意見、ご感想や誤字脱字等ありましたらよろしくお願いします。
ついでに小説の評価もよろしくお願いします。

次回はAクラスに向かった葵の話とその後の秀吉の話です。

第16話&17:謝罪と秀吉の後悔&87:(前書き)

徐々にですが、1日のPV・ユニークが増えてきて嬉しい限りです。

第16話&17:謝罪と秀吉の後悔>

問題9

バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい。

姫路瑞希・川崎葵・神谷優璃・桐谷宗一郎・神楽坂蓮の答え
A・リトアニア、エストニア、ラトビア

教師のコメント
その通りです。

一ノ瀬和哉の答え
A・魏、呉、蜀

教師のコメント
先生も三国志は好きです。

武内薫の答え

A・ドイツ、オーストリア、イタリア

教師のコメント

それはバルト三国ではなく三国同盟です。

土屋康太の答え

A・アジア、ヨーロッパ、浦安

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

A・香川、徳島、愛媛、高知

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

葵 side

Bクラス対Fクラスの試召戦争終戦後。

Aクラスにて。

パタンツ！

「失礼します」

薫「あれ？葵、Aクラスに何か用？」

「うん、木下さんいるかな？」

薫「優子？ちよつと待ってね」

「うん」

薫が木下さんを連れて戻ってきた。

(・・・秀吉くんにそっくりですね。)

優子「えつと・・・」

「あ、2-Fの川崎 葵です」

優子「木下 優子よ」

薫「あれ？面識なかったの？」

優子「ええ、初対面だと思うけど、何か用かしら？」

「その、Cクラスの・・・秀吉くんのことです。謝りにきたんです」

そう言った後、私は木下さんに頭を下げた。

優子「じゃあやっぱり・・・！（秀吉・・・アンタの関節の数、倍くらいにしてあげるわ！）」

木下さんは秀吉くんをどう始末するか思案しだしたみたいです。

宗一郎「ま、予想通りだな」

優璃「えっと、葵が謝ることじゃないんじゃない？」

宗くと優璃もいつの間にか話に加わっていた。

優子「そうよ、悪いのはあのバカの弟だから川崎さんは気にしないで」

翔子「・・・優子たち何話してるの？」

ちようどそこに霧島さんが来て、何を話しているのか、と聞いてきた。

優璃「えっと、優子さんのふりしてたのが優子さんの弟だったって話ですよ」

宗一郎「で、葵が謝りにきたが、本人はいないわけだ」

翔子「・・・どうして？」

葵「『作戦だから仕方ないのじゃ！』って言ってました・・・」

宗一郎「善悪の区別もつかないのか？そいつは」

バタンツ！

秀吉くんがCクラスにしたことについて私たちで話していると、和哉がAクラスにやってきた。

和哉「失礼します、蓮兄いますか？」

愛子「ん？僕、どこからきたの？迷子？」

和哉「・・・（シクシク）」

優璃「和くん、いちいち泣かないの」

和哉「また小学生扱い・・・」

優子「一ノ瀬くん、蓮兄って？」

蓮「その呼び方できればやめてほしいんだけどなあ」

と、本を読んでいた蓮くんがこっちに向かって来ながらそう言った。

優璃「でも見た目は兄弟で問題ないよ？（笑）」

和哉「・・・もうやだ」

（ごめん・・・否定できない・・・）

愛子「蓮くんと兄弟なの？でも、苗字ちがつよね？」

蓮「いや、兄弟じゃないですから」

優子「え？そうなの？」

宗一郎「和哉が勝手にそう呼んでるだけだ」

蓮「もう慣れたけどさ。で、何か用かな？」

和哉「今日の晩御飯なにがいいですか？」

愛子「ん？晩御飯一緒に食べに行くの？」

薫「えつと、和くんと蓮くんは同居してるんだよ」

愛子「へえ・・・ねえ、もしかして神楽坂君が一ノ瀬君ってお金

持ちの家の子なの？」

宗一郎「ん？蓮は神楽坂財閥の御曹司だし、優璃も神谷財閥のご令

嬢で、薫の親も大企業の社長の娘だ」

愛子「神楽坂財閥と神谷財閥って、国内有数の大財閥だよ・・・」

薫「あのさ、葵の話はもういいの？」

宗一郎「まあいいんじゃないか？Cクラスの話は葵も気にするな、

Fクラス代表にはきっちりお灸を据えてやる」

「うん・・・」

優子「なにも川崎さんが気にすることじゃないわよ（秀吉・・・アン

タの関節使い物にならなくてあげるわ!）」

（木下さん・・・殺気が駄々漏れですよ・・・？）

蓮「木下さん、暴力はダメですよ」

優子「え!？」

翔子「・・・そんな殺気だしてたら、誰だって気づく」

宗一郎「そういえば和哉、Fクラス代表はウチを狙ってるのか？」

和哉「うん、そうみたいだよ」

宗一郎「なら相手の作戦にあえて乗っかって全部看破してFクラス代表のプライドを粉々に打ち砕いてやるか」

薫「宗くんらしいね」

その頃Fクラスにて。

明久「（やっぱりあのラブレターは雄二宛なのかな・・・）」

と、姫路さんのラブレターを姫路さんの鞆に戻し終えた明久は考え込んでいた。ちょうどそのとき、

ガラッ！

秀吉が目には涙を溜めて戻ってきた。

秀吉 side

「・・・・・・・・（間違いなく嫌われたのじゃ・・・）」

明久「え？どしたの？？秀吉!？」

「葵殿に怒られてしもつたのじゃ・・・」

明久「ど、どうして？」

ワシは泣くのを堪えながら明久に事情を説明した。

明久「・・・・・・・・もう下校時刻過ぎてるから明日Cクラスの人たちに謝りにいこう？今考えればいくら作戦とはいえやり過ぎだったし」

ガラッ！

そこに麗奈が辺りを見回しながら教室に戻ってきた。

麗奈「・・・・・・・・2人も、葵と和哉、しらない？」

「葵殿ならAクラスにいったのじゃ・・・（きつとまだ怒っておるじやろうな・・・）」

と、ワシは俯きながら麗奈にそう言った。

麗奈「・・・・・・・・？木下くん・・・どうかしたの？」

麗奈はワシの様子がおかしいことに気づいたようで、声をかけてきた。

明久「えっと、実は・・・（事情説明中）なんだ。」

麗奈「・・・怒るのも無理ないと思う・・・葵は演劇が本当に大好きで、必死に努力してる・・・演劇も演劇以外においても・・・だからそんな演劇を冒瀆するような真似したら怒るに決まってる」

「ワシはそんなつもりは・・・」

麗奈「・・・Cクラスの人からしてみれば秀吉くん罵声を浴びせられただけだね・・・それに葵は秀吉くんのことを演劇のライバルだと思ってるからこそ本気で怒ったんだと思う」

「じゃが、今回のことで間違いなく嫌われたのじゃ・・・」

明久「で、でも謝ればきつと許してくれるよ！」

「いや、よくよく考えてみればワシも同じ状況ならワシみたいな奴とつるみたいとは思わんのう・・・」

麗奈「・・・大丈夫、葵は自分の非を認めてちゃんと謝れる人を足蹴にしたりしない・・・それに秀吉くんもこのままじゃ嫌でしょ？」

「それはそうじゃが・・・」

明久「と、とにかく明日Cクラスの人たちと一緒に謝りに行こ！秀吉！」

「う、うむ・・・そうじゃな・・・」

麗奈「・・・そろそろAクラスに行つて葵たちと帰るから」

「うむ、すまなかつたのじゃ麗奈殿」

麗奈「・・・きにしないでいい」

そう言つて、麗奈は鞆を持って、教室から出て行った。

「明久よ、すまなかつたのじゃ・・・こんな話につき合わせて」

明久「ううん、元はと言えば僕や雄二にも非があるわけだからね、さてと、そろそろ帰ろつか秀吉」

「（はっ！？今日家に帰ったら姉上に殺されかねんのじゃ・・・）あ、明久よ！今日はお主の家に泊まりに行つてもよいかの？」

明久「へ？急にどうしたの？」

「た、頼むのじゃ！ワシはまだ死にとくないのじゃ！」
明久「？」

ワシは明久の家に泊まる約束を取り付けてなんとか姉上の脅威から逃げ去った。

（明日は姉上にも謝らねば・・・しかし、葵殿に嫌われると思うと何故か胸が締め付けられるような感じがするのじゃが、これはなんなのじゃろうか？）

第16話&17:謝罪と秀吉の後悔>(後書き)

今回も読んでいただいてありがとうございます。

ちよつとここでアンケートをとりたいと思います。

今回はあんまり話にできませんでしたが、

見た目が小学生のオリキャラ一ノ瀬和哉と誰をカップリングさせようか(もしくはカップリングなしか)悩んでいます。

ですので、誰とのカップリングが見たいかを教えていただきたいです。(翔子、優子、オリキャラ、文月学園の生徒ではない人以外でお願いします。)

ちなみに、アンケートの期間はまだ決まっています。

お手数かけますが、よろしくお願いします。

第17話&1t；Aクラスとの交渉>t；(前書き)

ggggggです(笑)。

第17話&1t;Aクラスとの交渉>

問題10

以下の文章の()にはいる正しい物質を答えなさい

・ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと()である。

姫路瑞希・川崎葵・一ノ瀬和哉・神谷優璃・桐谷宗一郎・神楽坂蓮の答え

A・水酸化カルシウム

教師のコメント

正解です。

土屋康太・武内薫の答え

A・塩化吸収材

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

吉井明久の答え

A・アンモニア

教師のコメント

それは反則です。

明久side

翌日。Fクラスにて。

秀吉と僕は朝一番でCクラスに謝罪しにいった後、教室に戻ると、教室には葵さんが1人で本を読んでいた。

葵「・・・おはよう」

そう一言僕らに無愛想に言つと、また本を読み始めた。

(やっぱり怒っているみたいだね・・・)

秀吉「あ、葵殿」

葵「・・・何」

葵さんは秀吉を睨みながらそう言った。

秀吉「ワシが間違つてたのじゃ！すまなかつたのじゃ！」

葵「・・・Cクラスの人たちには謝りにいったの？」

「うん、やっぱり散々罵倒されたけどね」

秀吉「じゃがワシらがしたことを考えたら当然じゃ・・・」

葵「そつか、わかつてくれたならいいよ。後は秀吉くんのお姉さんに謝りにいかないかね」

秀吉の言葉を聞いて、葵さんは秀吉を睨むのをやめ、いつもの様子に戻った。

秀吉「そ、そうじゃな・・・(ワシの命は今日までのようじゃ・・・

」

ガラッ！

ちようどそこに麗奈が登校してきた。

麗奈「・・・おはよう」

秀吉「麗奈殿おはようなのじゃ」

「おはよー」

麗奈「・・・仲直り・・・できた？」

秀吉「うむ！」

麗奈「・・・よかった」

時刻08:45

雄二「よし、皆注目してくれ！」

F「なんだ？」

F「対Aクラスの作戦会議か？」

雄二「まず皆に礼を言いたい。不可能だと言われていたのにも拘らずここまで来れたのは・・・他でもない皆の協力があつてのことだ感謝している」

「ゆっ雄二どうしたの？らしくないよ？」

和哉「明日は槍でも降つて来るのかな？」

雄二「流石に酷くないか・・・？だがこれは偽らざる俺の気持ちだ」

雄二「ここまで来た以上絶対Aクラスにも勝ちたい・・・勝つて生き残るには勉強が全てじゃない現実を教師どもに突きつけるんだ！」

F「おおーッ！！」

F「そうだあーッ！！」

F「勉強だけじゃねえんだーッ！！」

雄二「皆、ありがとう。そして残るAクラスだがこれは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

和哉「一騎打ちですか？」

須川「それで本当に勝てんのか？」

雄二「ああ、俺を信じてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今

皆に見せてやる！」

Aクラスにて。

恒例の宣戦布告、今回は代表の雄二と僕と秀吉、康太、和哉、葵さん、麗奈ちゃん、姫路さん、島田さんという首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

久保「一騎討ちかい？」

雄二「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

葵「(まさか優璃に勝つ気なのかな?)」

和哉「(もしかして、今までは手を抜いてたとか?)」

久保「何が狙いなんだい？」

現在、Aクラス側の交渉の席についているのは久保くん一人。

雄二「もちろん俺たちFクラスの勝利が狙いだ」

久保「面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事ができるのはありがたいが、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要もないね」

雄二「賢明だな、ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

久保「時間は取られたはしたが、それだけだが？何の問題もないね」

雄二「Bクラスとはやりあう気があるか？」

久保「Bクラス・・・昨日来て居たあの・・・ウブッ！・・・」

雄二の言葉に久保くんは昨日のアレ(根本の女装)を思い出したらしく、吐きそうになっていた。

雄二「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、どうなることやら」

久保「だが、BクラスはFクラスと戦争して負けたんだから試召戦争は3ヶ月禁止のはずじゃなかったかい？」

雄二「知っているだろ？事情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』って事になっていることを。規約にはなんの問題も無い」

バタン！

そこに遅れてAクラスの二人が入ってきた。

宗一郎「遅れて申し訳ない」

優璃「失礼します」

久保「用事はすんだのかい？」

宗一郎「ああ、それで話はどうなっている？」

久保「・・・Bクラスが攻めて来るらしい」

宗一郎「いや、それはない」

雄二「は？なにいつてるんだ？」

その時、外から、

小山「我々Cクラスは、Bクラスに宣戦布告をします！！！」

根本「友香！？どうしてだ！？」

宗一郎「こういうことだ」

雄二「な！！！？どういうことだ！？」

宗一郎「簡単な話だ、Cクラスを倒したのち、設備ダウン回避を条件にCクラスをいいなりにした。ただそれだけだ」

「ど、どうすんのさ？雄二！！？」

優璃「あれ？あ、あなたは！！？」

「へ？（誰だろうこの子？可愛い子だな）」

優璃「あの時わたしを助けてくれた人ですよね！？」

葵「ん？優璃、吉井君と面識あるの？」

優璃「この前変な人に絡まれた時に助けてくれたんだよ／＼」

「ああ！あの時の！？無事でなによりだよ！」

姫路「また、吉井君の側に綺麗な子が・・・」

島田「これはボツキリ話を聞かないと・・・」

話を聞いていた2人は何故か黒いオーラを出しながら、僕に迫ってきた。

「待つて！ボツキリはおかしいから!？」

宗一郎「・・・話をもどしていいか？」

優璃「あ、ごめんなさい／＼」

宗一郎「さて、一騎打ちの件だが条件付きで別に受けても構わないぞ」

雄二「・・・条件はなんだ？」

翔子「・・・負けたほうがなんでも言うことをひとつきく」

雄二「いいだろう」

翔子「・・・私は雄二と付き合ってもらおうから」

僕・康太「・・・は?・・・あとで異端審問会にリーク決定!!」

宗一郎「あとは代表一騎打ちじゃなくて、9対9で、こっちが指定したんだからな、科目選択権はそっちに5つ、こっちに4つでいいだろう。・・・これなら受けてもいい、いいな、代表」

優璃「いいよ」

秀吉「うむ?代表は霧島ではないのかの?」

翔子「・・・私は代表じゃない」

雄二「は?」

葵・和哉「「え!?!知らなかったの!?!」」

宗一郎「なんだ?知らなかったのか?まあいい、開戦は何時にするんだ?」

雄二「・・・午後からでどうだ?(まずいな・・・となると俺の作戦は無意味じゃないか・・・だが、いまさら後には引けねえ)」

宗一郎「まあいいだろう、交渉成立だ」

第17話&17: Aクラスとの交渉>(後書き)

引き続きアンケート(第16話の後書きに詳しいことは書いてます。
)を行っていますのでご協力お願いします。

あとご意見、誤字脱字等ありましたら感想に書いてくださると助かります。

第18話&1t；Fクラス対Aクラス戦前>；（前書き）

総合PV15000を突破！

第18話&1t;Fクラス対Aクラス戦前>

問題11

以下の（ ）に当てはまる歴史上の人物を答えなさい。

・楽市楽座や関所の撤廃を行ったのは（ ）である。

姫路瑞希・川崎葵・神谷優璃・桐谷宗一郎・神楽坂蓮の答え

A・織田信長

教師のコメント

あなたたちには簡単な問題でしたね。

島田美波の答え

A・ちよんまげ

教師のコメント

日本にはもう慣れましたか？この解答を見て、先生は不安になりました。

吉井明久・武内薫の答え

A・ノブ

教師のコメント

ちよつと馴れ馴れしいと思います。

一ノ瀬和哉の答え

A・人

教師のコメント

真面目に答えてください。

一ノ瀬和哉のコメント

えっと・・・真面目に答えたつもりなのですが・・・

Aクラスside

優璃「ーというわけで、Fクラスとは9対9で戦い5勝したほうが勝ちとなります。」

宗一郎「多分向こうは元学年次席の姫路や1教科に特化した奴で勝とうとしてくるだろう。いくつかは負けるだろうがAクラスの勝利には問題ない」

優璃「それじゃあ、一騎打ちのメンバーを・・・宗くん」

宗一郎「わかった、メンバーは霧島、久保、木下、工藤、佐藤、武内、神楽坂、俺、代表だ」

Fクラスside

雄二「ーということだ。Aクラスとは9対9の勝負で5勝したほうの勝ちとなる。そこで今から相手の情報についてムッリーニから報告がある」

康太「・・・雄二はAクラスの霧島 翔子と幼馴染・・・その上許婚とのこと・・・許すまじ・・・！」

F「「「「「殺せー！ー！ー！！！！」」」」」

雄二「なっ！？なぜみんな急に上履きを構える！？」

明久「黙れ男の敵！」

須川「そうだ！霧島さんと幼馴染だとなんて羨ましい！」

明久「Aクラス戦の前にキサマを殺す！」

雄二「俺が何をした！？」

須川「遺言はそれだけか？」

明久「待つんだ須川君、紐なしバンジーはまだ早い、それは全員でプロレス技を食らわせてからにするんだ」

須川「了解です。隊長！」

姫路「あの、吉井君？」

明久「ん？何、姫路さん」

姫路「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

明久「そりゃ、まあね・・・美人だし・・・って、え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢をとるの？それと島田さんも僕に向かって掃除箱なんてなげようとしているのさ！？」

和哉（なんか姫路さんも最近壊れてきてますね・・・）

葵「皆、とりあえず落ち着いて」

秀吉「そうじゃ、落ち着くのじゃ」

明久「で、でも！」

和哉「Aクラス戦が終わったら殺ってしまったてもいいから（笑）」

雄二「おい！・・・まあ、返り討ちにすればいいか。」

和哉「そうならないようにFFF団の皆さんにはスタンガンを一
1000円で貸しますよ？」

F「「「「「貸してくれ！！！！」」」」」

雄二「・・・俺はどう反応すればいいんだ？」

葵「和くん？蓮くんに言いつけますよ？」

和哉「・・・やっぱりスタンガンの貸し出しは中止します」

F「…………チツ！」「……」

雄二「川崎、助かった」

葵「いえ、さすがにスタンガンはやりすぎですので」

須川「仕方ない……葵さんがそういうのならこの件は不問とする」

F「ああ、不意だが仕方あるまい」

葵「で、何か言うことがあったんじゃないの？」

雄二「ああ、そうだったんだが、そろそろ開戦の時間だ。そのこと

についてはAクラスについてからでいいだろ」

葵「ならいいけど」

雄二「さあ皆！Aクラスを倒してシステムデスクを我が物にするぞ

ー！」

F「……………おおおー！！」「……」

第18話&17：Fクラス対Aクラス戦前&後；（後書き）

引き続きアンケートを行っておりますのでご協力お願いします。

第16話の後書きに詳しいことは書いてあります。

次回はFクラス対Aクラス戦の話を投稿する予定です。

第19話&1t;Fクラス対Aクラス・開戦!>t;(前書き)

お気に入り登録15件、ユニーク3000突破!

今回からAクラス戦です。

第19話&17;Fクラス対Aクラス・開戦!>

問題12

以下の問いの()に人名をいれなさい。

・江戸幕府八代将軍は()である。

姫路瑞希・川崎葵・神谷優璃・桐谷宗一郎・神楽坂蓮の答え

A・徳川吉宗

教師のコメント

正解です。

吉井明久・武内薫の答え

A・暴れん坊将軍

教師のコメント

ある意味正解ですが、問題文をちゃんと読んでください。

一ノ瀬和哉の答え

A・マシュー・ペリー

教師のコメント

一ノ瀬くんは歴史が苦手のようにですね。

西村先生に補修を依頼しておきましたのでみっちり勉強してきてください。

明久 s i d e

Aクラスにて。

高橋先生「では、両クラス共準備は良いですか？」

雄二「ああ」

優璃「問題ありません」

高橋先生「それでは1人目どうぞ」

雄二「島田、任せたぞ」

島田「それじゃあ、いつてくるね！」

宗一郎「さてと、俺が相手をしてやるよ」

Aクラスからは、身長が雄二くらいありAクラスとの交渉のときにいた桐谷くんがでてきた。

高橋先生「教科は何にしますか？」

島田「数学でお願いします！」

(島田さんは数学ならAクラス並の点数があるからね)

高橋先生「わかりました」

宗一郎「まずは1勝させてもらうか」

高橋先生「それでは第1試合開始！」

宗一郎・島田「サモン!!!」

・第1戦目(数学)

Fクラス・島田 美波(263点)

島田「ウチは数学だけならAクラス並の学力があるのよ！」

宗一郎「たしかにAクラス並だな、・だが」

Aクラス・桐谷 宗一郎（507点）

宗一郎「俺の敵じゃないな」

島田「え!？」

雄二「流石は学年次席といったところか・・・」
バキューン!

宗一郎の召喚獣が放った銃弾が島田の召喚獣の眉間を撃ち抜き、島田の召喚獣は戦死した。

高橋先生「勝者・Aクラス、桐谷 宗一郎!」

島田「ごめん、まけちゃった・・・」

「仕方ないよ、相手が学年次席だったんだしAクラス並の点数じゃ勝てないのもわからない頭！腕がもげるーーーー!!」

僕は喋っている途中に島田さんに間接技を掛けられた。

（ちよ、なんで!?!）

島田「アンタにだけは言われたくないわよ!」

メキメキ！ 僕の腕の骨が軋む音。

「か、和哉!助けて!」

和哉「今回ばかりは明久が悪いね」

雄二「自業自得だろ」

秀吉「さすがに庇いようがないのじゃ」

島田「ふん!」

ゴキユ！ 僕の腕の間接が外れる音。

「ぎゃあああああーーーーー!!!」

島田「吉井のバカ!」

（い、痛い・・・まさか本当に間接外されるとは思わなかったよ）
葵「（ボソツ）ことあるごとに暴力振るうから気づいてもらえなん

じゃないのかな？」

麗奈「（ボソツ）・・・私もそう思う」

「いててて・・・二人ともどうかしたの？」

葵「なんでもないよ」

麗奈「・・・なんでもない」

Fクラス・0対1・Aクラス。

第19話&17：Fクラス対Aクラス・開戦！>；（後書き）

引き続きアンケートを行っておりますのでご協力おねがいします。

第16話の後書きに詳しいことは書いてあります。

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら感想に書いてくださると助かります。

第20話&1t・葵の怒り> ; (前書き)

Aクラス戦・2戦目です。

第20話&1t;葵の怒り>

問題13

以下の問いに答えなさい。

西暦1492年、アメリカ大陸を発見した人物の名前を答えなさい。

姫路瑞希・川崎葵・神谷優璃・桐谷宗一郎・武内薫・神楽坂蓮の答え
A・クリストファー・コロンブス

教師のコメント

正解です。

一ノ瀬和哉の答え

A・豊臣秀吉

教師のコメント

進歩がみられないので、西村先生に補修の強化を申請しておきますね。

秀吉side

高橋先生「それでは2人目どうぞ」

優璃「久保くん、お願いします」

利光「わかりました、代表」

雄二「秀吉、頼んだぞ」

「わかつたのじゃ！（とはいったものの、久保に勝てる教科なんてないのじゃ・・・）」

久保「木下くんか。まさか君がAクラスの振りして挑発して、Cクラスを僕たちにけしかけてくるとはね」

「（やはりAクラスの連中はワシがやったことを知ってるのじゃな・・・）・・・そのことに関しては悪いとおもっておるのじゃ」

久保「まあ、演劇なんて勉強に無意味でくだらないものに現を抜かしてるFクラスの君に何を言っても無駄だったね」

（こやつ・・・今何て言ったのじゃ？・・・演劇がくだらないものじゃと!?）

「今の言葉を訂s」

葵「秀吉くん、代わってもらえるかな・・・！」

「こt・・・あ、葵どの!?一旦落ち着くのじゃ！」

ワシの言葉を遮って、後ろから葵が声をかけてきた。その要求を断ろうとワシが後ろを振り返ると、葵はワシを怒って怒鳴りつけたときと同じ・・・いや、それ以上に怒りをあらわにして久保を睨みつけていた。

葵「秀吉くんは黙ってて！」

和哉「演劇をくだらないものなんて言ったら、葵さん怒るに決まってるじゃん」

雄二「和哉！川崎をなんとかしろ！ここで川崎に負けられると困る！」

和哉「怒った葵さんを止めるなんて無茶言わないでください」

葵「代表！私が秀吉くんの代理で出ます・・・！いいですよ・・・！」

そう言つて、葵は雄二にすごい剣幕で迫っていった。

雄二「わ、わかつた!?」

久保「誰が来ようと結果は同じだよ。高橋先生、教科は総合科目で願います」

高橋先生「わかりました」

久保「それじゃあ、よろしく」

葵「……………」

高橋先生「それでは第2試合開始！」

久保「サモン！」

・第2戦目（総合科目）

Aクラス - 久保 利光（3997点）

島田「すごい点数……第5位ですらこんなに点数高いの……？」

明久「いくら葵さんが総合でAクラス並でも、この点数相手じゃ……

……」

雄二「流石にTOP5は伊達じゃねえってことか……」

和哉「まあ、流石……だね」

麗奈「……だけど、あの程度じゃ葵の足元にも及ばない」

葵「……サモン」

Fクラス - 川崎 葵（10902点）

姫路・島田「「えっ!?!」」

F「「「「う、うおおおー!!!!」」」」

A「なんだあの点数!?!」

A「久保の点数の倍以上じゃねえか!?!」

A「てか高橋先生より点数高くないか!?!」

雄二「お、おい和哉。あの点数はなんだ……?」

「わ、ワシも姫路よりも成績がいいのは知っておったが、まさかこ

こまで高いとは知らなかったのじゃ……」

ワシを含めこの教室にいる大半が葵の点数に驚愕した。

和哉「まあ、葵さんですし」

雄二「いや、答えになってねえぞ……」

明久「僕の点数の10倍以上だよ……」

久保「な、なんなんだその点数は!？」

葵「……”光線”!」

葵がそう言い放つと、葵の召喚獣の輪刀が光り始め、次の瞬間には輪刀から光線が発射され、久保の召喚獣に直撃し一瞬で消え去った。

高橋先生「勝者・Fクラス、川崎 葵!」

久保「な、Fクラスなんか……」

葵「さっきの言葉、訂正してください……!」

そう言つて、葵は久保に掴みかかっていた。

久保「……すまなかつたね君の夢を貶したりして」

葵は久保の謝罪の言葉を聞いて、掴んでいた久保の制服の襟から手を離し、Fクラス陣営に帰ってきた。

そのときにはいつもの雰囲気に戻っていた。

「お疲れ様なのじゃ!」

麗奈「……お疲れ様」

葵「うん」

雄二「お疲れさん」

葵「すいません、代表。勝手に……」

明久「なにいつてんのさ!勝ったんだからいいにきまつてるよ!」

雄二「そうだぞ。川崎、よくやってくれた。後は俺たちに任せろ!」

葵「うん、がんばつてね。あと、この試召戦争終わってからでいいからAクラスの人たちに謝つたほうがいいと思いますよ、代表」

雄二「……わかつた」

そう言つて、葵はFクラス陣営の後ろのほうにあるソファに座つた。

その後を追いかけて、ワシは葵のすぐ横のソファに座つた。

「すまなかつたのじゃ、ワシがあんなことをしなければ演劇をくだらないものとは言われなかつたじやろくに……」

葵「そうかもしれないけど今更悔やんでも仕方ないよ。それに悔や
んでる時間があるならバカにする人たちを演劇で見返せるように演
技の練習をしようよ」

「そうじゃな、がんばるのじゃ!」

葵「でも、その前に秀吉くんはお姉さんに謝らないとね」

「・・・わかっておるのじゃ」

秀吉 side out

第20話&17:葵の怒り>(後書き)

引き続きアンケートを行っておりますのでご協力お願いします。

第16話の後書きに詳細は書いてあります。

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら感想に書いてくださると助かります。

第21話&1t;観察処分者>t; ; (前書き)

Aクラス戦・3戦目です。

第21話&1t;観察処分者>

問題14

- ・ () に入る元素とその元素記号を答えなさい。
- 1 . 元素およびガス状分子の中で最も軽い元素は () である。
- 2 . () は空気中に約78 . 08 %も含まれ、アミノ酸をはじめ、多くの生体物

質中に含まれており、すべての生物にとって必須の元素である。

姫路瑞希・川崎葵・一ノ瀬和哉・神谷優璃・桐谷宗一郎・神楽坂蓮の答え

- A . 1 . 水素・記号：H
- 2 . 窒素・記号：N

教師のコメント

正解ですね。これくらいは常識の範囲ですね。

土屋康太の答え

- A . 1 . 水素・記号：
- 2 .

教師のコメント

どうして解答用紙が血まみれなんですか？

雄二 side

高橋先生「それでは3人目どうぞ」

優璃「佐藤さん、お願いします」

美穂「わかりました」

「よし、頼んだぞ、明久」

明久「え？僕がやるの？」

「大丈夫だ。俺はお前を信じてる（負けるほうにな）」

和哉「明久なら大丈夫だよ」

姫路「吉井くん、頑張ってください！」

麗奈「・・・頑張つて」

明久「わかったよ、やれるだけやってみるよ」

「がんばれよ（さっさと負けて来い）」

高橋先生「教科は何にしますか？」

明久「日本史でお願いします！！」

高橋先生「わかりました」

美穂「よろしくお願いします」

高橋先生「それでは第3試合開始！」

明久・佐藤「サモン！！」

・第3試合目（日本史）

Fクラス - 吉井 明久（133点）

vs

Aクラス - 佐藤 美穂（347点）

島田「え？」

「どういうことだ！？明久がDクラス並の点数をとっているだど！」

？」

姫路「すごいです！吉井くん！」

康太「・・・ビックリ」

明久「いやー、一昨日と昨日、勉強したかいがあったよ」

「どうしたんだ明久？お前が勉強するなんて・・・」

明久「ここまで姫路さんに雄二や和哉たちに頼りっぱなしだったからね・・・少しくらいは力になれたらなって思ってたさ。それじゃあ佐藤さん、よろしくね」

佐藤「たしかになかなかの点数ですね。ですが、点数ならわたしのほうが上です！」

そう言つて、佐藤の召喚獣が武器の鎖鎌を振り回しながら明久の召喚獣に突撃してくるが、それを軽く回避して明久の召喚獣は木刀で佐藤の召喚獣にカウンターで連撃をくらわせてからすぐに距離を取り直す。

この攻防が10分くらい続いた。

Aクラス - 佐藤 美穂（89点）

佐藤「くっ！・・・やっぱりそう簡単には攻撃させてもらえませんか」

明久「元々2倍以上の点差があつたんだから1発で致命傷になりかねないからね。それにフィードバックがあるからダメージくらうと痛いんだよ」

佐藤「それもそうですね・・・いきますよ」

そう言い、さつきと同じ様に佐藤の召喚獣が明久の召喚獣に突撃してくるが、もちろん明久の召喚獣は回避してカウンターで連撃をくらわせた。

佐藤「やっとうまくいきましたね」
ガシッ！

が、今度は明久の召喚獣が距離をとる前に佐藤の召喚獣に明久の召

喚獣が捕まってしまった。

Fクラス - 吉井 明久 (133点)

vs

Aクラス - 佐藤 美穂 (56点)

明久「なっ!?!」

佐藤「いくら召喚獣の操作能力の高い吉井くんでも捕まえてしまえば回避しようがないですよね・・・これでおわりです」

そう言つて、佐藤の召喚獣は明久の召喚獣を一撃で葬り去る為、防御を捨て武器を振り上げる。

明久「このっ!」

それに対して明久の召喚獣も防御を捨て、木刀を振り上げ切りかかる。

その次の瞬間には互いの召喚獣が互いの武器で相手の召喚獣を切り裂いていた。

Fクラス - 吉井 明久 (0点)

vs

Aクラス - 佐藤 美穂 (0点)

高橋先生「そこまで、両者戦死のため、引き分けとします」

明久「ぎゃあああああー!! 体中に激痛がー!!」

明久はそう言つてフィードバックによる痛みでのた打ち回り始めた。

麗奈「・・・大丈夫?」

姫路「だ、大丈夫ですか!? 吉井くん!」

明久「う、うん。なんとかね・・・」

「まさか捨て駒あきひなが引き分けに持ち込んでくれるとは思わなかったな
和哉「親友を捨て駒扱いつてどうなんですか・・・?」

秀吉「惜しかったのう明久よ」

明久「う、うん。ごめんね皆」

麗奈「・・・明久は十分頑張った」

姫路「そうですね。とっっても素敵でした！」

康太「・・・仇はとる」

Fクラス・1対1・Aクラス（1分け）。

第21話&17: 観察処分者> ; (後書き)

引き続きアンケートを行っておりますのでご協力お願いします。

第16話の後書きに詳細は書いてあります。

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら感想に書いてくださると助かります。

第22話&1t;Aクラス側から4戦目>t; (前書き)

Aクラス戦・4戦目です。

第22話&1t;Aクラス側から4戦目>

問題15

以下の問いに答えなさい。

・家計の消費支出の中で、食費が占める割合を何と呼ぶでしょうか

姫路瑞希・川崎葵・神谷優璃・桐谷宗一郎・神楽坂蓮の答え

A・エンゲル係数

教師のコメント

正解です。一般に、エンゲル係数が高いほど、生活水準は低いとされています。

一ノ瀬和哉（武内薫）の答え

A・昨日の夕飯はハンバーグ（カレー）でした。

吉井明久の答え

A・今週は塩と水だけです・・・

教師のコメント

食事の内訳は聞いていません。

優璃のコメント

吉井くん・・・お弁当でもつくってきましょうか？

明久のコメント

是非お願いします！

優璃 side

高橋先生「それでは4人目、どうぞ」

雄二「秀吉、頼んだぞ！」

秀吉「了解じゃ！」

(相手は木下くんですか・・・誰にでてもらいましょうか?)

優子「アタシに殺らせてくれないかしら・・・！」

優子さんがわたしにそう言うてきた。・・・物凄い殺気をだしながら。

「えーと、優子さん・・・字が間違ってますよ？それとその殺気をしまってください」

優子「字はこれであってるわよ・・・？それと殺気なんて気のせいじゃないかしら・・・？それじゃあ殺ってくるから・・・！」

「ダメです。それじゃあ薫、頼んだよ」

薫「はい、任せてよ」

優子「(ボソツ)秀吉・・・あとで覚えときなさいよ・・・！」

(優子さん、その殺気をしまってくださいよ・・・さっきから木下くんがずつと身震いしてますよ?)

蓮「木下さん、落ち着きなよ(ナデナデ)」

蓮くんはそう言った後、優子さんの頭を撫でて宥めていた。

優子「あう・・・／＼／＼」

優子「優子を落ち着かせるには、やっぱり蓮くんを呼ぶのが一番だね(ニヤニヤ)」

(どつやら工藤さんが蓮くんを呼んだみたいですね)

優子「な、何言ってるのよ優子!?!?!」

翔子「・・・優子の照れ屋さん」

蓮「どういうこと?」

(・・・さすがは蓮くんというべきところなのかな?)

愛子「えーっとねえ(ニヤニヤ)」

優子「ね、蓮くんは気にしなくていいの! / / /」

蓮「?」

その様子を私もニヤニヤしながら眺めていたら、

F「なんだあの男は!? 木下さんとイチャイチャしているだど!」?

F「しかも木下さんの頭を撫でていたぞ!」?

F「許さん! 殺せ! 殺しつくせー!」

と、Fクラス側から蓮くんに対してものすごい怒声がとんでいた。

薫「なんでだろ? 向こうの人たちがものすごく意味不明な理由で怒ってるんだけど・・・」

「そうみたいです(なんでそんなことで怒ってるんでしょうか?)」

「

宗一郎「気にすんな」

F「うらあー、その罪死んで詫びろー!」

突然、Fクラスの1人がそう言っつて、蓮くんに襲い掛かってきたが、バキッ! ドゴッ!

一瞬にして、宗くんに殴り飛ばされた後、鈍い音をたてて床に叩きつけられていた。

宗一郎「はあ、妬みなんかで他人に暴力を振るうなよ・・・」

F「うるさい! お前に一人身の辛さがわかるか・・・!」

(そういうことですか、たしかに蓮くんはモテますからね・・・ただ)

蓮「僕も一人身なんですが?」

(超がつくほどの鈍感さんなんですよね・・・)

「ちよつと蓮くんは黙ってて」

蓮「??」

A女×10「そうなの? だったら私たちにもチャンスが・・・!」

(で、いつもこうなるんですよね……)

翔子「……神楽坂はいつもこんな感じなの？」

「はあ、そうなんですよ……」

高橋先生「……そろそろいいですか？」

高橋先生も呆れていた。

「薫、早く行つてきて」

薫「あ、ごめんね。高橋先生」

高橋先生「はい。では教科は何にしますか？」

薫「現代社会でお願いします」

高橋先生「わかりました」

宗一郎「まあ、この試合は見る必要ないだろうがな」

優子「そうね。秀吉は全教科Fクラス並の成績だから見る必要もないわね」

(優子さん、落ち着いたみたいですね。……次からは私も優子さんを止めるときは蓮くんを呼ぼうかな?)

高橋先生「それでは第4試合開始！」

・第4試合目(現代社会)

Aクラス・武内 薫(483点)

V S

Fクラス・木下 秀吉(38点)

薫「それじゃあ、いくよ」

開始直後に薫の召喚獣が木下くんの召喚獣に速攻でショットガンを乱射し、木下くんの召喚獣は回避に徹するも回避しきれず、試合時間わずか5秒で勝負が決した。

高橋先生「勝者・Aクラス、武内 薫！」

薫「勝つたよ」

「お疲れ様、薫」

宗一郎「ま、当然の結果だな」

蓮「これで2勝1敗1分ですね」

優子「38点つて・・・あとで秀吉にはCクラスのこととまとめて説教が必要ね・・・！」

Fクラス・1対2・Aクラス（1分け）。

第22話&17；Aクラス側から4戦目&8；（後書き）

引き続きアンケートを行っておりますので、ご協力お願いします。

第16話の後書きに詳細は書いてあります。

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想にかいてくださると助かります。

第23話&1t：実践派VS理論派（訂正）FFF団会長>t；（前書き）

Aクラス戦・5戦目です。

問題16

以下の問いに答えなさい。

・味噌に足りない栄養素を補う為に味噌汁に入れるといい具材の例をあげなさい。

吉井明久・一ノ瀬和哉・神谷優璃・武内薫・神楽坂蓮の答え

A・ネギ

川崎葵・桐谷宗一郎の答え

A・タマネギ

教師のコメント

両方とも正解です。他には春菊などのビタミンCが多く含まれる野菜がいいでしょう。

姫路瑞希の答え

A・ビタミンC、オレンジ、塩酸

教師のコメント

え？・・・それは料理ですか？

明久side

高橋先生「それでは5人目どうぞ」

雄二「ムツツリーニ、頼んだ」

康太「・・・任せろ」

（ムツツリーニは保健体育ならAクラスの人にだって負けないからね）

優璃「工藤さん、お願いします」

愛子「はい」

高橋先生「それでは、教科は何にしますか？」

康太「・・・保健体育」

愛子「土屋君だっけ？かなり保健体育が得意なんだってね。でも、ボクだつてかなり得意なんだよ・・・キミと違って、実技でね」

康太「・・・じ、実技・・・（ブシュ！）」

そう言つて、康太は鼻血を出して倒れた。

「ムツツリーニ！」

僕は鼻血をだして倒れた康太に駆け寄つた。

「よくもムツツリーニに、なんてひどいことを！」

愛子「そつちのキミ、吉井くんだっけ？キミが選手交代する？でも、勉強苦手そうだね、保健体育でよかつたらボクが教えてあげるよ？

・・・もちろん、実技でね」

僕・康太「・・・（ブシャー！）」

僕と康太は致死量並の鼻血を出して倒れた。

和哉「康太の鼻血の量はさすがにやばいかな？」

（和哉！どうして君はそんなに冷静なんだ！？）

島田「吉井には必要ないわよ！そんな機会一生ないから！」

姫路「そうです！吉井くんには今現在必要ありません！」

と、2人が僕の後ろから工藤さんに反論していた。

「……（ひ、ひどい。そこまで言うことないじゃないか……）」
秀吉「あの二人も存外鬼畜じゃのう……」

和哉「あのー、2人とも、明久が死ぬほど悲しそうな顔をしていますよ……」

麗奈「……大丈夫？」

麗奈ちゃんだけは僕の心配をしてくれた。

「う、うん。ありがとう、麗奈ちゃん。大丈夫だよ、心に深い傷を負ったけどね……」

愛子「うーん、吉井くんは意外と競争率高そうだね。……てなわけ、ムツツリーニくん？ボクと保健体育の実技を」

康太「……（ブシャー……！）」

和哉「……さすがにこれやばくないですか？」

葵「代表、これは選手交代させるべきかと……」

2人はこの状況でもいたって冷静であった。

雄二「そ、そうだな……」

雄二もさすがにうるたえていた。

和哉「高橋先生。5戦目、Fクラスは土屋の代わりに須川をだします」

高橋先生「わ、わかりました」

和哉「明久、康太を運ぶの手伝って」

「わかったよ」

僕と和哉は康太を抱えて後ろに下がった。

須川「おいおい、俺にAクラスを倒せなんて無理だぞ、それに戦死は勘弁」

須川は戦死が嫌だから戦いたくないらしい。

和哉「……（ボソツ）もし勝てたら麗奈がお菓子を作ってくれるって言ってるよ？」

須川「……やってやるぜ……！！！！」

（Fクラスには雄二以外にも策士がいたみたいだね……）

高橋先生「それでは第5試合開始！」
愛子・須川「サモン！」

・第5戦目（保健体育）

Aクラス・工藤 愛子（452点）

vs

Fクラス・須川 亮（97点）

和哉「・・・棄権しても一緒だったかな？」

愛子「えーと、なんか申し訳ないなあ」

スパン！

愛子の召喚獣は開始と同時に須川の召喚獣に攻撃を仕掛け一瞬で須川の召喚獣の首をきり飛ばした。

高橋先生「勝者・Aクラス、工藤 愛子！」

雄二「まあ、勝てるわけないよな・・・」

「そういえば、ムツツリーニは大丈夫なの？」

和哉「なぜかは知りませんが康太の鞆に輸血パックが大量にあったので、とりあえず輸血しました。多分大丈夫だとおもいますよ」

雄二「あ、ああ。すまん」

明久 side out

Fクラス・1対3・Aクラス（1分け）。

第23話&1t：実践派vs理論派（訂正）FFF団会長>；（後書き）

引き続きアンケートを行っておりますので、ご協力お願いします。

第16話の後書きに詳細は書いてあります。

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想にかいてくださると助かります。

第24話&1t：小学生の策略>；（前書き）

Aクラス戦・6戦目です。

第24話< ;小学生の策略> ;

問題17

以下の英文を正しい日本語に訳しなさい。

Der Baseballist eine von Sportarten in Japan am popul?rsten .

島田美波・神楽坂蓮・神谷優璃の答え

A・野球は日本で最も人気のあるスポーツのうちの1つです。

これは英語ではなくドイツ語ではないでしょうか？

川崎葵・桐谷宗一郎・武内薫・坂本雄二の答え

A・問題が英語ではない為、解答不可

教師のコメント

申し訳ありません。先生のミスで違う問題が混入してしまいました。日本語訳は島田さん、神楽坂くん、神谷さんの回答で正解です。ただ、今回はこちらの手落ちなので無記入の人も含め、全員正解にしたいと・・・

土屋康太の答え

A・ あぶりだし

吉井明久の答え

A・ バカには見えない。

教師のコメント

・・・と思っていたのですが、土屋君は例外として無得点、吉井君

は減点しておきます。

雄二 side

高橋先生「それでは6人目どうぞ」

(まずいな・・・こっちが勝つためにはもう負けられない・・・が、
こつちであと4戦全部とるのは厳しい)

優璃「優子さん、お願いします」

優子「わかったわ」

(しかも、相手は木下姉か・・・木下姉は教科によってムラがない
から正直な話、俺や和哉は論外、水無月は役不足だ・・・仕方ない、
ここで姫路を出すか)

「ひm」

和哉「代表」

俺が第6戦に姫路を指名しようとしたが、和哉によって遮られた。

「なんだ？」

和哉「6戦目は僕が出ます」

「だが、もう負けられないんだぞ？しかも、6戦目は相手のほうが
科目選択をするんだ、そうなると思えないか？」

和哉「大丈夫ですよ、策ならありますから」

「・・・わかった。だが、負けるのは許さねえからな！」

和哉「わかってますよ。こつちからは僕がでます」

高橋先生「それでは教科は何にしますか？」

和哉「木下さん、木下さんの努力している教科で勝負しませんか？」
和哉はいきなり木下姉に対して自殺行為とも呼べる提案をした。

優子「え？でも、それだと間違いなくアタシが勝つわよ？」

和哉「それはどうでしょう？」

（なるほどな・・・挑発して自分のペースで戦おうというわけか・・・
だが、相手の得意教科だと敵しすぎないか？）

優子「・・・いいわ。高橋先生、英語でお願いします！」

木下姉はかなり不機嫌そうにそう言い放った。

高橋先生「わかりました」

優子「アタシをバカにしたことを後悔させてあげるわ！」

和哉「僕の挑発にのつた時点で木下さんの負けですよ」

高橋先生「第6試合開始！」

優子「サモン！」

・第6試合目（英語）

Aクラス・木下 優子（393点）

A「流石は木下さん、Aクラスでもトップ10にはいつてるだけあるよな」

「くっ！（やはり400点ちかくあるな・・・これは終わったか？）

麗奈「・・・和くんなら大丈夫」

「は？どう考えても勝ち目は薄いだろ？」

明久「そっか、雄二は知らないんだよね」

「何がだ？」

麗奈「・・・見てればわかる」

和哉「サモン！」

Fクラス・一ノ瀬 和哉（482点）

「は？」

優子「な、なによその点数!？」

和哉「何っていわれても・・・まあ、いつもより50点くらいいいですけどね」

「明久、水無月、知ってたのか？」

麗奈「(コク)・・・和哉は理系の3教科と英語は得意」

俺のその問いに水無月はそう言っつうなづいた。

明久「おかげでDクラス戦の時は助かったからね。でもその代わりに、古典は僕より低かったけどね」

和哉「さてと、いきますよ」

和哉がそう言つと、和哉の召喚獣が木下姉の召喚獣に攻撃を仕掛けていった・・・が、途中で止まりまた距離を取り直した。

優子「・・・どういっつもりかしら？」

和哉「さあ？」

(ふざけてるのか?・・・いや、コイツはそんなことするやつじゃないな)

優子「そっちがこないならこっちから仕掛けるわよ!」

木下姉はそう言つと、木下姉の召喚獣が和哉の召喚獣に攻撃を仕掛けるも、和哉の召喚獣は回避に徹しているため、木下姉の召喚獣の攻撃は一向に当たる気配がない。

優子「くっ、ちょこまかと!」

(和哉・・・何を狙っている?)

明久「ねえ雄二、和哉の召喚獣がさつきから何か落としてるように見えるんだけど」

明久にそう言われて、和哉の召喚獣をよく見てみると、たしかに何かの破片みたいなものを落としていつているのが見えた。

「あれはなんだ？」

明久「さすがにそこまではわからないよ。でも、和哉の召喚獣は攻撃をくらってないのに点数が70点ちかく減ってるけど」

「どういっつも」

俺が明久に問い返そうとしたちよつどそのとき、

和哉「”爆破”！」

ドカーン！

召喚フィールド一帯が爆風と煙に包まれた。

島田「な、なにが起きたの!？」

姫路「わ、わかりません。でも多分、一ノ瀬くんの召喚獣の腕輪の能力だと思います」

そしてその煙が消えると、

Aクラス・木下 優子（0点）

vs

Fクラス・一ノ瀬 和哉（37点）

高橋先生「勝者・Fクラス、一ノ瀬 和哉！」

優子「え？な、なんで!？」

和哉「うまくいきましたね」

「は？腕輪の能力だとしてもこの範囲はおかしいだろ!？」

麗奈「・・・さつき落としていたのは和くんの召喚獣の武器」

「は？だが、和哉の召喚獣は今もちゃんと武器を持っているぞ」

明久「多分だけどさ、武器を砕いた破片をフィールド中にばらまいてたんじゃないかな？」

秀吉「たしかに和哉の召喚獣の武器が呼び出したときより短くなっている気がするのう」

「なるほどな。たしかにそれなら考えられるが・・・自分もろともつてどうなんだ・・・？」

和哉「勝ちましたよ」

明久たちと話していると、和哉がFクラス陣営まで戻ってきていた。

「あ、ああ。よくやった」

秀吉「しかし何故わざわざ姉上の得意教科で勝負したのじゃ？」

島田「たしかにね」

和哉「いえ、木下さんの得意教科で勝負したというより僕の得意教科で勝負したかったからですよ」

島田「どういうこと？」

和哉「えーつとですね。・・・姫路さん、姫路さんが一番努力してる教科って何ですか？」

姫路「え？えつと数学です」

和哉「葵は？」

葵「英語かな」

和哉「これでわかりましたか？」

(つまり真面目に勉強してる奴が一番努力してる教科は何かって聞けば、9割方積み上げ教科の英語か数学を選択するというのを逆手にとったわけか。どうやら川崎と水無月も理解したみたいだな)

島田「わかるわけないでしょ！」

秀吉「そうじゃの。今は姫路と葵は関係ないのじゃ」

「俺が代わりに説明しよう」

和哉「お願いします。僕はちょっとトイレにいつてきますので」

和哉はそう言つて、高橋先生の許可をとつた後、Aクラスの教室から出て行つた。

島田「で、どういうことなの？」

「つまりだ。真面目に勉強してる奴が一番努力してる教科は何かって聞けば、9割方積み上げ教科の英語か数学を選ぶというのを逆手にとつて挑発しただけだ。それに今回の教科選択は元々向こうにあつたんだ」

葵「まあ、その2教科じゃあどつちがきても和くんは400点越えだからね」

「つまりは和哉は木下姉を挑発して木下姉の得意教科ではなく努力している教科で勝負したんだ」

秀吉「で、姉上は和哉の挑発にまんまと乗つたということじゃな？」

「そういうことになるな」

秀吉「こんなことを聞いたらまた姉上が怒るんじゃないかな．．．」
葵「それ以前に秀吉くんは怒られるの確定だからね」
秀吉「（ボソツ）やはりワシの命も今日までかのう．．．」
と秀吉は遠くを見つめながらそう言った。
（どうしたんだ？秀吉が黄昏るなんて．．．）

雄二 side out

優璃 side

優子「すみません．．．負けてしまいました．．．」

優子さんは負けたことを気にしているのか、俯きながら重い足取りでAクラス陣営に戻ってきた。

優璃「いえ、気にしないでください（やっぱり和くんに負けたことが応えてるみたいですね）」

蓮「木下さん、落ち込むことないよ」

蓮くんはAクラス陣営に戻ってきてからずっと俯きっぱなしの優子さんを励ましていた。

優子「でも、あれだけ大口叩いたのに挑発に乗せられてこんな無様に．．．」

優子さんはよっぽど悔しかったのかそれとも不甲斐なさからなのか今にも泣きそうになっていた。

蓮「．．．」

ギョウツ！

優子「．．．え！？／／／」

蓮「よしよし、いい子だから泣かないで（ナデナデ）」

蓮くんは優子さんを抱きしめたまま、頭を撫で始めた。

（えーと、どうして優子さんを抱きしめているんでしょうか？）

優子「．．．／／／（プシュー．．．）」

宗一郎「流石は天然たらしだな」

薫「で、優子は処理落ちしかけてるし」

「どうしたらこんな状況になるんでしょうか？」

翔子「・・・私も雄二にあんなことしたい」

薫「あはは、そこはしたいじゃなくてされたっていうところだよ」

宗一郎「そこは好みだろ」

愛子「あのさ、こんなことしてたら・・・」

F「あの男を殺せー！ー！！！」

F「殺しつくせー！ー！！！」

案の定、Fクラスの2人が蓮くんを襲い掛かろうとしたけど、バキッ！バゴッ！ドサツ！ドサツ！

Fクラスの2人は蓮にそれぞれ顔と脇腹を殴られ、Fクラスの2人は一瞬にして、地面に突っ伏した。

蓮「まったく、邪魔しないでほしいですね（ナデナデ）」

と、蓮くんは地面に突っ伏して気絶している2人に言った後、再び

優子さんの頭を撫で始めた。

優子「ノノノ（ボンッ！）」

薫「あ、処理落ちしたね」

A女×10「いいなあ・・・私も頭撫でてもらいたい・・・」

愛子「あははは・・・」

Fクラス・2対3・Aクラス（1分け）。

第24話&17：小学生の策略>；（後書き）

引き続きアンケートを行っておりますので、ご協力お願いします。

第16話の後書きに詳細は書いてあります。

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想にかいてくださると助かります。

第25話&1t・学年主席>t；(前書き)

Aクラス戦・7戦目です。

第25話 & 1 t : 学年主席 & g t ;

問題 18

次の熟語の正しい読みを答え、その熟語を用いた例文をつくりなさい。

『相殺』

姫路瑞希・川崎葵・神谷優璃・桐谷宗一郎・神楽坂蓮の答え

A・読み：そうさい

例文：借金を今月の給料で相殺する。

教師のコメント

そうですね。差し引いて帳消しにする、という意味なので貸し借りなどに使われる言葉です。

一ノ瀬和哉の答え

A・読み：そうさい

例文：借金を今月の給料で相殺する。

教師のコメント

惜しいですが間違いです。“そうさい”という読みも一応ありますが、この場合の一ノ瀬くんの例文では、互いに打ち消し合うという意味なので、読みとしては“そうさい”が正解となります。

島田美波の答え

A・読み：あいさい

例文：のどかな朝。私は友達と相殺した。

教師のコメント

その朝は決してのどかではないでしょう。

雄二 side

高橋先生「それでは7人目どうぞ」

優璃「Aクラスからは私がです」

(は？ここで代表自ら出てきたと？・・・なら正直厳しいが、こっちは負けられない以上、姫路で勝ちをとりにかざる得ないか。だが、この試合をとればこっちにも勝機はある！)

「姫路、頼んだ！」

姫路「はい！」

明久「がんばって、姫路さん！」

高橋先生「それでは教科は何にしますか？」

優璃「総合科目でお願いします」

高橋先生「わかりました」

姫路「よ、よろしくお願いします」

優璃「はい。こちらこそお願いします・・・の前に、宗くん」

宗一郎「ん？ああ、あれか。了解した」

相手の代表がそう言っと、俺と変わらないくらいの体格をしていて、交渉の席で俺をまんまと出し抜いた桐谷がFクラス陣営の前まで来て、

宗一郎「我々AクラスはFクラスに対し、降伏勧告をする！今なら

対等な和平ですましてやる」

F「ふざけんな！」

F「さつさと帰りやがれ！」

桐谷の降伏勧告に対し、Fクラスの連中は罵倒を浴びせる。

宗一郎「お前らには聞いてないんだがな・・・で、Fクラス代表」

「無論、却下だ（ここまで来て降伏なんてごめんだ！それに降伏して設備ダウンを免れたところで卓袱台と綿の入ってない座布団だしな）」

宗一郎「そうか・・・後悔するぜ？」

最後に桐谷はそう言ってAクラス陣営に戻っていった。

高橋先生「そろそろいいですか？」

優璃「はい」

高橋先生「では、第7試合開始！」

姫路「サモン！」

・第7試合目（総合科目）

Fクラス - 姫路 瑞希（4409点）

「Bクラス戦のときよりもまたあがってるな（これなら勝てる！）」

葵「・・・（ボソツ）優璃相手にその点数じゃあ勝負にもならないよ」

秀吉「ど、どういふことじゃ！？」

島田「そうよ！いくら相手が学年主席といっても瑞希も4409点もあるのよ！？」

葵「そのままの意味です」

優璃「サモン！」

Aクラス - 神谷 優璃（15742点）

明久「え？」

F・A「……へ？」

この教室にいる大半が神谷の点数を見て、驚くのを乗り越して目が点になった。

「ど、どういうことだ……？」

葵「どういうこともなにもあれが優璃の実力ですから」

優璃「宗くん」

宗一郎「……（ボソツ）思い人のためだもんな（ニヤニヤ）」

神谷の呼びかけに桐谷が神谷に近づいていき、桐谷が神谷になにかつぶやいたようだ。

優璃「なっ！？／＼／＼ち、違うからね！／＼／」

宗一郎「まあそういうことにしとくわ」

優璃「だ、だから違うってば！／＼／」

宗一郎「はいはい。で、Fクラス代表。もう一度聞くぞ、降伏しろ」

「くっ！（どうすればいい？）」

宗一郎「……条件は」

翔子「……待って！」

桐谷の宣告を翔子が遮った。

宗一郎「なんだ、霧島？……ああ、そういうことか」

翔子「（コク）……雄二、私と勝負して」

「は？どういうことだ？」

宗一郎「なら条件はこうしようか、今から霧島とFクラス代表の一騎打ちをやってもらう。それで、もしFクラス代表が勝てば対等な和平交渉で終わらしてやる。霧島が勝てば設備ダウン＋宣戦布告の2ヶ月。これなら、負けの確定しているFクラスに損はないだろう。これが最大の譲歩だ」

「教科選択権はどっちだ……？（なんだこのFクラス有利の条件・

……何か裏があるのか？）」

宗一郎「そつちにやればいいのか？」

「ああ。それなら、その降伏勧告を受け入れる……（ここで翔子を倒して一旦態勢を整えるしかないか……）」

宗一郎「わかった。・・・優璃、ここからは俺に任せてもらおうぞ」
優璃「うん、頼んだよ」

そう言つて、相手の代表は召喚フィールドから出て、Aクラス陣営に戻つていった。

島田「坂本!ど、どうしてよ!？」

宗一郎「・・・このバカは算数もできないのか？」

島田「なによアンタ!バカにしてるの!？」

宗一郎「はあ・・・なら、ここで姫路がまけたら勝敗はどうなるんだ?」

桐谷は溜息をつきながらそう言った。

島田「え?2勝4敗1分でしょ」

宗一郎「あと2戦しかないのにどうやって勝つんだ?」

島田「あ・・・」

宗一郎「さてと、バカも理解できたみたいだな。Fクラス代表、教科は何にするんだ?」

「(この野郎をせめて一矢報いてやらな気が治まらねえ!)最後の勝負の科目は日本史、内容は小学生レベルで100点満点の上限ありだ!」

第25話&17:学年主席>(後書き)

引き続きアンケートを行っておりますので、ご協力お願いします。

第16話の後書きに詳細は書いてあります。

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想にかいてくださると助かります。

第26話&17：Fクラス対Aクラス戦・終戦！>；（前書き）

お気に入り登録20件、PV25000、ユニーク4500突破！

これからも『バカと天才？たちと召喚獣』をよろしくお願いします。

第26話&17：Fクラス対Aクラス戦・終戦！>

問題19

以下の問いに答えなさい。

・文月学園において採用されている、試験の点数を用いて行う戦いのことを何と呼ぶか答えなさい。

吉井明久を除く文月学園の生徒の答え

A・試験召喚戦争

教師のコメント

正解です。これは間違えられると困ります。

吉井明久の答え

A・お受験戦争

教師のコメント

・・・この作品の根幹を間違えないでください。

雄二side

「最後の勝負の科目は日本史、内容は小学生レベルで1000点満点

の上限ありだ！」

宗一郎「だ、そうです。高橋先生、問題の用意をお願いします」

高橋先生「わかりました」

高橋女史がテストの用意をすべく、ノートパソコンを閉じて教室を出て行った。

その後、静かだったAクラスがざわめき始めた。

A「上限あり？」

A「しかも小学生レベルだってよ。満点確定じゃないか」

A「注意力と集中力の勝負になるな」

葵「代表、ここまでお膳立てされて負けるなんてことはないですよ？」

「もちろんだ！ここで勝つて一旦作戦を立て直す、そうしてからもう一度Aクラスをやってやる！」

高橋先生「テストの準備ができましたので、2人は視聴覚室にいてください」

翔子「・・・わかりました」

「りょーかい」

そう言つて俺は翔子と視聴覚室に向かった。

雄二side out

明久side

雄二が視聴覚室に行った後。

和哉「ただいま」

和哉がトイレから戻ってきた。

葵「うん、おかえり」

和哉「あれ？なんで誰も戦ってないんですか？」

葵「えつとね、（事情説明中）ってことになったの」
和哉「なるほどね」

「大丈夫かな、雄二」

和哉「普通に負けますよ」

島田「ど、どうしてそんなこと言うのよ！」

葵「もう始まるみたいですし、テストのほうを見守りましょうよ」

雄二vs霧島さんの限定テスト対決が始まった。

島田「で、なんで負けるなんていきれるのよ！」

和哉「注意力の集中力の勝負になんてならないからですよ」

「全然意味がわからないよ！？どうしてそんなことがいきれるのさ！」

和哉「なら姫路さん、今モニターに出てるテスト問題全問わかりますか？」

姫路「えーと、2問ほどわからないのが・・・」

島田「え？」

和哉「こういうことです。ちゃんと勉強している人たちですら、ど忘れして答えられないのにたいして勉強していないうちの代表に満点が取れるわけじゃないじゃないですか」

僕・秀吉・島田「「あ・・・」「」」

限定テスト終了。

高橋先生「では、結果を発表します！」

>日本史 限定テスト 100点満点<

Aクラス 霧島 翔子 97点

vs

Fクラス 坂本 雄二 71点

宗一郎「・・・なんだ、ただの底抜けのバカだったのか」

和哉「まあ、70点もとつたことには驚きましたが、負けは負けです
すね」

「ゆーじーじー・・・!!」

F「坂本を殺せー！！！！」

F「あのA級戦犯を許すなー！！！！」

Fクラスのメンバー（僕も含む）が雄二に詰め寄るべく、テスト会場である視聴覚室へと向かっていった。

第26話&17：Fクラス対Aクラス戦・終戦！>；（後書き）

引き続きアンケートを行っておりますので、ご協力お願いします。

第16話の後書きに詳細は書いてあります。

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想にかいてくださると助かります。

第27話&1t:戦後対談>t:;(前書き)

今年最後の投稿です。

第27話&1t:戦後対談>

問題20

以下の文章の()の中に入る年号を答えなさい。

・日本最初の元号である『大化』が制定されたのは()年である。

坂本雄二の答え

A・645

教師のコメント

正解です。これはサービス問題ですね。

霧島翔子の答え

A・625

教師のコメント

おや？霧島さんがこんな簡単な問題を間違えるとは意外ですね。

明久side

視聴覚室にて。

「なにか言うことは？」

雄二「・・・殺せ」

「いいだろう、殺してやる！歯くいしばれ！！」

麗奈「・・・暴力はダメ」

姫路「そうです！暴力はダメですよ！」

雄二に殴りかかるうとしたが、麗奈ちゃんと姫路さんによって阻まれた。

「大体、71点って何！？0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点じゃ・・・」

雄二「いかにも、俺の全力だ」

「・・・死んで詫びろ！」

僕はそう言っつて、再び雄二に殴りかかったが、今度は島田さんに阻まれた。

島田「吉井、落ち着きなさい！アンタだったら70点もとれないでしょー！」

「いや、80点はとれる！（日本史は昨日と一昨日、勉強したからね！）」

麗奈「・・・それでも暴力はダメ」

「くっ、3人とも何故止めるんだ！？このゴリラには首を切断する体罰が必要なのに！！」

優璃「それは体罰じゃなく処刑ですよ！」

いつのまにかAクラスの人たちも視聴覚室に来ていた。

宗一郎「なんなら俺もこのゴリラの処刑を手伝ってやるっか？」

「ありがとう、桐谷くん」

宗一郎「宗一郎で構わないぜ」

「宗一郎くん、ならそのゴリラを押さえててくれるかな？」

宗一郎「りょーかい」

優璃「ちよつと吉井くん！？暴力はダメだよ！」

薫「宗くんも吉井くんを煽らないでよ」

今度は神谷さんと武内さんに引き止められて、僕と宗一郎くんは少々引き下がった。

(仕方ない・・・処刑はまた今度紐なしバンジー100回でいいかな・・・!?)

翔子「・・・でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けていたかもしれない」

雄二「いい訳はしねえ」

和哉「潔いのは結構ですけど、あまりにも情けなさすぎないですか？手を抜いて負けるなんて」

葵「さすがに庇いようがないですね・・・」

宗一郎「さてと、Fクラス代表、戦後対談だが・・・する必要はないな。Fクラスは設備ダウンと2ヶ月の宣戦布告の禁止・・・以上だ」

「ちよつと待って！（この以上酷い設備になったら余計に姫路の体調が・・・）」

宗一郎「ん？なんだ？」

「お願いがあるんだ」

宗一郎「一応、聞こうか」

「設備ダウンを見逃してほしいんだ」

宗一郎「それは無理だ」

「で、でも、これ以上酷い設備になったら・・・」

優璃「・・・えっと、吉井くん、(ボソツ) Fクラスに体の弱いお友達でもいるんですか？」

神谷さんが僕に周りに聞こえないように近くに来た後そう呟いた。

「え！？う、うん。そうなんだよ神谷さん」

僕がそう答えると、神谷さんは少し考え事をした後、

優璃「・・・わかりました。なら2ヶ月間全クラスへの宣戦布告禁止さえ呑んでくれるのでしたら設備ダウンを見逃します。あと優璃

でいいですよ？／／／

「本当！？ありがとう！優璃ちゃん！」

優璃「ふえ！？／／／は、はい／／／」

(どうしたんだろ？少し顔が赤いけど・・・)

宗一郎「ったく勝手に・・・まあ和哉たちもいるからな」

「じゃあ、設備ダウンはなしくてことでもいいの？」

宗一郎「ああ。だが、2ヶ月間は宣戦布告禁止だからな」

「うん。わかったよ」

翔子「・・・もういい？」

宗一郎「ああ。さて、戦争前の約束は覚えているな？」

和哉「負けたほうはなんでも1つ言うことを聞くなってやつ？」

宗一郎「そうだ」

翔子「・・・約束。・・・雄二、私と付き合って」

A・F「くくくくへ？」

Fクラスの面々どころかAクラスの面々もその言葉に啞然となっていた。

(それもそうだよな。霧島さんがこんなゴリラに告白してるんだからね)

雄二「お前、まだ諦めてなかったのか？」

翔子「・・・私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

雄二「その話は何度も断つただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

翔子「・・・私には、雄二しかない。他の人なんて興味ない」

(なんだと！？何度も告白を断っているだと！？これは処刑内容に紐なしバンジー100回後に火あぶりも加えなければ・・・！)

雄二「・・・拒否権は？」

翔子「・・・ない。約束だから、今からデートに行く」

と、雄二の首根っこをつかむ。

雄二「ぐあ！？離せ！やっぱりこの約束はなかったことに・・・」

そのまま雄二を引きずりながら教室を出て行こうと・・・

和哉「ちよつと待って」

するのを和哉が止めた。

翔子「・・・何？」

雄二「和哉！助けてくれ！」

和哉「襲いかかられないようにこれ使ってください」と、霧島さんにスタンガンと首輪と手枷を手渡した。

雄二「テメエ！何の心配してやがる！？」

翔子「問題ない。雄二になら襲われてもいい」

和哉「じゃあ逃げようとしたら使ってください。僕でよければいくらでも協力しますので」

宗一郎「俺も協力してやろう、Fクラス代表のふく（ゴホン！）霧島の幸せのために！」

雄二「今、俺の不幸と言ったる！？」

翔子「ありがとう。桐谷、一ノ瀬、いい人たち」

雄二「良い人じゃねえ！てめえら覚えてやがれ！生きてたらぶっ殺してやる！！」

宗一郎「和哉」「返り討ちにしてやるわ！！」

（・・・火あぶりしたあとに廊下を引きずり回すのを3時間追加決定！）

「ムツツリーニ、明日は忙しいね・・・！」

康太「・・・たしかに・・・！」

和哉「お幸せに」

翔子「・・・ありがとう」

再度和哉と宗一郎くんにお礼を言った後、雄二の首根っこを掴んで教室から出て行った。

その後も教室は驚きのあまり沈黙に包まれていた。

??「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

第27話&1t・戦後対談>t・(後書き)

来年もよろしくお願いします。m)・(m

第28話&1t:デートのお誘い>t:;(前書き)

新年明けましておめでとございます。m) (・) m

2012年、初投稿です。

第28話&1t:デートのお誘い>

問題21

以下の問いに答えなさい。

- ・火傷したときの正しい処置を答えなさい。

姫路瑞希・川崎葵・一ノ瀬和哉・神谷優璃・武内薫・桐谷宗一郎・
神楽坂蓮

の答え

- A・急いで水で冷やす

教師のコメント

正解です。流水で冷やせない場合は、患部に清潔なタオルをかけてから水をかけましょう。低温火傷や、明らかに広範囲または重度の場合は、患部を清潔なタオルで覆ってすぐに病院にいきましょう。

土屋康太の答え

- A・手切れ金を払う

教師のコメント

それは大人の火遊びです。

鉄人「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

その沈黙を破ったのは、鉄人こと西村先生だった。

和哉「あれ？西村先生、僕たちに何か用ですか？」

鉄人「今から我がFクラスに補習について説明しようと思ってな」

我がFクラスという言葉に、ほぼ全員の脳裏にある嫌な予感がよぎった。

鉄人「おめでとう。お前らが戦争に負けたおかげで、福原先生から補習授業担当のこの俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

F男子（和哉以外）「なにい！！？？」

和哉「これで少しはFクラスも平和になりますね、個人的には西村先生の授業はわかりやすいので助かります」

鉄人「そうか。それは光栄だ。・・・いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは、正直思わなかった。でもな、幾ら“学力が全てではない”と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、蔑にしている物じゃない」

和哉「たしかにその通りですね」

鉄人「吉井、そして坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の“観察処分者”と“A級戦犯”だからな」

「そうはいきませんよ！ 何としても監視の目を掻い潜って、今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます！」

和哉「少しは悔い改めてましようよ・・・」

鉄人「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を2時間設けてやる」

和哉「助かります、試召戦争の連戦で授業も遅れてましたし」

「うーん・・・また3ヶ月後に鉄人の魔の手から逃れるって目標が

新しく出来たから、やってみようかな」

鉄人「やる気が出たのはうれしいが、もうちょっとマシな理由はないのか？」

「ありません！」

和哉「さてと、今日はもうこれで終わりですから帰ろうかな」

「僕も帰ろうかな」

優璃「あ、あの！明久くん！」

僕も帰ろうと視聴覚室を出ていこうした時、優璃ちゃんに呼び止められた。

「どうしたの？優璃ちゃん」

優璃「今日この後暇ですか！？／＼／＼」

「うん、特に用はぐえ！？」

僕は島田さんに何故か急に襟元を力一杯引つ張られた。

島田「今日は吉井にクレール奢ってもらうからダメよ！」

「それは来週の休みの話じゃ・・・」

姫路「よ、吉井くん！今日は私と映画館に行くんです！」

「待って姫路さん！そんな話なかったはずだよね！？」

（それに今月厳しいんだよ・・・）

姫路「はい、今決めましたから！」

麗奈「・・・わたしも明久と一緒に映画に行きたい！／＼／＼」

「って、麗奈ちゃんまで！？」

優璃「・・・それなら、みんなで行きますか？（ボソツ）ほんとは2人で行きたいけど・・・」

「そ、そうだね・・・（さようなら、今月の僕の食費・・・）」

秀吉「人気者じゃのう、明久よ」

葵「それじゃあがんばってねー（ニヤニヤ）」

康太「・・・殺したいほど妬ましい・・・！」

明久side out

「さてと、秀吉くん。秀吉くんのお姉さんのところに謝りにいくよ」
秀吉「う、うむ。わかっておるのじゃ・・・」

私は秀吉くんと一緒に優子さんのいるAクラス教室にむかった。

葵「優子さん」

優子「あら、川崎さんと・・・秀吉・・・！。どうかしたのかしら・・・！？」

優子さんは秀吉くんの姿を確認すると、黒いオーラを全身から出していた。

葵「ほら、秀吉くん」

秀吉「・・・姉上、すまなかつたのじゃ！」

秀吉くんはそう言つて土下座で木下さんに謝つた。

優子「・・・まあ、いいわ。関節の10個程度で勘弁してあげるわ・・・！」

そう言つて、優子さんは秀吉くんの関節を曲げようとし始めた。

「それは、許した時の対応じゃないと思います・・・」

秀吉「あ、姉上、その関節はそつちには曲がら・・・」

蓮「木下さん、暴力はダメですよ！」

優子さんが秀吉くんの関節を逆に曲げようとしたのを、近くで見ていた蓮くんが阻止した。

優子「え！？れ、蓮くん！？／＼いや、違うのよこれは！？」

蓮「何が違うんですか？僕には謝りに来た弟くんの関節を曲げてるようにしか見えませんでしたけど・・・！」

蓮くんは少し怒りながら優子さんにそう言い放つた。

（あ、蓮くんちよつと怒つてるかも・・・）

優子「そ、それは秀吉が下らないことをしたから・・・」

蓮「だから暴力ですか？たしかに怒られるようなことした弟くんに非はありますけど、謝りにきた弟くんに追いつちをかける必要はな

いですよね!」

優子「・・・ごめんなさい」

蓮「僕に謝ることじゃないと思いますよ、それじゃ」

蓮くんはそう言った後、自分の席に戻っていった。

蓮くんが自分の席に戻っていったから、しばらく沈黙が続いて、

優子「・・・秀吉、ごめんなさいね」

秀吉「い、いや、元はといえばワシが悪いのじゃから姉上が謝る必要ないのじゃ」

葵「そうだよ。秀吉くんがふざけたことしたからこうなったんだからね」

秀吉「う、うむ。・・・すまんのじゃ」

葵「さてと、秀吉くん、先に部活に行つてて」

秀吉「んむ?どうかしたのかの?」

葵「ちよつと優子さんと話があるから」

秀吉「わかつたのじゃ」

そう言つて、秀吉くんはAクラス教室から出て行った。

葵「優子さん」

優子「・・・なにかしら?」

優子さんは蓮くんに怒られて少し落ち込んでいるようです。

葵「蓮くんのところに行くよ」

グイッ!

優子「え?ちよ、ちよつと!」?

私はそう言つて、優子さんの手を引いて蓮くんの席に向かつていった。

葵「蓮くん」

優子「あ、あ・・・」

優子さんはさっきのことでもあつてなかなか言葉が出てこないみたいです。ね。

蓮「ん?さっきのことならもう怒つてませんよ。でも次からは理不

尽な暴力は振るわないでくださいな。僕そついうの大嫌いなんで・
・あと急に怒鳴ってごめんね」

優子「う、うん。・・・その、こつちこそごめんなさい」

蓮「わかってくれたならいいですよ」

葵「ほら怒ってなかったでしょ？・・・それじゃ私も部活にいくから」

蓮「うん、部活がんばってね」

優子「あ、ありがとね。川崎さん」

「二人とも、それじゃあね」

私はそつ言つて、2人と別れて部活に向かった。

葵 side out

優子 side

葵がAクラスから出て行つた後。

（よかつた・・・怒鳴られたときは蓮くん嫌われたかと思つたわ・
・つて、何考えてるのよアタシは！？／／／）

「あの・・・蓮くん」

蓮「どうしたの？木下さん」

「えつとね・・・秀吉とかぶるから名前で呼んでくれないかしら？
／／／」

蓮「？いいですよ。・・・優子ちゃん・・・でいいのかな？」

「う、うん。／／／あ、あと今日この後暇かしら？／／／」

蓮「特に用はないけど？」

「なら、一緒に映画を見にいかない？／／／」

蓮「いいですよ」

「ほ、ホント！？／／／（やった！これってデート・・・だよな？
／／／）」

蓮「それじゃあいきましょつか」

「うん／＼」

優子 *side out*

第28話&1t:デートのお誘い>t:(後書き)

今年になって気づいたんですが、総合PV30000+総合ユニー
ク5000を突破しました！

今年も『バカと天才？たちと召喚獣』をよろしくお願いします。m

(. . .) m

第29話&1t:放課後デート?>t;(前書き)

おみくじで大凶を引き当てました(笑)。

第29話&1t;放課後デート?>

問題22

以下の問いに答えなさい。

・マザーグースの歌の中で『スパイスと素敵なもので作られている』と表現されているのは何でしょう。

姫路瑞希・川崎葵・神谷優璃・桐谷宗一郎・武内薫・神楽坂蓮の答え
A・女の子

教師のコメント

正解です。流石ですね。

女の子の材料は、砂糖とスパイスと素敵なもの、男の子の材料はカエルと

カタツムリと仔犬のしっぽと歌われています。

吉井明久・一ノ瀬和哉の答え

A・カレーライス

教師のコメント

女の子は食べ物ではありません。

明久side

「チケット代、コーラ、ポップコーン・・・映画館、なんと恐ろしい場所!？」

「??「あれ?たしか吉井くんだったかな?」

急に後ろから声をかけられた。その声の主はAクラスの神楽坂くんだった。

「えつと、神楽坂くんだよな?」

蓮「あ、蓮でいいですよ」

「なら明久でいいよ。蓮も映画観にきたの?」

蓮「優子ちゃんに誘われてね。明久は優璃と麗奈と姫路さんと島田さんと映画を観に来たんでしょ?」

「うん、そうなんだけどなんで4人とも僕なんかと・・・(蓮くんみたいな人ときたほうがいいんじゃないのかな?)」

麗奈「・・・鈍感」

「へ?なんのこと?」

優子「まさかここまでとはね。・・・代表も大変ね」

優璃「あはは・・・」

そこへ突如、割り込む声。

雄二「・・・俺も今回ばかりは、負けを認めざるを得ないぜ」

そこには、先ほど交際をする事になった、霧島翔子と坂本(訂正)

霧島(笑)雄二。

雄二(俺は独身だ!)

ただし、雄二には手枷と首輪が付けられており、逃げられない状態だった。

翔子「・・・雄二、どれがみたい?」

雄二「早く自由になりたい」

翔子「じゃあ、これ」

と、雄二の言い分を無視して、映画の紹介表示を指差した。

雄二「おい待て! それ5時間24分もあるぞ!?!」

翔子「2回見る」

雄二「11時間も座ってられるか!!」

翔子「授業の間、雄二に会えない分の、う・め・あ・わ・せ」

雄二「やっぱ、帰るわ」

雄二は翔子の手に持たれた鎖をひったくった後、出口へと向かうが、翔子は先ほど和哉からもらったスタンガンを取り出して、

翔子「今日は、帰さない」

雄二「お、おい翔子、ちょ」

映画館に雄二の悲鳴が響き渡った。

翔子「学生2枚、2回分」

店員「はい。学生2回分と気を失った学生無駄に2回分ですね!」

(店員さん!この状況でも営業スマイルを通すんですか!?)

姫路「一途に一人の人を純粹に想う気持ちって、素敵ですね」

島田「憧れるよね」

優璃・麗奈・優子(あれは違うでしょ!)()

雄二と霧島さんを見送った後に、7人で映画を見ることになった。

映画を観終えて。

「面白かったね」

優璃「そうですね」

麗奈「・・・おもしろかった」

姫路「はい。最後のシーンなんて特に感動しました」

島田「うん。後編が気になるわね」

4人とも満足してくれたようだ。

蓮「優子ちゃん。また今度、後編も一緒に観にきますか?」

優子「ふえ!?!/ / (プシュー・・・) (ボソツ) 蓮くんと一緒に

に映画蓮くんと一緒に映画蓮くんと一緒に映画蓮くんと一緒に映画・

・・・

木下さんは何故か処理落ちして何か呟いていた。

清水「お姉さまー!!」

そこへ、突如乱入者。

清水「探しましたおねえさま！」

島田「みつ、美春!？」

突如現れたのは、髪を縦ロールにした文月学園の制服を着た少女だった。

「えつと、誰？」

島田「知り合いよ」

清水「違います、美波お姉さまの恋人です！」

その言葉を聞いて、全員の視線が島田さんに集中。

優子「島田さん、そんな趣味があつたの？」

麗奈「・・・意外」

島田「ないわよ!うちはノーマルで、ちゃんと男の人が好きなんだから!！」

清水「いけませんお姉さま!男などという愚劣な豚などにそのような事を!！」

蓮「突然乱入してきて豚扱いは酷過ぎませんか？」

清水「なんですか豚Y・・・失礼しましたノノ豚はその1匹だけでしたわ」

清水さんは少し頬を赤くした後、僕を見据えて射殺すような視線をぶつけ、コンパスやカッターを取り出し刃先を僕に向けて構えた。

蓮「いや、明久も豚じゃないからね・・・」

清水「この薄汚いブタは、今美春がこの世から葬り去ります!」

「ええつ!？なつ何でいきなり!？」

清水「問答無用!お姉さまと映画を見たその罪、死んで償いなさい!」

島田「やめなさい美春!」

バスッ!

清水さんが僕にカッターを投げようとしたとき、蓮くんが清水さんの首に手刀を叩き込んで清水さんを沈静化した。

蓮「さて、一旦ここから離れますか」

「え？あ、そつか。こんな場所で騒ぎを起こしたら・・・」
蓮「そういうこと」

そう言つて、僕たちはその場を急いで離れた。

そこから少し離れた場所にて。

島田「ごめん。ウチの所為で・・・」

「気にしないでいいよ島田さん。」

島田「ありがとう・・・」

「さてと、これからどうしようか？」

??「あれ？優子と代表に蓮ちゃんと吉井くんたちだよな？」

また誰かから声を掛けられた。

優子「優子？」

優璃「工藤さん？こんなところでなにしてるの？」

その声の主は2-Aクラスの工藤さんと、横に見覚えのある顔が。

島田「あと隣にいるのは土屋よね」

康太「・・・人違い(ブンブン!)」

優子「いやー今日ちよつと悪いことしたなあ、と思つてボクが映画に誘つたんだよ」

「ムツツリーニ、明日は覚悟してね・・・!」

康太「・・・明久、それはお前もだ・・・!」

「・・・仕方ない、ここはお互いに異端審問会にリークしない方向でいこうか・・・」

康太「・・・賛成」

優子「ところで何してるの？」

優子「実は、(事情説明中)ということがあってね」

優子「あはは・・・それは災難だったね」

優璃「それで逃げてきたんだけど、今から何しようか考えていたところなんですよ」

蓮「でも今日はもうお開きにしない？もういい時間だしさ」

麗奈「・・・賛成、さっきの人怖い・・・」

優璃「そうだね。正直清水さんにはもう会いたくないかな・・・」
「大丈夫？二人とも」

優璃「う、うん／＼」

麗奈「・・・大丈夫／＼」

蓮「それじゃあ僕は優子ちゃんを送っていきますので」

「うん、じゃあね」

蓮くんはそう言っつて、木下さんを連れて帰っていった。

愛子「それじゃあボクも帰ろうかな。ムツツリーニくん、ちゃんと家まで送っつてよ？」

康太「・・・仕方ない」

愛子「それじゃあねー」

ムツツリーニたちも帰っつていった。

「それじゃあ僕たちもかえろうか」

帰宅途中。

島田「それじゃあウチと瑞希はこっちだから」

姫路「また明日です」

「ばいばーい」

姫路さんと島田さんと分かれ道で別れた。

「そつういえば、二人とも家はどの辺なの？」

優璃「この先のマンションだよ」

麗奈「・・・わたしと優璃と葵は3人で一緒に暮らしてる」

「え？それっつて・・・（まさか・・・）もしかして・・・あれ？」

そう言っつて、僕は僕が住んでいるマンションを指差した。

優璃「うん、そうだよ」

「偶然っつてあるものなんだね。実は、僕もこのマンションに住んでるんだよ」

優璃「え！？・・・すごい偶然ですね／＼」

麗奈「・・・たしかに／＼」

2人もこんなに近くに住んでいるとは思っつていなかったようっつて、驚

いていた。

優璃「そ、それなら今日は私たちの家に晩御飯を食べに来ませんか？ / / /」

「へ？ いいの？（何で頬を赤く染めてるのかな？）」

優璃「も、もちろん！」

麗奈「・・・大歓迎」

その後、僕は優璃ちゃんと麗奈ちゃんの家にお邪魔して、晩御飯をごちそうになった。

晩御飯後。

僕たちはお互いのアドレスを交換した後、自分たちの身の上話をしていた。

「へえ〜それじゃあ麗奈ちゃんは去年までほとんどイギリスにいたんだ」

麗奈「・・・うん、だから日本語難しい」

「やっぱり、いきなり違う国の言葉なんて難しいよね。島田さんもそうだったし」

優璃「まだすぐに言葉が出てこないもんね」

麗奈「・・・だから明久にも日本語を教えて欲しい」

「え？ でも、優璃ちゃんや葵さんに教わったほうがいいんじゃない？ 僕はあるり賢いわけでもないし」

麗奈「・・・それでも明久がいい。お願い / / /」

そう言つて、麗奈ちゃんに上目遣いで頼み込まれた。

（な、なんという破壊力だ！？ このままじゃ僕の理性が・・・！）

「わ、わかったよ」

麗奈「・・・ありがとう / / /」

と、麗奈ちゃんは満面の笑みを浮かべながら僕にお礼を言った。

優璃「むう、なら私は明久くんに勉強を教える！」

と、優璃ちゃんがちょっと不機嫌そうに言った。

「え？」

優璃「・・・ダメですか？」

今度は優璃ちゃんにも上目遣いで僕の顔を覗き込んできた。

（ぐはあ！僕の理性が吹き飛びそうだ・・・！）

「わ、わかったよ。じゃ、じゃあ今度みんなと一緒に勉強会をしよう！」

優璃「・・・（ボソツ）みんなとじゃなくて明久くんがいいのに・・・」

麗奈「・・・（ボソツ）それじゃあ意味がないのに・・・」

僕の返答に2人が何か呟いている。

「ん？二人ともどうしたの？」

優璃「なんでもないです！／＼／＼」

麗奈「・・・気にしなくていい／＼／＼」

一方、映画館にて。

雄二「・・・今のうち」

ガシッ！

翔子「・・・今日は帰さないと言った。退屈なら寝てて良い」

雄二「だからそれはk・・・！」

今度は悲鳴をあげる時間も与えられなかった。

第29話&1t;放課後デート?>t; (後書き)

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想にかいてくださると助かります。

アンケートにつきましては票が少ないので、票がある程度集まるまで保留にします。m (. | .) m

第30話&1t・学園統治者>t；（前書き）

次回にオリキャラ紹介（5）を投稿した後、ラブレターの話。
終わり次第清涼祭編になると思います。

第30話&1t：学園統治者>

問題23

以下の問いに答えなさい。

- ・学校に持って来てはいけないものをあげなさい。

姫路瑞希・川崎葵・神谷優璃の答え

A・漫画や、ゲーム機等の遊び道具

教師のコメント

正解です。

基本的に学校は勉強をするところですが、同時に、社会に出る前に生活態度を学ぶところでもあります。

勉強さえできればいいわけではなく、罰則を守って生活できることも大切です。

神楽坂蓮・桐谷宗一郎の答え

A・爆発物などの危険物、刃物等

武内薫・工藤愛子の答え

A・18禁の本

教師のコメント

常識で考えてください。

吉井明久の答え

A・おやつはバナナに入りますか？

教師のコメント

そんなバナナ・・・とでも言えばいいですか？

宗一郎 side

Aクラス対Fクラスの試召戦争の次の週の放課後。

高橋先生「これでホームルームを終わります。皆さん気をつけて帰ってください。あと、神谷さん、桐谷くん、神楽坂くんは学園長がお呼びですので、学園長室に行ってください。」

蓮「学園長室？なにかしたの宗一郎？」

「なんで俺に聞くんだ？」

蓮「今呼ばれた3人の中で一番問題起こしそうだし」

「なにもしてねえ！・・・とにかく学園長室に行くぞ」

蓮「そうだね。優璃もいくよ」

優璃「うん」

学園長室にて。

コンコン

優璃が学園長室のドアをノックした。

学園長「空いてるよ、入っといで」

俺・優璃・蓮「」「失礼します」「」

葵「あれ？優璃たちも呼ばれたの？」

学園長室には葵と・・・和哉の姉と兄くそやまうがいた。

優璃「うん」

「・・・なんでこいつらがいるんだ？」

できれば、こんな奴とは顔をあわせたくなかったな。

隆哉「なんだてめえか」

「知るかよ。呼び出されたんだからな」

ほんとに気が悪い奴だ。

唯「こんにちは神楽坂くん、和哉は元気にしてますか？」

蓮「ええ、元気ですよ」

唯「そうですね」

「・・・見捨てておいてなに言ってるやがる」

お前らが、和哉を追い出したんだろ？

唯「それは・・・」

姉のほうは俺の言葉に何か言おうとしたが、

学園長「少し黙りな！今から何故呼んだか説明するよ！」

学園長もといクソババアに話を途中できられた。

「チツ！・・・で、何で俺らはここに呼ばれたんだ？」

学園長「それはさね、あんたらに”学園統治者”をやってもらおう

と思ってるね。」

優璃「その”学園統治者”というのは何をするんですか？」

学園長「主に、生徒間の揉め事の仲介さね」

「そんなの教師がやれよ」

学園長「いや、教師だけじゃ手が追いきれなくてね。最近、生徒間

の・・・特にクラス間での揉め事が多発してるさね。それを取り締ま

って欲しいさね」

学園長もといクソババアが“学年統治者”の説明をしたところ、兄くそやまう

が異議を唱えた。

隆哉「お言葉ですが学園長、それはこの文月学園のクラス間の設備

待遇等に差があることからの揉め事でしたよね？」

学園長「そうさね」

隆哉「それなら、それを取り締まるのは学園の方針に反するのでは？」

「・・・それもそうだな。それに何故わざわざ俺ら1生徒に頼むんだ？」

学園長「この前に2・B対2・Fの試召戦争みたいに教師に見つからなければ何をやってもいいみたいな奴らがいるからさね」

「なるほどな(2・Bか・・・あの女装が趣味のやつが代表をやつてるところか)」

葵「たしかにBクラスの生徒が破壊仕事を仕掛けようとしてきましたね」

学園長「そういうことさね、だから教師だけでは取り締まれない揉め事をあんたたちに任せたいのさ」

「断る(見返り次第だな)」

学園長「まあ待つさね、今順を追って説明するさね。まず、あんたらの召喚獣を教師と同じ設定にするさね」

蓮「ということは物理干渉ができることになりますね」

学園長「そうさね。これで揉め事に収集がつかなくなったとき、実力行使を行ってくれても構わないさね」

優璃「でも、召喚フィールドがなければ召喚獣を使えないですよ？」

学園長「その問題も“コイツ”で解決済みさね」

とって、クソババアは赤い腕輪みたいなものを机から取り出した。隆哉「なんですかこれは？」

学園長「これは紅の腕輪さね」

「それは何に使えるんだ？」

学園長「まず教科を指定して教師と同じくらいの召喚フィールドをはれるさね。加えてこの腕輪での召喚フィールドではフィールドバツクが任意で設定できるさね。」

「それで問題児共を取り締められることだな？」

学園長「そういうことさね、報酬はこの腕輪+授業の免除でどうさ

ね？」

隆哉「僕と姉さんはその条件で構いませんよ」

蓮「僕もいいですよ」

優璃「私も」

葵「私もいいですけど、1つ質問いいですか？」

学園長「なにさね？」

葵「何を基準にこのメンバーを選出したんですか？私以外は皆Aクラスの人ですが」

学園長「召喚獣を扱うんだから単純に高橋先生を超える総合点を叩き出している授業を受けなくても問題ないのがあんならだったってことさね」

だからここにこいつらがいるのか。

学園長「で、あとはあんただけさね。どうするんだい？」

「まあいいだろう、その学園統治者とやら受けてやるよ」

学園長「これで、話は終わりさね」

「さてと、それじゃあ鞆取りにいつてから帰るか」

宗一郎 side out

優璃 side

Aクラスにて。

薫「あつ！宗くんお帰り」

宗一郎「待ってたのか？」

薫「うん！一緒に帰ろ！」

宗くと薫と一緒に帰っていった。

「さてと、私も帰ろつと」

と、鞆に教科書を詰めて帰る準備をしていると、

明久「あ、優璃ちゃん！」

突然後ろから声を掛けられた。

「え？あ、明久くん！？／／ど、どうしてここにいますか！
？／／」

明久「えつとね、先生の手伝いの途中なんだよ。あと先週の試召戦
争の時に無理を言ったお礼をしようと思ってね」

「き、きにしなくてもいいですよ？／／（うう、緊張して声が・
）」

明久「そういうわけにはいかないよ」

「え、えつと、なら今度は明久くんの家におじやましてもいいです
か？」

明久「うん、わかった。いつでもいいよ」

「え？明久くん家族の人とかに話さなくてもいいんですか？」

明久「あ、僕ね親が海外で働いてて姉もアメリカの大学に行ってる
から一人暮らしなんだよ」

「そうなんですか、なら今度おじやましますね／／」

明久「うん。それじゃあね」

そう言つて、明久くんは教室から出て行った。

（やった！これで明久くんの家に・・・）

優子「あら？代表まだ残ってたの？・・・代表？」

後ろから優子さん突然話しかけられた。

「ふえ！？あ、優子さんどうしたの？（あ、全然気がつかなかった。
・・・）」

優子「よかったわね代表、思い人と2人きりなんて（代表がこんな
時間まで残ってるのが珍しいからね）」

「優子さん！本音と建前が逆になってるからね！それとどこから聞
いてたの！？」

優子「『え？あ、明久くん！？／／』のところからよ」

「それって全部じゃないですか！」

優子「がんばってね代表。（ニヤニヤ）」

「で、でも、それは優子さんでしょ？」

優子「ふえ！？／＼／＼な、なんのことかしら！？／＼／＼」

「とぼけても無駄だよ。あ、そうだ（ボソッ）蓮くんのメアド教えてあげるよ（ニヤニヤ）」

優子「あ、アタシは蓮くんなんて／＼／＼」

蓮「僕がどうかしたの？」

いつの間にか蓮くんが近くにいたみたいで、話が聞こえたらしい。

優子「れ、蓮くん！？／＼／＼」

「（ちよつと優子さんを後押ししてあげよつと）あ、蓮くん、木下さんが蓮くんと一緒に帰りたいつていつてるんだけど」

優子「ちよ！？ちよつと代表！？／＼／＼」

蓮「ん？いいよ！僕もちよつと帰るところだし」

「（ボソッ）がんばってね、優子さん（ニヤニヤ）」

蓮「優子ちゃん、帰ろうか（ニコッ）」

優子「／＼／＼（コク）」

そうして蓮くんと優子さんは一緒に帰っていった。

「さてと、私も帰ろうかな」

ガラッ！

ちよつとそこに麗奈がやってきた。

麗奈「・・・優璃、一緒に帰る」

「あれ？葵はどうしたの？」

麗奈「・・・葵は部活」

「そつか、それじゃあ帰ろつか」

麗奈「・・・うん」

私たちも帰ろうとしたとき、

翔子「雄二と一緒に帰ってくれないなら、無理やりでも一緒に帰ってもらおう」

雄二「しよ、翔子！？スタンガンはやm」

バチバチバチバチ！

霧島さんがスタンガンを持って、坂本くんに迫っていき、スタンガ

ンで坂本くんを気絶させてから手に手錠を嵌めていた。

麗奈「・・・うちの代表、大丈夫？」

「ど、どうだろうね。馬にけられて死にたくないから邪魔はしないけどね・・・」

麗奈「・・・見なかったことにして帰ろう」

「そ、そだね」

私と麗奈は今の惨劇を見なかったことにして家に帰った。

第30話&1t・学園統治者>t；（後書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想に書いてくださると助かります。

アンケートにつきましては票が少ないので、票がある程度集まるまで保留にします。m（・）m

オリキャラ紹介(5) (前書き)

一ノ瀬和哉の姉と兄の紹介です。

オリキャラ紹介(5)

名前：一ノ瀬 唯

読み：いちのせ ゆい

性別：女

誕生日：9月13日

身長：164cm(D)

所属クラス：3 - A (代表)

得意教科：化学

苦手教科：現代社会

趣味：読書、ピアノ

特技：ピアノ

外見：黒髪ロングで、文月学園の3年の中で一番の美女と周りから言われている。和哉とは血が繋がっていないのであまり似ていない。性格：押しが弱く、引っ込み思案。なので、代表の仕事は弟の隆哉に任せっきり。

・ (一ノ瀬 和哉) の姉 (血は繋がっていない)。
・ ある出来事以来、和哉には嫌悪されているが、この状況をなんとかして和哉とまた一緒に暮らしたいと思っている。

召喚獣の武器・現時点では不明

召喚獣の服装・現時点では不明

腕輪の能力・現時点では不明

*

名前：一ノ瀬 隆哉

読み：いちのせ たかや

性別：男

誕生日：2月12日

身長：178cm

体重：64kg

所属クラス：3 - A（学年次席）

得意教科：物理

苦手教科：英語

趣味：トライアスロン

特技：ボクシング

外見：髪型・髪色は久保利光に近い感じで、見た目は優等生そのもの。

性格：見た目に反して、かなりの策士。加えて極端とも言える実力主義者で、弱きは罪とまで言いきり、自らにも妥協はしない。自分よりも強者（学園の生徒では神楽坂 蓮と姉の唯のみ）には敬意をもって接するが、自分より弱者に対しては人として扱うことをしない。

・（一ノ瀬 和哉）の兄（血は繋がっていない）。

・とある出来事以来、和哉に嫌悪されていて、自身もまた和哉のこ
と自分の弟だということを恥だと思っており、自分の目の前から消
し去りたいと思うほど嫌悪している。

召喚獣の武器・現時点では不明

召喚獣の服装・現時点では不明

腕輪の能力・現時点では不明

オリキャラ紹介(5) (後書き)

次回は明久ラブレター事件(前編)を明日に投稿します。

第31話&1t:ラブレター事件(前編)>t:(前書き)

ラブレター編です。

第31話&1t;ラブレター事件(前編)>

問題24

以下の問いに答えなさい。

・得体の知れない集団が我が物顔で振る舞っている様子を何と呼ぶでしょうか。

姫路瑞希・川崎葵・神谷優璃・桐谷宗一郎・神楽坂蓮の答え

A・百鬼夜行

教師のコメント

正解です。流石ですね。

その昔、妖怪や魍魎が群れをなして歩くことをそう呼んでいた頃から、転じて、このように呼びます。

須川亮の答え

A・もてる奴は敵じゃーっ！

教師のコメント

あなたがたの事です。

一ノ瀬和哉・武内薫の答え

A・西村先生と宗くんや蓮兄(蓮くん)がいないときのFFF団のこと

教師のコメント

まさにそのとおりですね。

明久 side

通学路にて。

「うん……ありえない登校時間だ」

現在の時刻7:30。

「早起きは三文の徳というくらいだし、何かイイコトあるといいな」

??「あれ？吉井くん？」

ふいに後ろから声を掛けられた。

「あ、葵さんと秀吉か、おはよう二人とも」

秀吉「おはようなのじゃ」

葵「おはよう、今日は早いね」

「うん、今日はいつもより二時間くらい早く目が覚めちゃってね、二人は？」

秀吉「ワシらは演劇部の朝練なのじゃ」

葵「そういうこと」

（秀吉と葵さんは演劇部のホープといわれるだけのことはあって熱心だね）

秀吉「途中まで一緒に行くかの？明久」

「うん、そうするよ」

僕は秀吉と葵さんと一緒に学校に向かった。

葵「あ、西村先生だね」

校門の近くまで来ると見知った後ろ姿があった。

刈り揃えられた髪に浅黒い肌、無骨なシルエツト。我らFクラスの担任の鉄人。

僕・秀吉・葵「先生、おはようございます!」「」

鉄人「おう、おはよう!部活の朝練か?感心だ。川崎と木下と……」

僕を見た瞬間、鉄人の動きが止まった。

「先生?」

鉄人「……すまん。間違えた」

「人違いですか?いやそんな、謝る必要なんて」

鉄人「吉井、こんな早朝から学校に来て、何をたくらんでいる」
さっきの爽やかな笑顔から一転、警戒心をあらわにした。

「鉄人……間違えたのは接する態度ですか?」

葵「最近、特に問題もおこしてないとおもいますが?」

鉄人「最近はな。だが、警戒するのは教師のして当然のことだから勘弁してくれ」

「もういいですよ」

鉄人「それはそうと、丁度良かった。『観察処分者』のお前がいるなら手間が省けるからな」

「げ。『観察処分者』ってことは、また力仕事ですか?」

鉄人「そういうことだ。古くなつたサッカーのゴールを撤去してくれ」

「やれやれ。早起きなんてするんじゃないな……」

鉄人「後悔するのは早起きではなく、観察処分を受けたお前の態度だということに気づくべきだと思うがな」

と、鉄人は呆れたように僕の顔を見てため息をついた。

仕方なく鉄人についていって、僕は召喚獣を使って、鉄人に頼まれたサッカーゴールの撤去を済ませて、靴箱に向かった。

下足室にて。

「な、なんじゃこりゃー！！？？」

僕の靴箱にラブレターが入っていた。

雄二「どうしたんだ、明久」

雄二に声を掛けられて、咄嗟に靴箱に入っていたラブレターをポケットの中に隠した。

「ゆ、雄二か。おはよー」

雄二「おう。で、明久。どうしたんだ？いきなり奇声をあげて」

（これは雄二に知られると面倒なことになる・・・知られるわけにはいかない！）

「な、なんでもないよ。もう時間がぎりぎりだし急いで教室に行くー！」

雄二「ん、そうだな。校内にいるのに遅刻扱いは癪だな」

僕と雄二はチャイムがなる前に教室に行くことができ、その後すぐにチャイムがなり鉄人が入ってきて出席を取り始めた。

教室にて。

鉄人「工藤」

F「はい」

鉄人「久保田」

F「はい」

鉄人「近藤」

F「はい」

鉄人「斉藤」

F「はい」

鉄人「坂本」

雄二「・・・明久がラブレターを買ったようだ」

F「……殺せえつ……!!」「」「」「」「」

「ゆ、雄二！いきなり何てこと言い出すんだよ！」

雄二は小声だったのにもかかわらず、クラスの皆さんは聞こえていたようだ。

そしてクラスメートの大半は僕に対する罵倒が飛び交っている。

鉄人「お前ら！静かにしろ！」

すぐに鉄人が一喝。……静かにはなったものの和哉と雄二と秀吉と康太を除く男子は殺気が駄々漏れた。

鉄人「それでは出席確認を続ける。手塚」

F「吉井クロス」

鉄人「藤田」

F「吉井クロス」

「皆落ち着くんだ！何故か返事が『吉井クロス』に変わってるよ！」
鉄人「吉井、うるさいぞ」

「先生、ここで注意すべき相手は僕じゃないでしょう!?このままだとクラスの皆に僕は殴る蹴るの暴行を加えられていますよ!」
?

鉄人「……新田」

F「吉井クロス」

鉄人は僕を完全に無視するつもりらしい。

その後も出席確認が続き……

鉄人「牧田」

F「吉井クロス」

鉄人「水無月」

麗奈「……和くん、宗くん呼んできて」

和哉「ラジャー」

そういうと、和哉は宗一郎くんに電話し始めた。

麗奈「……明久に暴力を振るおうとした人たちには相応の罰が必要」

葵「自業自得だね」

(助かった……のかな?)

F「……………」
「……………」

つい最近FFF団は騒ぎすぎたため、宗一郎に鉄拳制裁されたところですよ。

麗奈ちゃんと和哉が宗一郎くんを呼んだおかげで、僕に殺気を向けていた男子たちは殺気を出す代わりに冷や汗をダラダラと流し始めた。

鉄人「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日、勉学にしっかり励むように」

そう言つて、西村先生は教室から出て行った。

教室は鉄人が出て行った後もずっと静かなままで、しばらくすると宗一郎「和哉、何のようだ?」

本当に宗一郎くんが来た。

F「……………」に、逃げるー!!」「……………」
途端にさっきまで僕に殺気を向けていた人たちは蜘蛛の子散らして逃げ始めた。

宗一郎「は?」

宗一郎くんは訳がわからないといった表情をしている。

和哉「えつと、実はですね……(事情説明中)」ということですよ」

宗一郎「……試召戦争の時も思ったが、Fクラスの男子は今いる5人を除いて皆そんな奴らなのか?」

宗一郎くんは事情を聞いた後、呆れていた。

「助かったよ、宗一郎くん」

宗一郎「お前も災難だな。とりあえずこの悪趣味なFクラス代表は霧島に引き渡すとして……」

雄二「おい!翔子は関係ないだろ!?!」

宗一郎「いや、嫁だろ?」

雄二「俺は独身だ!てか呼ぶんじゃねえ!」

宗一郎「……まあ呼ばなくてもお前の後ろにいたりするんだがな」

雄二「は？」

雄二が恐る恐る振り返ると、

翔子「・・・そんな悪趣味なことをしてる雄二にはお仕置が必要」
いつのまにか霧島さんが右手にスタンガンを持って立っていた。

雄二「しょ、翔子！？ちょ」

バチバチバチバチ！

雄二は霧島さんに何か言おうとしたが、スタンガンによって気絶したため、何も言えなくなった。

麗奈「・・・宗くん、ありがとう」

宗一郎「まあこれくらいお安い御用さ。・・・で、明久はラブレターはもう見たのか？」

「ん？ただただ・・・」

宗一郎「今からどつかいって見てきたらどうだ？ここだと奪い取られるだろうから」

「そ、そうだね。そうするよ」

僕は宗一郎くんの忠告に従って、教室を後にしようとするが、

大島先生「全員席につけー授業を始めるぞ」

1時間目の保健体育担当の大島先生が来てしまった。

宗一郎「さてと、俺はそろそろもどるかな」

麗奈「・・・ありがとう」

「仕方ない、ラブレターは昼休みに読むことにしよう」

大島先生「・・・何故こんなに少ないんだ？」

和哉「あはははは・・・」

ちょうどその時、

鉄人「コラー！！貴様ら！真面目に勉学に励めといったはずだ！」

F「ま、まずい！逃げ」

F「「「「「ギャー！ー！！」「」「」

どうやら鉄人につかまっていたみたいだ。

鉄人「お前ら・・・覚悟しろ！今日の午前中は俺が補修室できっすり付き合ってやろう！」

F「……鬼の補修はいやだ——！！」

と、外から聞こえてきた。

大島先生「……授業を始める」

こうしてFクラスは午前中、10人（僕、雄二、秀吉、康太、和哉、麗奈ちゃん、葵さん、姫路さん、島田さん、霧島さん）で授業を受けることとなった。

・あれ？今Fクラスの生徒じゃない人が混ざっていたような……？

第31話&1t;ラブレター事件(前編) >t;(後書き)

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想に書いてくださると助かります。

アンケートにつきましては票が少ないので、票がある程度集まるまで保留にします。m(´・`m

第32話&1t:ラブレター事件(後編)>t:(前書き)

ラブレター編(後編)です。

第32話&1t;ラブレター事件(後編)>

問題25

以下の問いに答えなさい。

・『物事は繰り返されるものである』を、ことわざで何と言つてしようか。

姫路瑞希・川崎葵・神谷優璃・桐谷宗一郎・神楽坂蓮の答え

A・二度あることは三度ある

教師のコメント

正解ですね。

『あること三度』『一災起れば二災』という言葉もあります。

良くないことが続くときなどによく使われる言葉です。

同じ過ちを起こさないよう、一度目の教訓を生かして対処しましょう。

258

吉井明久の答え

A・二度あることは三度ある

教師のコメント

・・・え！？正解です。なにか悪いものでも食べましたか？

吉井明久の答え

失敬な！

木下秀吉の答え

A・輪廻転生

教師のコメント

来世もFクラスですか？

明久side

昼休み。

昼休みになり、僕は今朝、靴箱に入っていたラブレターを読もうと教室を後にしようとする、島田さんに骨をくだくかのような強い力で肩を掴まれた。

島田「吉井、どこにいくつもり？」

「肩が砕けそうなくらい痛いんだけど・・・」

島田「そんなことどうでもいいわ。・・・さっさとさっきのラブレターをよこしなさい！」

（どうでもいいわけないよ！？）

「な、なんでさ！？」

姫路「美波ちゃん、やめてください」

姫路さんが島田さんをとめようとした。

「姫路さん、君は味方なんだね！？」

ちなみに和哉はAクラスに弁当に行っていて、秀吉と葵さんは演劇部のミーティング、康太はカメラを手にどこかにいってしまっ

て、麗奈ちゃんは職員室に呼び出されている。・・・あと、雄二は黒こげのまま霧島さんに手錠で捕まったままである。

姫路「いえ、先に私とOHANASHIをしてからですよ」

(・・・前言撤回。今このクラスに僕の味方はいないようだ)

須川「吉井、姫路さんのOHANASHIが終わったら、異端審」「さらば！」

僕は島田さんの腕を振り払い教室から飛び出た。

島田「待ちなさい吉井！逃がさないんだから！」

須川「ダーゲットが逃げたぞ！追うんだ！」

F「逃がすな！追撃するぞ！」

F「サーチアンドデースッ！」

姫路「待ってください吉井くん。まだOHANASHIが終わってませんよ」

僕は追撃を振り切りながら、新校舎のほうに逃亡した。

新校舎にて。

F「「「「吉井を殺せー！！」「」「」

「まずい・・・！逃げ場がなくなってきた・・・」

F「吉井がいたぞ！」

考え込んでいると、FFF団の一人に見つかってしまった。

そして逆のほうに逃げようとしたが、挟み込まれてしまった。

F「吉井・・・！裏切り者には制裁だ・・・！」

F「お前の幸せは必ずぶち壊す！」

相手は前と後ろに3人ずつ・・・これは厳しい。

「くっ・・・！」

F「「「「「死ねー！！」「」「」「」

(万事休すか・・・！)

と、思ったが、次の瞬間には6人とも地に伏せていた。

蓮「まったく、和哉に聞いてはいましたけどここまでとは・・・」

「れ、蓮！？た、助かったよ」

蓮「たまたま通りかかっただけだから気にしないでいいよ。よくわからないけどとりあえずＡクラスに身を潜めときなよ」

「た、助かるよ・・・」

麗奈「・・・明久！」

麗奈ちゃんが僕の姿を見つけて駆け寄ってきた。

麗奈「・・・大丈夫？」

「うん、なんとかね」

麗奈「・・・まだ懲りてなかったんだあの人たち・・・」

島田「見つけたわよ！吉井！・・・さつさとつかまりなさい！」

3人で話していると、今度は島田さんに見つかった。

（げっ！逃げなきゃ！）

ガシッ！

と、思ったが、島田さんに肩を掴まれた。

島田「さあ吉井！さつさとラブレターをよこしなさい！今なら、心臓か肺で勘弁してあげるわ！」

「それ間違はなく死ぬからね！？」

と、僕は島田さんの手を払いのけ、距離をとった。

島田「往生際が悪いわよ吉井！」

と、僕に致命的ダメージを与えようとした島田さんと僕の間には麗奈ちゃんと蓮が割り込んだ。

島田「邪魔よ！どきなさい二人とも！」

麗奈「・・・何故明久が暴力をふるわれなければいけないの？」

蓮「たしかにそうだね。聞いている話だと明久がラブレターをもらっただけなんだよね？」

島田「吉井がおとなしくそのラブレターを見せないからよ！」

「いや、島田さんには関係ないよね！？」

蓮「・・・麗奈、Ｆクラスに麗奈たちと明久以外にまともな人はいないの？」

蓮くんは呆れたように言った。

麗奈「・・・秀吉くんはまだまとも。あとはみんな変」

島田「なっ！アンタたち、バカにしてるの！？」

蓮「明久も災難だね」

島田「どういう意味よ！？」

島田さんは二人に対して掴みかかろうかといわんばかりに怒鳴り散らした。

麗奈「・・・なら逆になつて考えて。自分の好きな人に書いたラブレターが他人に見られたら・・・とか考えないの？」

島田「うっ！？で、でも吉井のせいで『彼女にしたくない女子ランキング』の三位になつてるのよ！それに」

麗奈「・・・ふざけないで！明久は何もしてない。そもそも明久に對して暴力をふるっているのが3位の原因。・・・つまりは自業自得」

と、麗奈ちゃんは島田さんの言葉を途中で聞くのをやめ、怒気をこめながら島田さんにそう言いはなった。

「で、でもさ、暴力を振るわれるってことは僕に何か悪いところが・・・」

麗奈「・・・明久は悪くない。・・・そもそも他人のことをまったく考えてない島田さんが悪い」

麗奈ちゃんに正論で返されて、島田さんは俯いてしまった。

蓮「とりあえず2人ともとりあえずAクラスに来る？」

麗奈「・・・そうする。行こう明久」

「う、うん」

僕たち三人は島田さんをほったらかしてしてAクラスへと向かった。

島田「なんなのよ・・・ウチが何をしたっていうのよ・・・」

Aクラスにて。

今、僕は優璃ちゃんが作ってきていた弁当を分けてもらったのを食

べながら、Aクラスの人たちと話をしていた。

宗一郎「・・・あいつらまだ懲りてないのか？」

宗一郎くんも話を聞いて呆れていた。

優璃「明久くん、怪我はしてないですか？」

「うん、だいじょうぶだよ（モグモグ）優璃ちゃんは料理上手なんだね。すごくおいしいよ」

僕は優璃ちゃんに分けてもらった卵焼きを食べながらこたえた。

優璃「え？／＼／＼お、お口にあつてよかったです・・・／＼／＼」

優璃ちゃんはそう言うのと、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

薫「吉井くんも以外と・・・だね（ニヤニヤ）」

宗一郎「蓮並だな（ニヤニヤ）」

「へ？なんのこと？（僕なにかしたのかな？）」

麗奈「・・・明久は気にしなくていい」

「（まったく意味がわからないよ・・・）そういえば蓮は？」

麗奈「・・・蓮くんならあっち」

と言つて、麗奈ちゃんは僕の後ろのほうを指差した。

そして麗奈ちゃんが指差したほうを見ると、

A女「神楽坂くん！これ、食べてください」

A女「あ、こら、和美！抜け駆けは許さないわよ！」

蓮「そんなにもらつても食べられないですよ・・・」

蓮はAクラスの女子5人に囲まれていた。

そこからちよつと離れたところで、物凄く不機嫌そうに蓮さんとAクラスの女の子たちを見ている秀吉のお姉さんと秀吉のお姉さんを見てにやついている工藤さんがいた。

「（なるほど・・・秀吉のお姉さんは蓮のことが・・・）蓮って鈍感だよ」

宗一郎「お前が言つな！」

薫「他人のことにはするどいんだね・・・」

麗奈「・・・明久も少しは気づいて欲しい」

「え？（意味がわからないよ・・・まるでこれじゃあ僕が鈍感みた

いじゃないか！」

と、僕が3人に何故か呆れられていたとき、Aクラスの教室の扉をFFF団の15人が蹴り飛ばして、Aクラスの教室に入ってきた。

F「いたぞ！吉井だ！」

F「殺せー！」

F「全員突撃ッ！」

そして僕を見つけるとFFF団の数人がすぐさま僕に突撃してきた。

宗一郎「またこいつらか・・・優璃、これは正当防衛だし、コレ使ってもいいよな？」

宗一郎くんは呆れながらそう言っつて、赤い腕輪をポケットから取り出した。

優璃「いいと思いますよ」

「え？なんのこと？（はやくにげなきゃ！）」

宗一郎「教科・日本史！『アウェイクン！』」

宗一郎くんがそう言っつと、Aクラス教室に召喚フィールドが展開された。

「え？召喚フィールド？ど、どうして!？」

宗一郎「俺と蓮と優璃は学園長・・・もといクソババアに頼まれた仕事の代わりに召喚フィールドを展開できるんだ・・・さて、そのバカども15人、さっさと召喚しろ」

F「ふざけんな！」

FFF団は勝てないことがわかっていいる為、召喚獣を一向に呼ばない。

（まあ・・・勝てるわけないからね）

宗一郎「そうか・・・戦争の意思のないやつは戦死（補修室）だな」

F×15「さ、サモン！」

宗一郎くんの言葉を聞いて、FFF団の15人は焦りながら召喚獣を呼び出した。

優璃「それじゃあ私が相手しますね」

宗一郎「そうか？ならまかせろぞ」

優璃「サモン！」

・模擬戦（日本史）

F×15人 平均70点

V S

神谷優璃（1705点）

「すごい点数だね」

優璃「そんなことないですよ」

「でも、ごめんね。厄介事に巻き込んで……」

優璃「いえ、気にしないでください。……いきますよ。“衝撃波”！」

優璃の召喚獣がサーベルを振るうと、衝撃波が起き、一瞬にしてFFF団の召喚獣たちを切り刻んだ。

・模擬戦（日本史）

F×15人 全員0点

V S

神谷優璃（1675点）

……となると、

鉄人「戦死者は補修……！！！」

FFF団にとつては今日2回目、鉄人の『鬼の補修』ですね。

F×15「……た、助けてくれ……！！！」

鉄人はFFF団の15人を一気に抱えて、Aクラスから出て行った。宗一郎「今更ながら思うが、鉄人は人間か？」

薫「人間のできる芸当じゃないよね……」

その光景を見て、Aクラスの皆は啞然となっていた。

「そこは鉄人だからかな……？」

優璃「明久君、それ答えになってませんよ……」

この後、昼休みが終わるまでにFクラス男子のほとんどがAクラスに乗り込んできて、僕を殺そうとしたが、優璃ちゃんに戦死させられて鉄人の『鬼の補修』送り（2回目）となった。

ちなみにラブレターの送り主はAクラスの久保くんだった・・・（泣）。

第32話&1t;ラブレター事件(後編) >t;(後書き)

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想に書いてくださると助かります。

アンケートにつきましては票が少ないので、票がある程度集まるまで保留にします。m(´・`m

第33話&17:学園祭・準備!>;(前書き)

昨日のユニーク数が普段の1.5倍近くあつて焦りました(笑)。

今回から、清涼祭編です。

第33話&1t：学園祭・準備！>；

・学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希・神谷優璃の答え

A・クラスメイトとの思い出

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも
しれませんね。

一ノ瀬和哉の答え

A・学園での平和な日々

教師のコメント

たしかにFクラスは平和ではありませんね。

土屋康太の答え

A・Hな本（訂正）成人向けの本

教師のコメント

取り消し線の意味はあるのでしょうか？

吉井明久の答え

A・カローリ

教師のコメント

この回答には、君の生命の危機が感じられます。

和哉 side

Fクラス対Aクラスの試召喚戦争から早一ヶ月。

文月学園では、新学年最初の行事“清涼祭”の準備が始まり、活気があふれている。

さて、僕らがFクラスというと・・・

雄二「さて、そろそろ春の学園祭、“清涼祭”の出し物を決めなくちゃいけないんだが・・・」

代表の雄二はだるそうに言った。

雄二「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので後は任せた」

代表は基本興味が無い事にてんで無関心で、丸投げして後はサボるつもりらしい。

雄二「それじゃ、実行委員は島田ということでもいいか？」

島田「え？ウチがやるの？ウチは召喚大会にでるから、ちょっと厳しいかな？」

明久「雄二、実行委員なら、島田さんより姫路さんや葵さんの方が適任なんじゃないの？」

姫路「え？私ですか？」

「姫路さんは仕切り役には向かないと思います（姫路さんが実行委員だと少数意見とかも全部聞いて時間切れになりそうですしね）」
島田「それに瑞希も召喚大会に出るのよ」

葵「じゃあ島田さんは姫路さんとペアを組んだんですか？」

学園祭では、試験召喚システムのお披露目の為、召喚獣による大会を開かれるんだったね。たしか2対2のタッグマッチだったはず。

島田「瑞希に誘われたのよ。瑞希ってば、お父さんをみかえしたいって聞かないんだから」

姫路「はい。お父さんったら、FクラスのみんなをFクラスってだけでバカにしたんです！許せません！」

「まあ否定はできませんけどね・・・（実際大半がそうだし）」

明久「なら僕たちも応援するからFクラス代表としてがんばって」

姫路「はい！」

雄二「そろそろこつちの話を続けていいか？」

そこへ雄二が割り込み、脱線した話を戻した。

明久「ああ、ごめん雄二。で、美波は召喚大会に出るって話だから、あまり負担は・・・」

葵「私が補佐でもしましょうか？」

雄二「いいのか？」

葵「構いませんよ」

雄二「よし、じゃあ島田に川崎、後は任せた」

そういつて雄二は自分の席に戻り寝始めた。

「僕もちよつとトイレに行」

葵「蓮くんに言いつけようか？」

「・・・くのは出し物を決め手からにしよう（蓮兄にサボってることばれたら大変なんだからやめてよ！）」

島田「それじゃあ何か案のある人は手をあげてー」

（何人かいるみたいですね）

ちらほらと何人かから手があがった。

島田「はい、土屋」

康太「・・・写真館」

島田「却下よ！」

葵「ま、まあ一応意見ですし、書いておきますね」

(いや、絶対こんな出し物の許可なんて下りないでしょ！)

島田「次は・・・瑞希」

姫路「えーと、メイド喫茶なんてどうでしょうか？」

康太「・・・メイド喫茶はAクラスと被る」

葵「んー、それだとわざわざFクラスまで来ないから厳しいかな？」

「まあAクラスはメイド・執事喫茶ですけどね」

姫路「そ、それならウエディング喫茶なんてどうでしょうか!？」

葵「斬新でいいんじゃないかな?とりあえず候補に書いておくね」

島田「じゃあ、他には・・・須川は?」

須川「俺は中華喫茶を提案する」

(いまのところ一番まともですね)

島田「中華喫茶って、チャイナドレスでも着せる気?」

と、島田さんは須川にジト目で尋ねた。

須川「いや、そんなイロモ的な格好で稼ごうと思うわけじゃない。

俺が提案するのは、本格的なウーロン茶と、簡単な飲茶を出す店だ。

そもそも、食の起源は中国にあるという言葉から分かるように・・・

「

葵「へえ、そうなんだ。それじゃあ中華喫茶も候補に書いてくね」

とりあえず出し物の候補が3つ決まったところに、

『候補1 写真館』

『候補2 ウエディング喫茶』

『候補3 中華喫茶』

鉄人「皆、学園祭の出し物は決まったか?」

担任の鉄人が戻ってきた。

葵「今のところは、この3つが候補です」

鉄人「ふむ、早く決めて準備に取り掛かるんだぞ」

葵「はい」

鉄人「ああ、それと今回の学園祭での利益はクラスの設備向上に使って良いそうだ」

鉄人のその言葉に、クラス全員が目が輝き始めた。

姫路「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

珍しく姫路さんが率先して動き始めた。

F「それで、どうする？ 利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？」

F「いや、初期投資の少ない写真館の方が」

F「それだと運営委員会の見周りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ」

それに加え、クラスメイトもやる気になり、意見が飛び交い始める。・が、所々で周りを無視し、好き勝手な意見も出始めた。

島田「はいはい！ちよつと静かにして！この3つの中から選んで手を上げること！いいわね！？」

と、島田さんが少々強引に話をすすめる。

島田「それじゃ、写真館に賛成の人！ はい、次はウェディング喫茶！ 最後中華喫茶！」

そして、Fクラスの出し物は中華喫茶に決定した。

島田「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！ 全員、協力するよーに！」

須川「それならお茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

康太「・・・」

厨房担当を名乗り出たのは、須川と康太。

「2人とも、料理は得意なんですか？」

須川「任せておけ。提案したからには、自信くらいある」

康太「・・・紳士のたしなみ」

葵「まず、厨房班とホール班に分かれてもらいますね、厨房班は須川くんと土屋くんのところ、ホール班は明久くんのところに集まってください」

姫路「それじゃ私は、厨房班に・・・」

明久「ダメだ姫路さん！君はホール班じゃないと！」

「そうですね、女子が4人しかいないですから姫路さんはホールのほうがいいかと（そんなに姫路さんの料理はひどいのか？）」

姫路「そうですね、ならホール班にしますね」

「さてと、僕は厨房班にしますね」

秀吉「ワシも厨房班にしようかの？」

島田「ウチもそうしようかな？」

明久「和哉、秀吉、何バカなことを言ってるのさ！？和哉、秀吉はそんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってるじゃないか！」

島田「フンッ！」

バスッ！バスッ！

明久「え？島田さん？僕はサンドバッグじゃないよ！？」

「さすがに庇いきれませぬ。それに可愛いって（蓮兄並の鈍感って・・・それにまた小学生扱いですか・・・）」

麗奈「・・・（ボソッ）今までの行動を直す気はないの？」

麗奈は明久を殴っている島田さんを見て、なにかつぶやいていた。

葵「（ボソッ）落ち着いて島田さん。島田さんもホール班なら明久くんと一緒に料理ができますよ？」

島田「そ、そうね、ここは我慢するわ」

と、葵さんがうまく島田さんの怒りを納めたが・・・

姫路「美波ちゃんだけです！やっぱり私も厨房班にします！」

秀吉「あ、明久よ！お主と島田はやっぱりホールにするのじゃ！」

康太「・・・（コクコク！！）」

明久「ぼ、僕もちょうどホールに出たいとかんがえていたんだよ！（準備の段階でこんなんで大丈夫なんでしょうか？）

と、少し？不安になった和哉であった。

第33話&1t・学園祭・準備!> ; (後書き)

ご意見、ご感想、誤字脱字等がありましたら、感想に書いてくださると助かります。

アンケートは票が少ないので、票がある程度集まるまで保留ということにします。

m (.) m

16話の後書きに詳細があります。

第34話&1t；姫路瑞希・転校の危機>；

・学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください
『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

A・スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のものを用意し、裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを・・・（裏面に続く）

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても

吉井明久の答え

A・ブラジャー

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

和哉 side

放課後。

島田「吉井、木下、一ノ瀬、それと川崎もちよつといい?」

島田さんに声を掛けられた。

明久「ん、なんか用?」

秀吉「なにかよつかの?」

葵「どうしたの?」

「どうかしましたか?」

島田「うん。ちょっと相談なんだけど・・・坂本を何とかして学園祭に引つ張り出せないかな?ほら、あの様子じゃ坂本が仕切らないと・・・」

葵「あはは・・・たしかに全然まとまりないよね」

明久「んぐでもそれは難しいかなあ・・・雄二は興味がないことに関しては本当に無関心だからね」

そういえば、明久は1年の時からゴリラと同じクラスなんだっけ?・
・まあゴリラがいくら頼まれたところで真面目にやるとは思えないけど。

「そもそもどうしてそこまで喫茶店にこだわるんですか?」

秀吉「そう言えば、随分と深刻そうにしておるの?」

島田「・・・本人には誰にも言わないでほしいって言われてたんだけど、事情が事情だし・・・けど、秘密の話だから、誰にも言わないでね?」

島田の真剣な表情に、4人は無言でうなずいた。

島田「・・・実は、瑞希なんだけど・・・ここままだと転校することになるかも知れないの」

明久・秀吉「「え!?!」」

秀吉「ど、どういうことじゃ?」

明久「し、島田さん! 姫路さんが転校ってどういうことさ!?!」

島田「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は、転校しちゃうかもしれないの」

葵「・・・姫路さん病弱だしこの設備(卓袱台に畳)だからかな?」

「たしかに、姫路さんの身体と教室の設備を考えれば、ありえない話ではないですね」

明久「そうだよね・・・って事は、転校は両親の仕事の都合とかじゃないって事?」

島田「そう言う事。だから瑞希も対抗して“召喚大会で優勝して、Fクラスを見直してもらおう”とか考えてるみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

明久「わかった。そういうことなら、なんと少しでも雄二を焚きつけてやる!」

葵「私は優璃や薫に協力してもらえるか聞いてみるね」

「僕もできる範囲で協力しますね」

明久「とりあえず雄二に連絡をとらないとね」

ガラッ!

と、ちようどそこに雄二と麗奈ちゃんが戻ってきた。

雄二「なんだ? なんかしてんのか?」

「ちようどいいところに」

明久「実は・・・(事情説明中)なんだ」

雄二「そうか、姫路の転校か・・・そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だろうな」

明久「不十分? どうしてさ?」

雄二「簡単な話さ。畳に卓袱台という設備、隙間風の通る教室、あとは勉強における成長を促せないバカのクラスメイトたち、畳と卓

袂台は学園祭の利益でなんとかなるとしても教室自体の改修なんて生徒だけじゃ無理だ」

葵「たしかにね・・・」

「なら、僕らは残りの2つを磐石にすべきだね」

麗奈「・・・だったら私も大会に参加して姫路さんのアシスト」

「僕も参加しようか？」

雄二「ああ、だがお前らが組んだら文系だとほぼ負け確定にならないか？」

僕・麗奈「あ・・・」

麗奈「・・・なら私は葵と出る」

葵「あ、私は秀吉くんと演劇部の宣伝でやる予定なんだけど・・・」

秀吉「そうなのじゃ」

葵「あと、Aクラスから宗くんと薫のペアと霧島さんと佐藤さんのペアが出るって聞いたよ？」

雄二「さすがに厳しいか・・・川崎、Aクラスのやつに事情を話して協力を仰げないか？」

葵「一応、今日帰ったら優璃に話してみるけど・・・」

「いつそ姫路さんに蓮兄と組んでもらえば優勝間違いなしじゃないかな」

雄二「いや、そこはFクラスの生徒と組まないところの対策の意味がない」

島田「たしかにAクラスの子と組んで優勝しても、瑞希ならある意味当然よね」

雄二「そういうわけだ、和哉も神楽坂に協力を仰いでみてくれ」
「わかったよ」

秀吉「あとは教室自体の問題じゃな」

（蓮兄に頼めば一瞬で片付くんだけとたださえ迷惑かけてるからできるだけ僕らでなんとかできればいいんだけど・・・）

雄二「学園長に直訴が一番手っ取り早いだろ」

「えーと、でもたしか宗くんがいうにはかなり偏屈だっていつてま

したけど・・・」

雄二「あのな、ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？ 幾ら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状況であるなら、改善要求は当然の権利だ」

明久「それなら早く学園長に会いにいこうよ」

雄二「そうだな。行くのは俺と明久と和哉でいいか？」

葵「ものすごく不安だから私もいくよ・・・」

雄二「それじゃあ島田と秀吉は学園祭の計画でも立てておいてくれ」
そうして僕ら4人は学園長室に向かった。

第34話&1t；姫路瑞希・転校の危機>；（後書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字等がありましたら、感想に書いてくださると助かります。

アンケートは票が少ないので、票がある程度集まるまで保留ということにします。

m (.) m

16話の後書きに詳細があります。

第35話&1t：直談判と取引>；

和哉side

学園長室前にて。

明久「あれ？」

「どうしたの？明久」

明久「いや、中で何か話しをしているみたいなんだけど」

葵「そうみたいですな」

「なにか言い争っているようにも聞こえますな」

雄二「とりあえず、学園長がいるとわかったんだから、さっさと中に入るぞ」

明久「そうだね失礼しまーす」

葵「えーと、ノックして返事が来るまで待つのが普通じゃないのかな？」

「まあ、この2人に常識を求めることが間違いだと思っつよ？」

「そういうながら、僕と葵さんは明久と雄二の後に続いて学園長室に入った。」

学園長室にて。

学園長「本当に失礼なガキどもだねえ。返事を待つくらいの常識は身につけて欲しいものだよ」

葵「すいません・・・」

「すいません（しっかし、学園長って妖怪みたいですね）」

教頭「やれやれ。取り込んでいるというのに、とんだ来客ですね。」

これでは話を続けることもできませんね・・・まさか貴方の差し金

ですか？」

そう言つて、教頭はメガネをいじつたのち、学園長を睨みつけた。学園長「バカを言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなせこい手を使わなきゃいけないのさ？ 負い目があると云う訳でもないの」

教頭「それはどうだか。学園長は隠しごとがお得意の様ですから」
学園長「さつきから言っているように、隠し事なんてないね。あんなの見当違いだよ」

教頭「・・・そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそういう事にしておきましょう」

教頭はそう言つて、学園長室から立ち去つた。

(いったい何の話をしたら学校で『負い目』とか『隠し事』とかが会話にでてくるんでしょうか？)

学園長「んで、ガキどもは何のようだい？」

雄二「今日は学園長に教室設備についてお話があつてきました」

学園長「アタシは今、それどころじゃないんでね。設備のことなら教頭の竹原にいいな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな」

(アンタがいうか！)

雄二「失礼しました。俺は2年Fクラス代表・坂本 雄二」

「おなじく2年Fクラス・一ノ瀬 和哉です」

葵「おなじく2年Fクラス・川崎 葵です」

雄二「そしてコイツが・・・2年を代表するバカです」

学園長「そうかい。坂本と一ノ瀬と川崎と吉井だね。・・・気が変わったよ、話を聞いてやろうじゃないか」

明久「ちよつと待つて！まだ僕は名前を言つてませんよね！？」

「明久、ちよつと黙つて」

僕はそう言つて、明久を制した。

雄二「ありがとうございます」

学園長「さつさと話しな、デカジャリ」

雄二「Fクラスの設備について、改善を要求しに来ました」

学園長「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

雄二「今のFクラスの教室は、まるで学園長の骨や脳みその様に穴だらけで、隙間風が吹きこんで来るような酷い状況です」

(え？なんかすごい罵倒が聞こえるんだけど・・・気のせいかな？)

葵「えーと、代表？」

雄二「学園長の様に戦国時代から生きている老いばれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

(代表・・・少しは我慢しようよ・・・)

雄二「つまり、隙間風が吹き込む様な教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直しやがれクソババア、という訳です」

葵「あの一学園長・・・？」

学園長「・・・(ボソツ) ちょうどいいタイミングさね」

(何がちょうどいいんだろう?)

学園長「よしよし、お前たちの言いたい事はよくわかった」

明久「え？ それじゃあ直して貰えるんですね！」

学園長「もちろん、却下さね」

明久「雄二、このババアをコンクリに詰めてから海に沈めてこよう」

雄二「明久、やめとけ。こんなの捨てたらその海の近郊の人たちが公害に苦しむことになるだろうが」

「どこからツツコミをいれたらいいのかな・・・？とりあえず態度が悪いところからかな？」

葵「・・・それ以前に罵倒のことをつつこむべきじゃないかな？」

僕と葵はすでに2人の沸点の低さにフロアすることを諦めて呆れている。

雄二「まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか？ババア」

明久「そうですね。理由を教えてください、ババア」

学園長「お前たち二人は本当に聞かせてもらいたいと思ってるのか

い？」

学園長も呆れ気味のようだ。

学園長「理由も何も設備に差を付けるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタぬかすんじゃないよ、クソジャリども」

葵「学園長」

学園長「なにさね？」

葵「確かに学園長の言うことも一理ありますが、ウチのクラスには体の弱い子もいるので、せめて旧校舎の老朽化の修復くらいはなんとかならないでしょうか？」

学園長「ふむ。・・・わかったさね。可愛い生徒の頼みだ、こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやろうじゃないか」

(可愛い生徒ねえ・・・さっきまでガキどもって言ってなかったっけ?)

葵「それで、その条件はなんでしょう？」

学園長「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

葵「はい、私も出る予定ですから」

学園長「じゃあ、その優勝商品と準優勝商品は知ってるかい？」

「たしか、優勝賞品は”黒金の腕輪”と”白金の腕輪”と”如月グランドパークのプレオープンペアチケット”と宣伝の紙に書いてありましたね」

学園長「そうさね」

それを聞いて代表は少し身震いをしていた。

雄二「そ、それがどうかしたのか？」

学園長「この”如月グランドパークのペアチケット”なんだがね、ちよつと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

明久「へ？それなら、商品として出さなければ良いじゃないですか？学園長」できるならそうしたいさね。けどね、この話は教頭が進めたとはいえ、文月学園が如月グループと行った契約さね。今更覆す訳にはいかないんだよ」

「それくらい契約する前に気づきましようよ学園長」

学園長「うるさいガキだね。腕輪の開発で手一杯だったんだよ！

それに悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

葵「で、良からぬ噂ってのはなんなんですか？」

学園長「如月グループは、如月グランドパークに1つのジnkクスを作ろうとしているのさ。“ここを訪れたカップルは幸せになれる”ってジnkクスをね」

葵「ジnkクス？・・・どうやってです？」

学園長「プレミアムチケットを使って来た2組カップルを、結婚までコーディネートするつもりらしいのさ。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

雄二「な、何だと!？」

その話を聞いて、代表は身震いをしながら大声を上げた。

明久「どうしのさ、雄二？」

「慌てるに決まってるだろうが！今ババアが言った事は“プレオ―プンプレミアムチケットでやってきた2組のカップルを、如月グループの力で強引に結婚させる”ってことだぞ!？」

明久「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画を僕らは知ってるんだから行かなきゃ済む話じゃないか」

雄二「・・・絶対にアイツは参加して、決勝進出を狙ってくる・・・行けば結婚、行かなくても“約束を破ったから”と結婚・・・俺の、将来は・・・!」

明久「どうしたの雄二？」

葵「多分、霧島さんとチケットが手に入ったら一緒にいく約束でもしたんでしょうね」

「そんなに嫌なら約束なんてしなけばいいのに」

学園長「ま、そんなわけで本人たちの意思を無視して、うちの可愛い生徒たちの将来を決めようって計画が気に入らないのさ」

葵「つまり交換条件は召喚大会の賞品と交換ってことですね？」

学園長「そうさね・・・言っておくけど優勝者たちから強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。お前たち2

人が優勝して、賞品を私に返還しにくるんだよ」

と、学園長は明久と代表を指差して言った。

(そこまで言うんなら、どうして蓮兄や優璃さんに頼まないのかな？・・・ま、今はどうでもいいや)

葵「わかりました。その話引き受けます」

学園長「そうかい。なら交渉成立だね」

雄二「待て。こちらからも提案がある」

学園長「なんだい？」

雄二「召喚大会の形式はトーナメント制で、1回戦が古典だと2回戦は現代国語、という具合に進めていくと聞いている」

学園長「それがどうかしたのかい？」

雄二「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

(そんなの無理でしょ・・・)

学園長「・・・いいさね。点数の水増しとかだったら断っていたが、それくらいなら協力しようじゃないか」

雄二「・・・ありがとうございます」

どうやら代表も何か違和感を感じているようですね。

学園長「それじゃあ任せたからね」

明久・雄二「おう！」

雄二「それじゃあ教室に戻るか」

明久「そうだね」

僕と葵さん明久と代表とは学園長室を後にして教室から出て行った。

第35話&1t:直談判と取引>:(後書き)

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想に書いてくださると助かります。

アンケートは票が少ないので、ある程度集まるまで保留ということにします。m)(.m

第16話の後書きに詳細があります。

第36話&It・学園長と転校生たちの対談>

宗一郎 side

Aクラスにて。

Aクラスは今、清涼祭の出し物（メイド&執事喫茶）の準備の真っ最中だ。

葵「蓮くんいる？」

そこに葵がAクラスに来た。

蓮「どうしたの？」

葵「えつとね」

ふと葵と視線があつた。

葵「ちょうどいいや。宗くんと優璃も来て」

「なんだ」

葵「実はさ・・・」

葵はさつき学園長に頼まれたという件と姫路の転校の件を俺と蓮に話した。

葵「ということなんだけど・・・どう思う？」

「どう考えてもおかしいだろ」

優璃「何故わざわざ明久くんと坂本くんに頼んだのかわからないよ」

葵「やっぱりそうだよね・・・」

蓮「んゝ明久と坂本じゃないといけない理由があるんじゃないのかな？」

「いや、召喚大会での優勝だろ？普通に俺らに頼むのが妥当じゃないのか？」

葵「やっぱりそうだよね」

「とりあえずあのババアを問い詰めるか」

俺たち4人は学園長室に向かった。

学園長室。

「ババア、入るぞ」

俺は学園長室のドアを蹴り飛ばして学園長室に入った。

優璃・葵・蓮「失礼します」「」

学園長「今度はあんたらかい・・・と川崎はまただね」

葵「はい」

学園長「で、何のようさね？アタシは忙しい身だからね、手短に頼むよ」

「そうか・・・なら、坂本たちへの頼みごとについてだ」

学園長「・・・アンタ話したのかい？」

ババアは葵を見て言った。

葵「はい、別に他言無用とも言ってなかったの」

学園長「・・・普通はそうゆうことは伏せておくものだよ・・・

それがどうかしたのかい？」

（あくまでとぼけるつもりか・・・）

「なぜあの2人を擁立したんだ？チケットの回収なら俺らに頼めばいいはずだろ？」

学園長「・・・仕方ないさね。アタシの無能をさらすような話だから出来れば伏せておきたかったんだがね・・・」

学園長「・・・もといクソババアはようやく事情を話す気になったらしい。

葵「無能？じゃあ学園長はチケットじゃなくて腕輪のほうを回収したかったんですか？」

学園長「そうさね。アタシにとって、企業の目論見なんてどうでもいいのさ」

「なるほどな。腕輪になんらかの欠陥でもあったんだな」

学園長「・・・その通りさね」

ババアは顔をしかめながらそう言った。

蓮「僕たちに頼めないことを考えると、一定値より点数が高い人が使うと暴走するといったところかな？」

学園長「今聞いたとこまでそこまで言い当てるのかい・・・」

優璃「ちなみにその腕輪はどれくらいで暴走するんですか？」

学園長「召喚フィールド作成用のほうの“黒金の腕輪”は3000点くらいまでなら耐えられるんだけどねえ・・・もうひとつの同時召喚用のほうの“白金の腕輪”は1500点程度で暴走する可能性があるねえ」

優璃「それって私たちだけでなくCクラス以上の人でもアウトですよね・・・」

宗一郎「でも何故だ？俺らの持つてる“紅の腕輪”と原理は一緒じゃないのか？」

学園長「あんたらは教師と同じ仕様になっているからできたのさ。あんたらと観察処分者や一般生徒は別さね」

「なるほどな」

蓮「はあ・・・その腕輪、貸してください」

学園長「何言ってるんだい？無理に決まってるさね」

(・・・何する気だ、蓮?)

蓮「なら交換条件はこの欠陥をマスコミに流さないこととどうでしょう？」

学園長「・・・アタシを脅迫するつもりかい」

蓮「人間が悪いですね、単なるお願いですよ」

と蓮は笑顔で答えた。

「いや、どう考えても脅迫だろ」

学園長「・・・何する気さね」

蓮「何って・・・腕輪を直すに決まってるじゃないですか」

蓮はとんでもないことをあっさり言っただけだ。

学園長「・・・アンタは何を言ってるんだい？」

蓮「腕輪を修復する、と言いましたが？」

学園長「このアタシでも難儀しているものを修復できるわけがないさね」

蓮「そもそも学園長に選択の余地はあるんですか？」

蓮は説明するのがめんどくさくなつたのかババアを再び脅した。

学園長「・・・わかつたよ。で、いつまで貸せばいいんだい？」

蓮「明日の放課後までで十分です。それまでに修復方法とそれにかかる時間を学園長にお教えします」

学園長「・・・わかつたさね。期待しないで待つとくよ」

ババアは渋々頷いた。

「それじゃあ腕輪のことは蓮に任せるか・・・それじゃあ俺たちは聞くこと聞いたし帰るわ」

俺たちは聞くことは聞いたので、学園長室から出て行くこととしたが、学園長「待つさね！・・・あんたらの中で召喚大会に出るやつはいるのかい？」

「ん？今のところ俺と葵は出るぞ」

学園長「あんたらは点数を総合科目で4000点代までに制限させてもらつよ」

優璃「私たちが優勝したら困りますもんね・・・」

「もちろん見返りはあるんだろうな」

学園長「・・・」

ババアは思ってもみなかつた返答だったのか黙り込んでしまった。

優璃「宗くん。その見返りの分、私が使ってもいいかな？」

「何かあるのか？」

優璃「うん。学園長、私たちの点数を制限する代わりに2-Fクラスに清涼祭の期間だけ空き教室（Cクラス並の設備）を使わせてあげてください」

学園長「・・・ふむ。それくらいならかまわないさね」

「さてと、話は終わったな。それじゃあ帰るか」

蓮「そうだね」

「じゃあな、クソババア」

優璃・葵・蓮「失礼しました」

そう言つて、俺たちは学園長室を後にした。

宗一郎 side out

第36話&17:学園長と転校生たちの対談>:(後書き)

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想に書いてくださると助かります。

アンケートは票が少ないので、ある程度集まるまで保留ということにします。m)(.m

第16話の後書きに詳細があります

第37話&1t;清涼祭スタート!>

・学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、リーダーはどのように選ぶべきですか？
また、そのときのリーダー候補もあげてください。』

選択肢・・・「?かわいらしさ ?統率力 ?行動力 ?その他」

土屋康太、一ノ瀬和哉の答え

A・「?」候補・川崎葵・水無月麗奈・姫路瑞希

教師のコメント

甲乙つけがたいと言ったところでしょうかね。

吉井明久の答え

A・「?」候補・神谷優璃(訂正) 水無月麗奈(訂正) 川崎葵

(訂正) 姫路瑞希(訂正) 木下秀吉(訂正) 島田美波

教師のコメント

用紙についている血痕と大量の訂正跡がきになるところです。

坂本雄二の答え

A・「?」(結婚相手)「候補・霧島翔子

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが、用紙を持ってきてくれたのでしょうか？

桐谷宗一郎の答え

A・「?????」（彼女）」候補 - 武内薫

教師のコメント

あなたならそう書くと思っていました。

明久side

清涼祭初日の朝。

僕たちは優璃ちゃんの進言おかげでFクラスの教室ではなく、隣の空き教室を使つて出し物をする事となつていて、その空き教室は中華風の喫茶店へと変わつていた。

「それにしても助かつたね。さすがにFクラスの教室じゃあ汚すぎ
て人が寄りつかないもんね」

秀吉「そうじゃのう。神谷のおかげで助かつたのじゃ」

葵「そう思ふんだつたら、優璃と一緒に清涼祭をまわつてあげなよ」

「え?どうしてさ?優璃ちゃんならわざわざ僕とまわらなくても可愛
いから誰でもまわつてくれるんじゃない?」

和哉「これは蓮兄より酷いかも・・・」

葵「・・・鈍感」

秀吉「仕方ないのじゃ明久なのじゃから」

葵「それもそうだね」

(意味が分からないよ?)

麗奈「・・・明久、味見してみて」

僕の後ろにいつの間にかいた麗奈ちゃんは、お皿に飲茶とゴマ団子をのっけてもってきていた。

「ん?・・・おいしそうだね」

和哉「これ麗奈さんが作ったんですか?」

麗奈「・・・うん」

秀吉「これワシらが食べていいののか?」

麗奈「・・・どうぞ」

僕と和哉と秀吉と葵さんは作りたてで温かいゴマ団子を勢いよく頬張った。

和哉「流石は麗奈さんと言ったところでしょうか?」

葵「本当だね」

「そだね。表面はカリカリで、中はモチモチで食感も良いね!」

秀吉「これはいけるのじゃ」

麗奈「・・・よかったノノ」

そう言つと、麗奈ちゃんは恥ずかしかったのか顔を赤くして俯いてしまった。

「それで、Aクラスの人たちに協力してもらえた?」

葵「うん。全面的に協力するように優璃がAクラスの皆を説得した

みたいだから」

和哉「何から何まで優璃さんに世話になりっぱなしですね・・・」

雄二「おーいお前らもそろそろ始まるから準備始めろよー」

と教卓のほうから雄二が僕らに向かって言った。

葵「さてと、それじゃあ秀吉くん1回戦にいくよ」

秀吉「わかったのじゃ」

和哉「がんばってね」

麗奈「・・・わたしもいつてくる」

そう言つて、麗奈ちゃんと葵さんと秀吉と一緒に教室から出て行った。

「そういえば和哉は誰と組んだの？僕は雄二と組んだけど」

和哉「ん？結局決まらなかったの、不参加ですよ」

「そうなの？麗奈ちゃんは？」

和哉「優璃さんと組みましたよ。それより最初は明久も休憩なんですよね？」

「うん。とりあえず1回戦が終わるまでは店番はないからね」

和哉「なら召喚大会でも見に行きませんか？」

「うん。みんなの応援でもしようかな」

和哉「なら校庭へいきましよう」

「そうだね」

こうして僕と和哉は試合会場に向かった。

試合会場にて。

司会「それでは、試験召喚大会1回戦Cブロック第1試合をはじめます。3回戦までは一般公開もありませんので、リラックスしてがんばってください」

で、1回戦にでてきたのは優璃ちゃんと麗奈ちゃんだった。

「あ、優璃ちゃんと麗奈ちゃんだね」

和哉「相手はEクラスのコンビですね。まあ二人なら大丈夫ですね
司会「では、始め！」

優璃・麗奈・E1・E2「」「」「サモン！」」「」

4人の掛け声で、場に召喚獣が姿を現した。

・教科（物理）

A - 神谷優璃（317点）・F - 水無月麗奈（295点）

V S

E・E1(85点)・E・E2(91点)

勝負は一瞬で決まった。

開始と同時に麗奈ちゃん、の召喚獣がEクラスの1人の召喚獣を矢で速攻で打ち抜き、その間に優璃ちゃん、の召喚獣がサーベルで相手の召喚獣を一刀両断していた。・・・この間わずか3秒。

司会「・・・勝者、神谷・水無月ペア」

司会もあまりの早さの決着で啞然となっていた。

和哉「さすがですね」

「そうだね・・・でも、優璃ちゃんは物理苦手なの？総合点からすると低い気が・・・」

和哉「蓮兄と宗くと優璃さんと葵さんは点数制限をかけられてるんですよ」

「どうしてさ？」

和哉「・・・他の人には言わないでくださいよ」

その和哉の真剣な態度に、僕は無言で頷いた。

和哉「どうも僕たちが空き教室が使えるようになったのは優璃さんたちの点数制限が交換条件だったみたいなんです」

「え？どうしてそこまで・・・？」

和哉「そこは自分で考えてください・・・(どう考えても明久がいるからでしょうが・・・)」

何故か和哉に呆れられた。

「？意味が分からないよ」

和哉「あとFクラスから優勝者を出すんですから明久もがんばってくださいよ」

「もちろんさ！」

prrrr

雄二から電話がかかってきた。

「どうしたの？雄二」

雄二「明久！何してるんだ、次が俺たちだぞ。さっさとこい」

「う、うん。わかったよ」

僕は雄二に呼ばれて、そのまま試合前の待ち合い室に向かった。

明久 side out

宗一郎 side

Aクラスにて。

「で、結局腕輪はどうだったんだ？」

蓮「ん？まあ欠陥箇所も見つけて、修復方法も教えたから大丈夫だよ。でも、も、せっかく修復したのに学園長が何故か落ち込んでただけだ」

「そうか・・・（ババアのプライドなんざどうでもいいか）なら後はあいつらが優勝すればいいだけだな」

蓮「そうだね。まあ優勝できなくても、優璃が学園長を脅してでも設備の改修させるだろうから問題ないけどね」

「まったく・・・優璃はつくづくお人よしだな」

蓮「明久がいるからね」

「ああ・・・そういうことか」

蓮「それと、教頭をこの学園から追放したいんだけど」

「は？どういうことだ？」

蓮「文月学園の評判を落とす気らしい」

「・・・は？まあここは世間体に弱いことは分かるが、何故教頭がそんなことする必要がある？」

蓮「大方、他の私立高校のお偉いさんに金でも積まれてるんじゃないかな」

「なるほどな。だが、その評判を落とすネタが教頭にはあるのか？」

蓮「そのネタが腕輪の欠陥なんだよ」

「・・・わざわざ腕輪の修復をかってでたのはそれが理由か？」

蓮「ご名答だね」

「わかった。で、俺はどうすればいい？」

宗一郎 side out

第37話&1t;清涼祭スタート!>t; (後書き)

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想に書いてくださると助かります。

アンケートは票が少ないので、ある程度集まるまで保留ということにします。m)(.m

第16話の後書きに詳細があります

第38話&1t;召喚大会1回戦と営業妨害と・・・>t; (前書き)

総合評価100ptを突破しました！

これからも『バカと天才？たちと召喚獣』をよろしくお願いします。

m (.) m

第38話&1t;召喚大会1回戦と営業妨害と・・・>

明久side

僕が待ち合い室に着いたときにはもう僕たちの順番までまわってき
ていた。

司会「次は坂本・吉井ペア対中林・三上ペア」

さあ僕たちの出番だ。相手はEクラスのペアだね。

中林「相手はたかがFクラスのペア。楽勝ね」

雄二「明久、肩慣らしといくか」

「おう！」

中林「何よ！たかがFクラスの分際で！」

雄二「言ってる言ってる。今に分かる」

相手のEクラス代表の中林さんは雄二と僕にがんを飛ばしてきてい
たが、雄二と僕はそれを無視。

司会「では、始め！」

僕・雄二・中林・三上「」「」「サモン！」「」「」

・教科（物理）

F - 坂本雄二（152点）・ F - 吉井明久（61点）

V S

E - 中林宏美（94点）・ E - 三上美子（97点）

中林「え？Cクラス並の点数!？」

雄二「おや？Fクラスの俺よりみすばらしい点数のEクラス代表、
どうかしたのか？」

雄二は中林さんを罵倒を交えて挑発した。

中林「Fクラスの分際で私たちEクラスをバカにすんな！」

中林さんはまんまと雄二の挑発に乗って、召喚獣を突撃させてきた。

雄二「明久！」

「オツケー、それ！」

僕は召喚獣を操作して、中林さんの召喚獣の突撃をかわし、そのとき足を引きつけて、中林さんの召喚獣をこかした。

そこに・・・

雄二「勉強してから出直してきやがれ！」

雄二の召喚獣がこけているEクラス代表の召喚獣を捕まえてタコ殴りにした。

無論、雄二のほうが点が高いので、何発も攻撃をくらい続けると、中林さんの召喚獣は消え去った。

雄二「これで、2対1だな」

「そうだね」

三上「・・・棄権します」

中林さんのペアの三上さんは中林さんが自爆してしまって、戦意喪失したのか、立会いの先生に棄権すると言って、召喚フィールドから出て行った。

司会「勝者、坂本・吉井ペア！」

「結構余裕だったね」

雄二「だな。それより、さっさと戻って店を手伝うか」

「そだね」

僕と雄二は喫茶店に戻ることにした。

教室前にて。

??「おい！なんだよこれ！？こんなもんまずくて食えるか！」

??「こんなまずいもんよく商品として出せるな！」

教室から廊下まで響く大声が聞こえてきた。

島田「ちようどよかったわ。吉井、坂本」

そして、教室の扉の近くにいた島田さんが駆け寄ってきた。

「どうしたの？」

島田「営業妨害よ」

「まさか？そんな暇な人がいるの？」

島田「そのまさかよ・・・」

雄二「川崎や一ノ瀬はどうした？あいつらならうまく対処しそっだが」

島田「残念ながら、二人とも休憩中よ」

雄二「わかった。とりあえず“パンチで始まり、キックで繋ぎ、プロレス技でしめる交渉術”を試してみるか」

「雄二・・・はなから交渉する気ないよね・・・」

雄二「気にするな」

教室にて。

康太「・・・いいところに」

雄二「で、その連中は？」

康太「・・・あれ」

康太はそう言つて、真ん中らへんの椅子に座っているモヒカン？みたいな髪型をしているやつと丸坊主のやつを指差した。

雄二「あれか」

??「おい！ここの責任者呼んでごゴペッ！」

雄二「私がクラス代表の坂本雄二です。何かご不満な点でもございましたか？」

雄二はとても紳士的な態度で頭を下げた。ただし坊主のほうを殴つた後に。

??「いや・・・不満なものも、今連れが殴らr（バチバチバチバチ！）」

いつのまにか帰ってきていた和哉がモヒカンのほうにスタンガンを突きつけていた。

和哉「どうなさいましたか、お客様？」

と、和哉は最高の笑顔で接客していた。右手にスタンガンを持って、

・

??「ふざけんなこのやろう！お前がすた（バチバチバチバチ！）」

??「お、おい常村！？この野郎！」

と、丸坊主のぼうが和哉に殴りかかるうとするが、

ドゴツ！

雄二が丸坊主のぼうを蹴り飛ばしていた。

雄二「暴力はいけませんよお客様」

（人のこと言えないよね雄二・・・）

和哉「さて最後に、クラス代表によるプロレス技による交渉が待っています、どうなさいます？」

常村「わ、わかった！こちらからはこの夏川を出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

夏川「お、おい常村！俺を売る気か！？」

和哉「そうですか・・・では」

そう言つて、和哉はスタンガンを常村先輩に最大出力で当てた。無論、常村先輩が意識を保っていられるはずもなく気絶した。

夏川「お、おい！常村！」

雄二「おっと、そちらのお客様には・・・」

雄二はそんなことおかまいなしといわんばかりに夏川先輩の腰を掴み、

夏川「ちよつと待て！どうしてそんな大技をグベツ！」

「しつかり極まってるね・・・」

雄二はバツクドロップを完璧に決めて何もなかったかのように僕たちのところに戻ってきた。

雄二「島田、鉄人を呼んできてくれ。この常夏コンビを補修室に幽閉する」

島田「わかったわ」

島田さんはこの2人への制裁のため、鉄人を呼びに行った。

雄二「お客様お騒がせして申し訳ありませんでした。お詫びとして今お出ししている商品は全品半額とさせていただきます。ですのでごゆっくりとお食事をお召し上がりくださいませ」

客「これがまずいって・・・あいつら味覚おかしいんじゃないの？」

客「ゴマ団子追加で3つお願いします」

「あ、はい。ゴマ団子3つですね」

客「こっちもゴマ団子2つ」

和哉「了解しました」

麗奈「・・・ただいま」

優璃「えーと、この方たちはなんでこんなところで寝てるんですか？」

ちよつどそこに麗奈ちゃんが優璃ちゃんをつれて戻ってきた。

雄二「営業妨害されたから、正義の鉄槌をくだしたまでだ」

「邪魔だからとりあえず鉄人に持ってもらおう予定だよ。そうだが何か食べる？優璃ちゃん」

と言つて、僕は優璃ちゃんを席に案内してからメニューを手渡した。

優璃ちゃんはメニューを見て、

優璃「えつと、じゃあゴマ団子を」

「うん。わかったよ」

しばらくして、

麗奈「・・・ゴマ団子できた」

「はい」

僕は麗奈ちゃんが作ったゴマ団子を持って、優璃ちゃんの席に向かった。

「お待たせしました、ゴマ団子とサービスの飲茶です」

優璃「ありがとう・・・あの明久くん」

「ん？どうかしたの？」

優璃「あの、その・・・一緒に食べませんか？／／／」

「え？・・・まあ今は客も少ないしいいよ」

優璃「えっと、じゃあ・・・食べさせて／＼／＼／＼」

そう言った後、優璃ちゃんは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

(へ?どうゆうこと)

「えっと／＼／」

優璃「あ、無理なら無理で・・・／＼／」

「えっと、アーン／＼／」

そう言つて、僕は箸でゴマ団子をつまんで、優璃ちゃんの口元まで持っていった。

優璃「ふえ!?えっと、その・・・アーン／＼／」

パクツ・・・モグモグモグモグ

優璃「・・・おいしい、です／＼／」

優璃ちゃんはやっぼど恥ずかしかったのか、耳まで真っ赤にしていた。

「(か、可愛い・・・襲つてしまいたい・・・!)はっ!だめだ!

何を考えているんだ僕は!？」

島田「何をサボってるのかしら吉井・・・!」

「え・・・?」

恐る恐る振り返ると・・・そこには、ドス黒いオーラを出した姫路さんと島田さんがいた。

姫路「ちよつとOHANASHIがあります吉井くん。こつちに来

てくださいね・・・!」

「絶対お話じゃないよね!?その右手のフォークは何!？」

島田「大丈夫よ・・・!5本くらい心臓にさした後に話くらいは聞いてあげるから・・・!」

優璃「えっと、なんでちよつとお話してたくらいでこんなことに・・・」

「ちよつと2人ともし?流石に流血沙汰はまずいつて!」

葵「二人とも・・・何してるのかな?」

葵さんがいつの間にか戻ってきていて、姫路さんと島田さんに満面の笑みで質問していた。目が笑っていないけど・・・

姫路「吉井くんが店番をサボって女の子とイチャイチャしてるのが悪いんです!」

島田「そうよ!」

葵「・・・そう。2人ともちよつとこつち来てくれるかな」

島田「離しなさい!川崎!」

姫路「まだ吉井くんとのOHANASHIが・・・」

そう言つて、葵さんは二人の肩を掴んで無理やり引つ張つて厨房に入つていった。

「えつと、助かったのかな・・・?」

優璃「えつと、ごめんね・・・私が無理言つたから・・・」

「ううん。僕がサボつてたのが問題だったわけだし気にしないで」

優璃「で、でも・・・」

「ならまた後で優璃ちゃんのところの出し物を見に行くからそのとき何かおごつてくれればいいよ」

優璃「は、はい。それじゃあ待つてますね!／／／」

そう言つて、優璃ちゃんは嬉しそうに教室から出て行った。

第38話&17:召喚大会1回戦と営業妨害と・・・>;(後書き)

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想に書いてくださると助かります。

アンケートは票が少ないので、ある程度集まるまで保留ということにします。m)(.m

第16話の後書きに詳細があります

第39話&1t;召喚大会2回戦>

明久side

校庭の召喚大会特設ステージにて。

司会「それではこれより2回戦を開始します」

「雄二、次の相手は誰なの？」

雄二「たしか3つ先の試合で相手は卑怯者ねもととヒステリック小山のペアだ」

「うわぁ・・・それはまた・・・」

雄二「とりあえず、試合でも見とくか」

「そうだね」

司会「では、神楽坂・木下ペア対加藤・黒崎ペア。両ペアは所定の位置についてください」

雄二「これはみるまでもなさそうだな・・・」

司会「それでは、始め！」

蓮・優子・加藤・黒崎「」「」「サモン！」「」「」

・教科（世界史）

A - 神楽坂蓮（379点） ・ A - 木下優子（372点）

VS

C - 加藤寿也（499点） ・ C - 黒崎トオル（161点）

明久side out

優子 side

(・・・え！？何あの点数！相手の人たちってCクラスよね！？)
蓮「まいったね・・・とりあえず、優子ちゃんは加藤さんの足止めをお願いするね。・・・できる？」

「やってみるわ」

蓮「それじゃあ、その間にもう一人を倒して、2対1に持ち込んで戦えば何とかなるかな」

加藤「ほな、とつとと終わらせるで！」

そう言つと、加藤さんの召喚獣はアタシの召喚獣に突撃してきたので、回避しようとしたが、

「え？どうして動かないのよ!？」

アタシの召喚獣はピクリとも動かない。

加藤「ワイの腕輪の能力“石化”や、まあ消費点数が大きいからあんま使いたくないねんけどこのさい仕方ないわ」

そう言つと、加藤さんの召喚獣は身動きのとれないアタシの召喚獣を大剣で切り飛ばした。

A・木下優子(36点)

VS

C・加藤寿也(349点)

加藤「さてと、次でしまいじゃ！」

そう言つて、再度加藤さんの召喚獣がアタシの召喚獣に切りかかった。

(やられる・・・!)

そのとき不意にアタシは目を瞑ってしまった。

司会「勝者、神楽坂・木下ペア！」

と、ほぼ同時にアタシたちが勝者宣告された。

(え？どうなってるの?)

A - 神楽坂蓮 (361点) ・ A - 木下優子 (36点)
VS

C - 加藤寿也 (0点) ・ C - 黒崎トオル (0点)

優子 side out

明久 side

「ねえ、雄二……」

雄二「なんだ……」

僕と雄二は啞然となっていた。

「まさか同学年で僕並に召喚獣の操作が巧い人がいるとは思わなかったよ……」

何があつたかと言うと、加藤くん召喚獣が木下さんの召喚獣にトドメをさそうとしたとき、ちょうど黒崎くんの召喚獣を倒した蓮の召喚獣が加藤くんの召喚獣に向けて、武器のサーベルを放り投げた。

そのサーベルが加藤くんの召喚獣の急所のひとつ、首を跳ねて加藤くんの召喚獣を戦死させた。

(正直僕でも真似できる気がしない……)

雄二「ま、まあ最悪当たった場合は棄権してくれるんだから気にするな！今は目の前の試合だ！」

「そ、そうだね……」

僕と雄二は今の試合のことを考えず目の前の試合に集中することにした。

司会「次は坂本・吉井ペア対根本・小山ペア」

明久 side out

宗一郎「さてと、俺らの出番はまだ結構先だな」

「そうだね。とりあえず見学してようよ」

雄二「根本！コレを見る！」

と、試合会場から聞こえてきたので、そっちのほうをみると、坂本くんが何か持つて変態・外道・女装趣味と三拍子揃った卑怯者ねもこくと話し込んでいた。

「何あれ？」

宗一郎「さあな？」

根本「そ、それは！？わ、わかつた坂本。降参する。この試合はお前たちの勝ちでいい。だからその写真は・・・」

雄二「Cクラス代表！コレが欲しいか！」

小山「いいわ。私たちの負けよ」

司会「勝者、坂本・吉井ペア！」

「え？（一体何渡したんだろ？）」

宗一郎「・・・アレが何なのか大体わかつたわ」

「何なのあれ？」

宗一郎「多分だが、根本がAクラスに宣戦布告の準備ができてると言ってきたときの女装写真だ」

「あー、なるほどね・・・（坂本くんもなかなかひどいね・・・）」

根本「頼む友香！説明させてくれ！」

と、卑怯者ねもこは小山さんに頼み込んでいた。

小山「恭二・・・別れましょ」

根本「友香ー！！！」

そう叫んだ後、卑怯者ねもこくんは真っ白に燃え尽きていた。

「さすがに根本くんが不憫すぎるよ・・・」

宗一郎「自業自得だな」

第39話&1t;召喚大会2回戦> ; (後書き)

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想に書いてくださると助かります。

アンケートは票が少ないので、ある程度集まるまで保留ということにします。m) (. m

第16話の後書きに詳細があります

第40話&It:閑古鳥と葉月ちゃんと・・・>

明久side

僕たちは2回戦を雄二の策略（根本恭二写真集『生まれ変わった私を見て!』）を脅迫材料に不戦勝を収め、教室に戻ってきた。・・・のだが、

「ただいまー・・・ってあれ？全然人がいないね」

雄二「そうだな」

葵「あ、おかえりー、明久と坂本くん。と3回戦進出おめでとう」

「ありがとう。あれ？麗奈ちゃんは？」

葵「麗奈なら2回戦が終わってそろそろ戻ってくると思うんだけど」

そこへ、麗奈ちゃんと秀吉の声と小さな女の子が教室に入ってきた。

秀吉「で、探しているのはどんな奴なのじゃ？」

と、秀吉は連れてきた小さな女の子に話しかけていた。

??「葉月はお兄ちゃんを探しているんです！」

秀吉「お兄ちゃんか？名前はわかんかのう？」

葉月「あう・・・わからないです・・・」

雄二「秀吉、そのちびっ子は誰かに用なのか？」

と、雄二が口を挟んだ。

秀吉「そのようなのが、どうも家族の兄ではなく、名前もわか

らんそうじゃ」

雄二「なら、何か特徴だけでもわからないか？」

葉月「えっと、バカなお兄ちゃんでした」

秀吉「該当者が多すぎるのじゃ」

雄二「そうだな。・・・他に特徴はないか？」

葉月「えっと、すっごくバカなお兄ちゃんでした！」

雄二「明久ー呼ばれてるぞ」

(失敬な！それにこんな小さな女の子の知り合いなんていないよ？)
葉月「あ！バカのお兄ちゃん！」

小さな女の子は僕に目掛けて飛びついてきた。

雄二「明久、モテないからって小学生は……」

「何を想像した！？このゴリラ！……あと僕に小学生くらいの知り合いなんていないはずなんだけどなあ」

葉月「ひ、ひどいです……ファーストキスもバカのお兄ちゃんにあげたのに……」

島田「瑞希！」

姫路「美波ちゃん！」

姫路・島田「やるわよ！！！」

いつのまにか召喚大会帰ってきていた姫路さんと島田さんが物凄い殺気を出しながら、僕に迫ってきた。

「うわあああああ！！(殺される！？)」

葵「……まだOHANASHIが足りなかったのかな？」

と、言いながら葵さんと麗奈ちゃんが僕と2人の前に立ちふさがった。

須川「これより異端審問……」

加えて、Fクラスの男子まで黒装束に着替え……

麗奈「……約束……守らなかったからもうお菓子作らない」

と、麗奈ちゃんが一言言う……

F×15「そ、そんな……」

と、Fクラスの男子たちは黒装束のまま膝をついて落ち込んでいた。

島田「さてと、吉井。腕の15本は覚悟しなさい！」

姫路「さあ、吉井くん。OHANA」

葵「はいはい。二人ともこっちにいらっしやい」

と、言っただけで葵さんは姫路さんと島田さんを空き教室に連行していった。

「助かったよ……ありがとね、麗奈ちゃん(ナデナデ)」
と、言っただけで僕は麗奈ちゃんの頭を撫でた。

麗奈「……!?!?!(ササツ)……き、きにしないでいい／＼」

麗奈ちゃんは顔を真っ赤にしながら僕の手を退けていた。

(?恥ずかしかったのかな?)

雄二「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

葉月「そういえば葉月、ここに来る途中で変な噂を聞いたです！」

「どんな話なの？葉月ちゃん」

葉月「中華喫茶はまずいから行かないほうがいい、って」

「それって……」

雄二「多分、常夏コンビだろ。探し出してもう1回交渉(パンチから始まり、キックで繋ぎ、プロレス技で締める)するか」

「でも、そこまで暇じゃないんじゃないかな？」

雄二「どうだかな。ひとまず噂の根源を見つける必要があるな」

麗奈「……なら昼ごはんのついでに敵情視察してくる」

「あ、僕もいくよ」

葉月「バカのお兄ちゃんがいくなら、葉月も行くです！」

雄二「とりあえず、店番は秀吉と川崎に任せて後は敵情視察ついでに飯に行くか」

秀吉「任せるのじゃ」

葵「あと、和くんと土屋くんを見つけたら戻ってくるように言っていて」

雄二「わかった」

「で、葉月ちゃん、中華喫茶の話はどこで聞いたの？」

葉月「えつとですね……短いスカートを履いた、綺麗なお姉さんがいっぱいいるお店……」

「なんだって!?雄二、これはすぐに向かわないよ！」

雄二「そうだな明久!我がFクラスの成功のために、(低いアングルから)しっかりと調査しないと！」

と、僕と雄二は全力ダッシュで駆け出した。

明久 side out

後の残された人たち。

島田「最低ね」

姫路「吉井君、酷いです・・・」

葉月「お兄ちゃんたちのバカ！」

葵「しかし代表が素直に行くとは思わなかったなあ」

姫路「え？どういうことですか？」

葵「だって、Aクラスのメイド喫茶だと思うよ？」

秀吉「なるほどのう。Aクラスには霧島がおるからのう」

麗奈「・・・理由はともあれ優璃と翔子は喜ぶと思う」

葵「そうだね」

第40話&17・閑古鳥と葉月ちゃん・・・> (後書き)

ご意見、ご感想、誤字脱字等ありましたら、感想に書いてくださると助かります。

アンケートは票が少ないので、ある程度集まるまで保留ということにします。m)(.m

第16話の後書きに詳細があります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1068z/>

バカと天才？たちと召喚獣

2012年1月14日09時45分発行